

630.2-Sh94
1200500749467

630.2
94



始



25.11.28

A-668

光



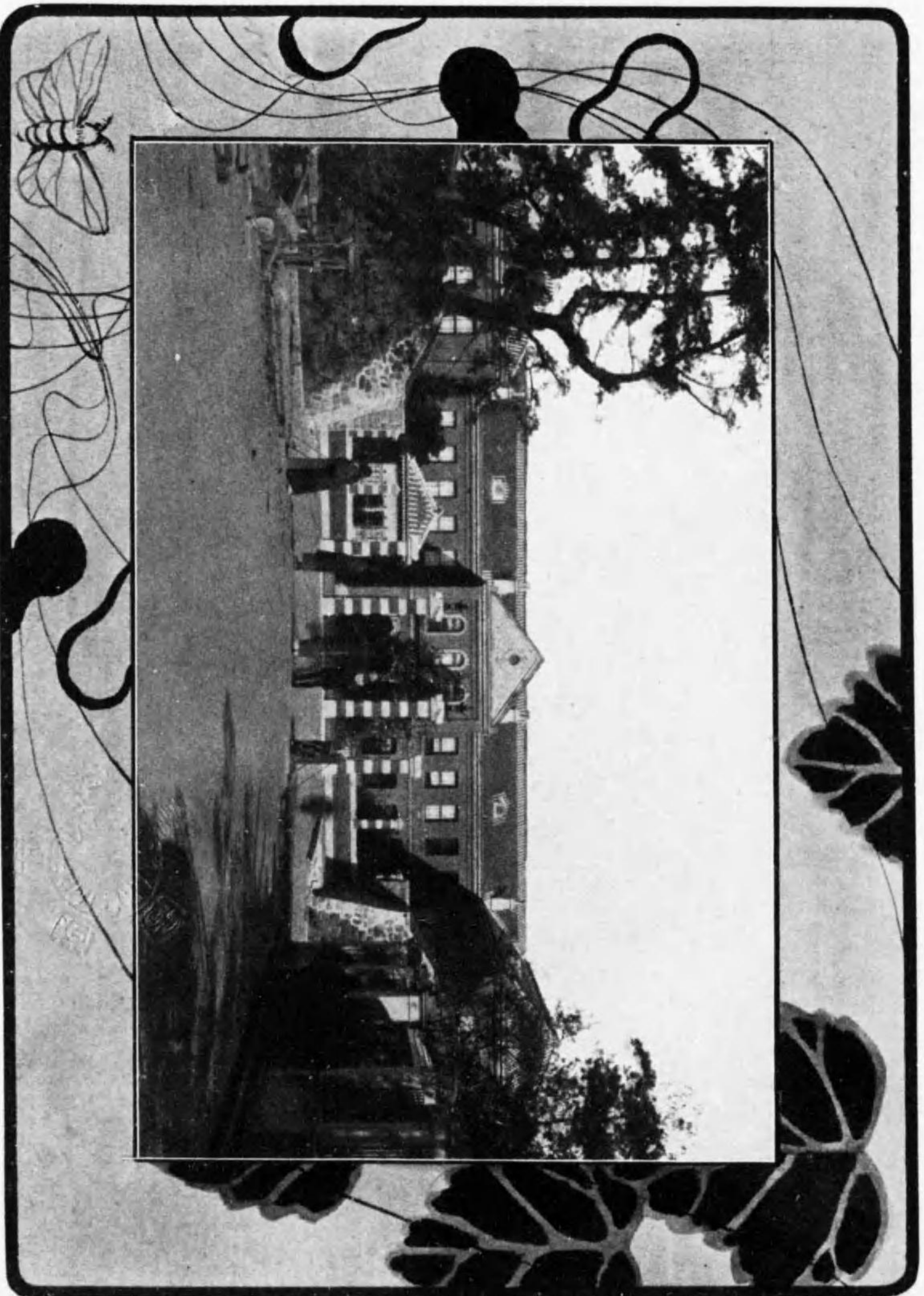
静岡縣
蚕糸業
沿革史

6302
SH 7K

明治
45. 6. 21
内交



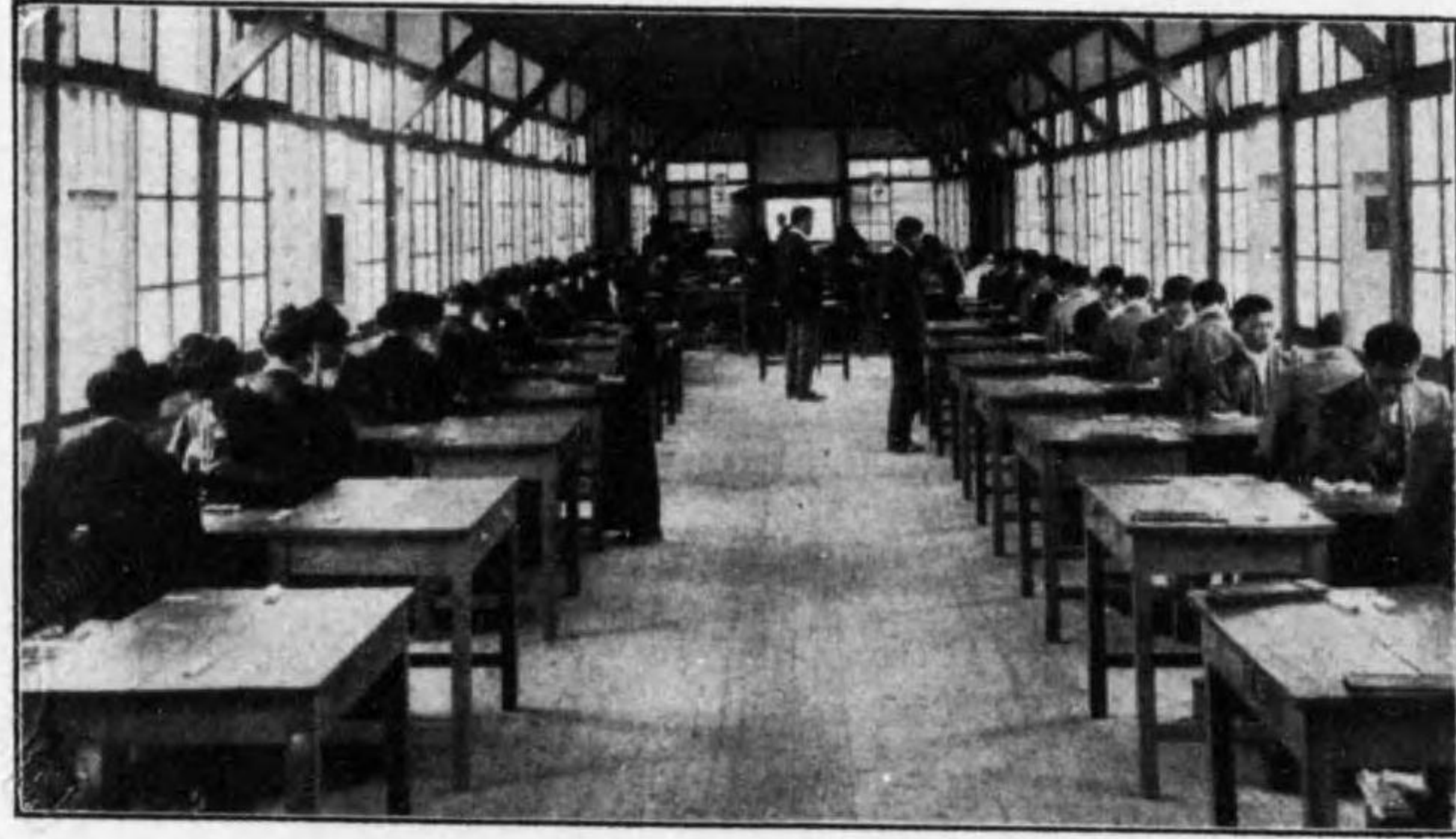
靜岡縣廳



(一其) 所支松濱所締取業蠶縣岡靜



同上(其二)



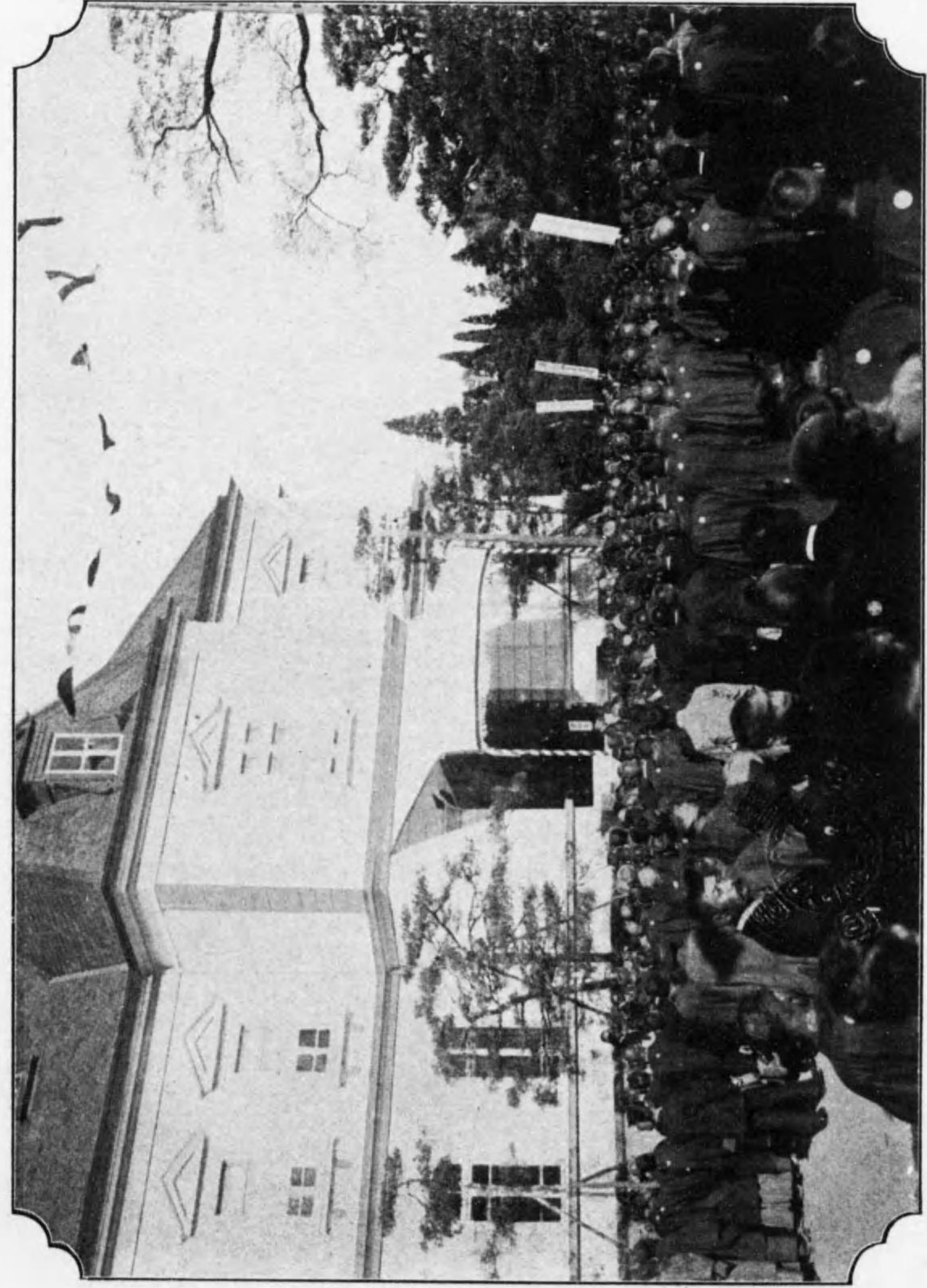
同上古津出張所



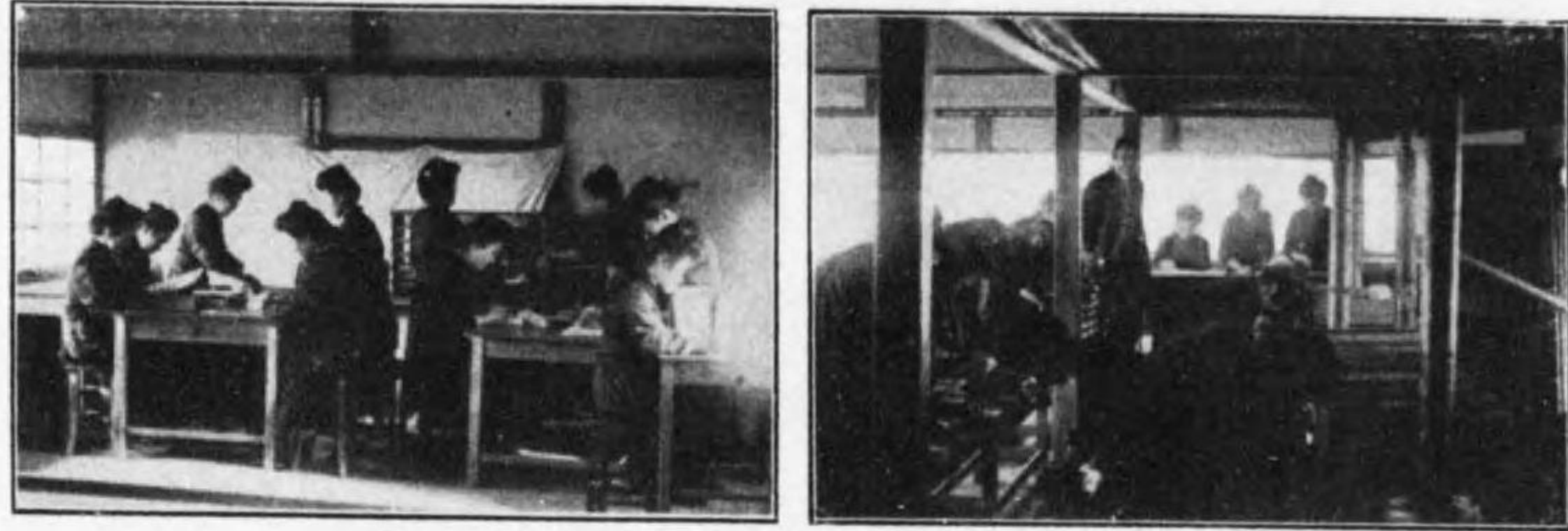
同上白須賀出張所



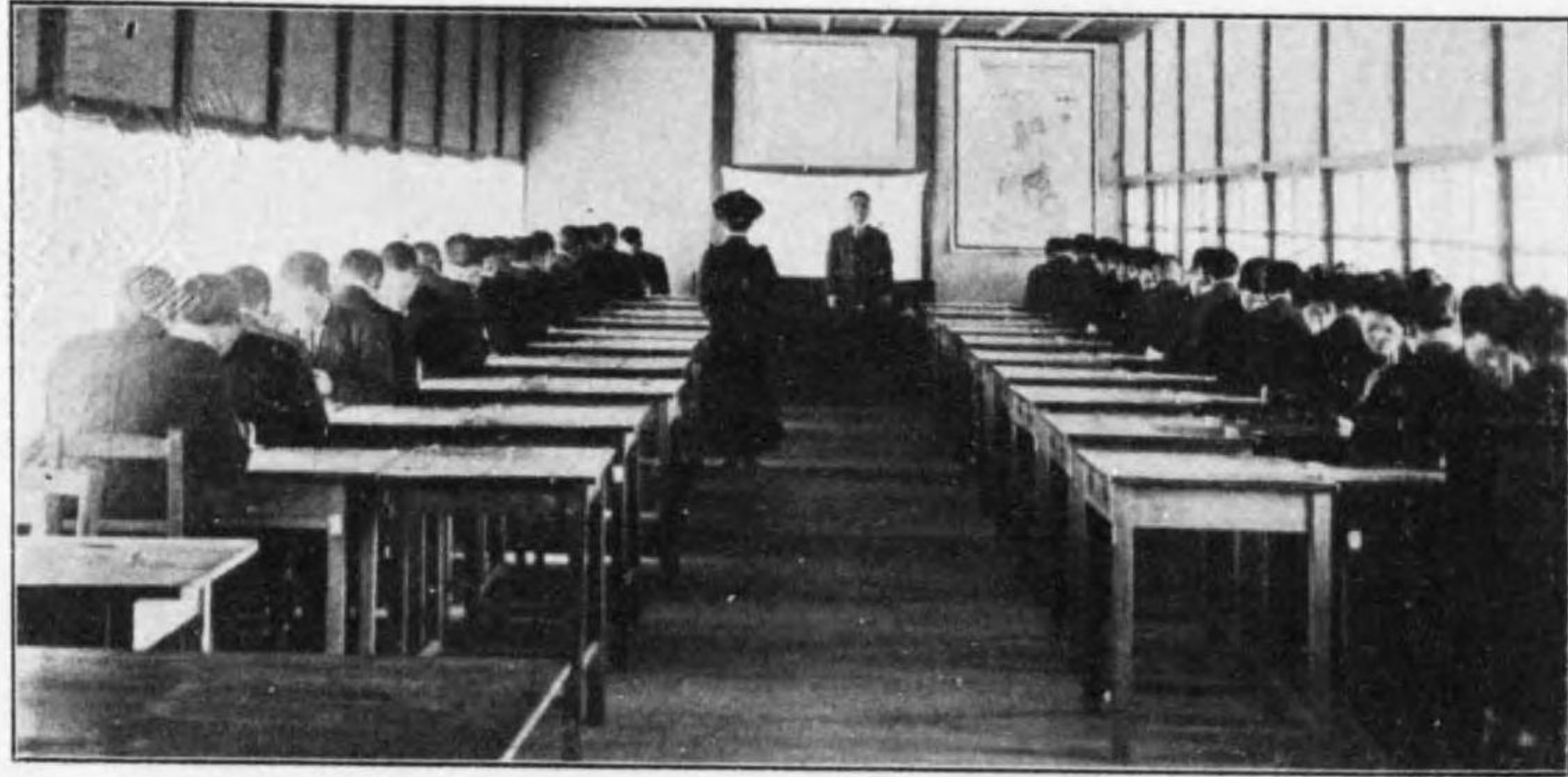
靜岡縣會議事堂



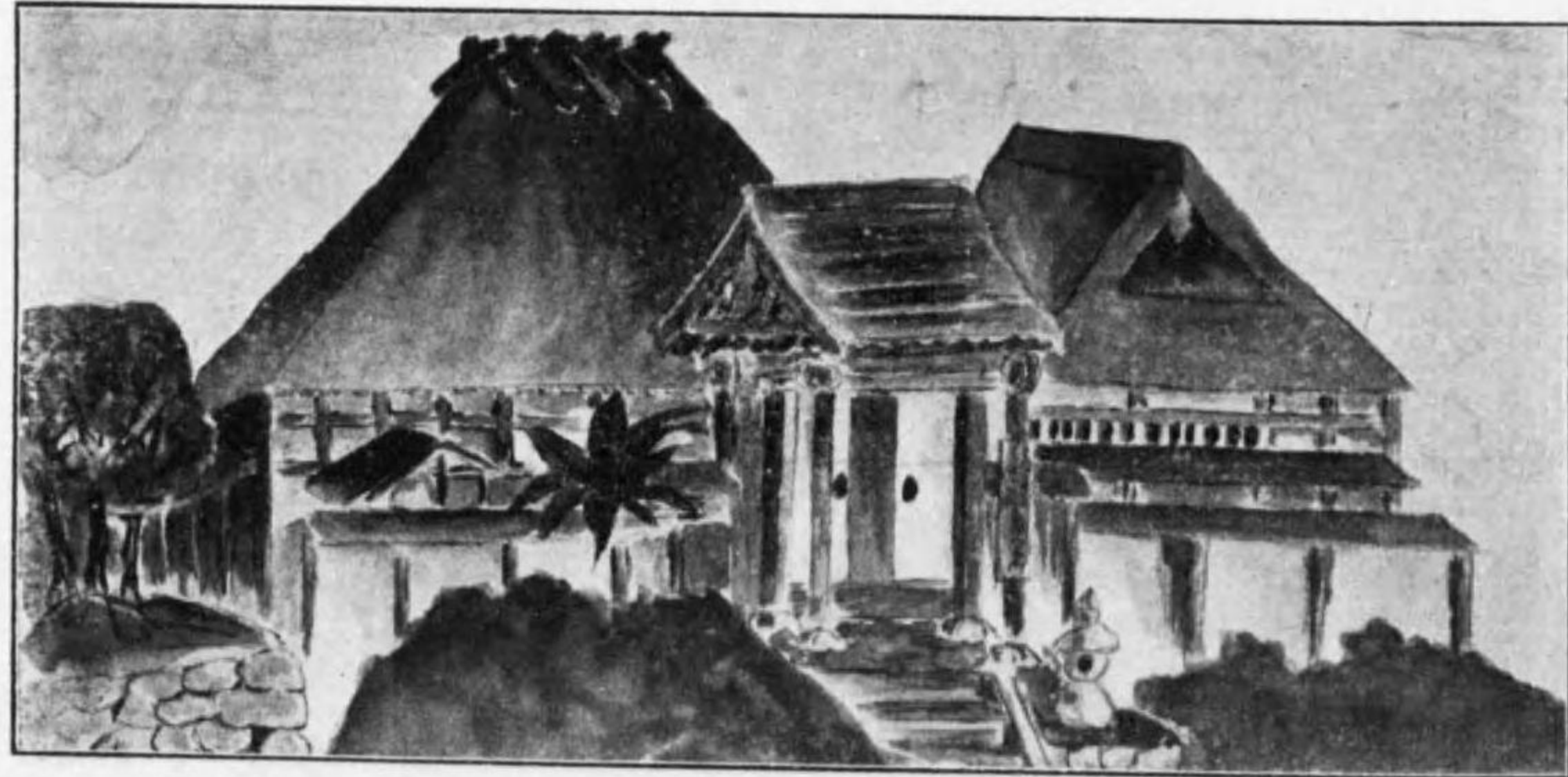
所支付見所締取業蠶縣岡靜



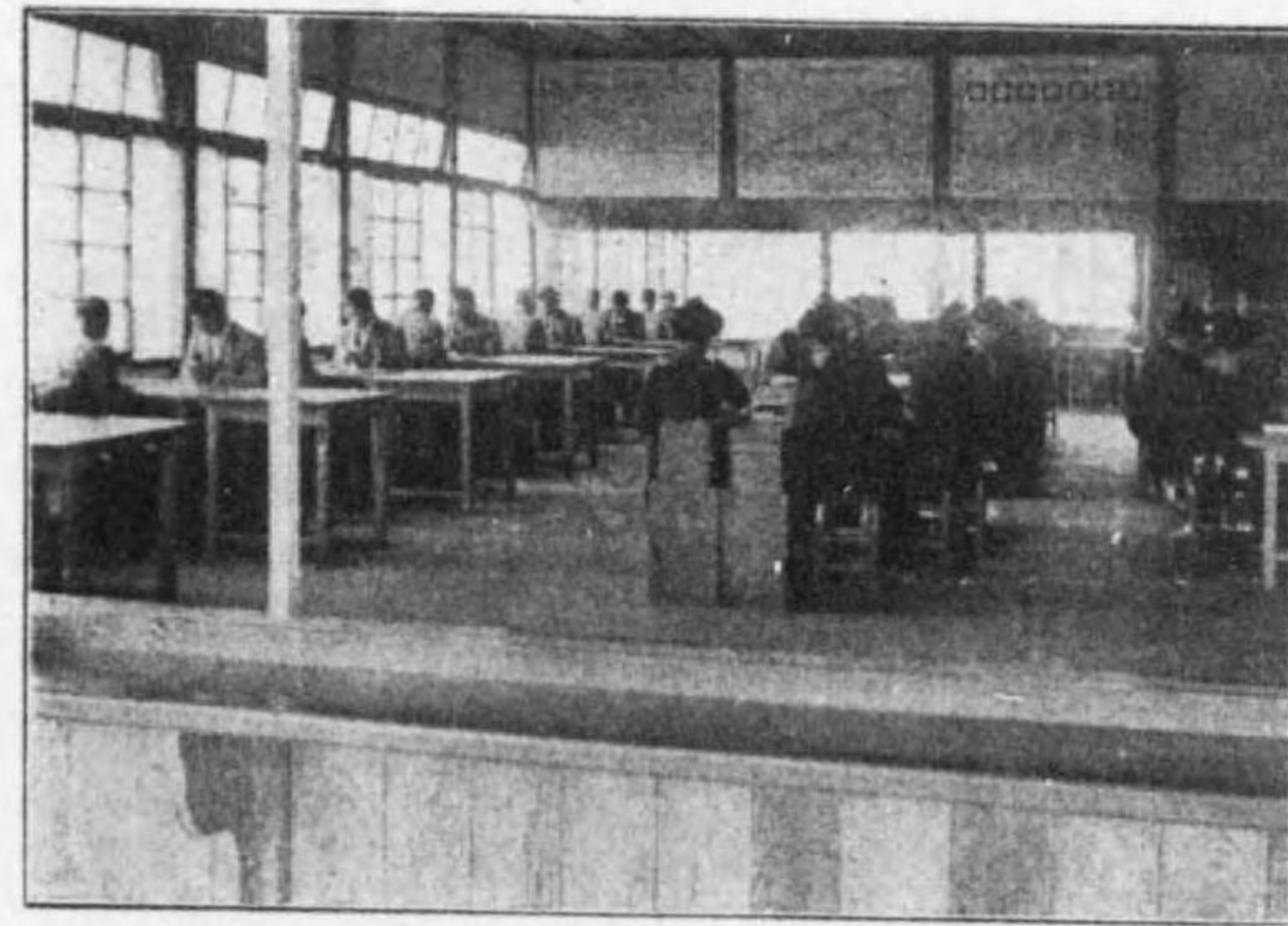
所張出井袋上同



所張出山奥上同



所支津沼所締取業蠶縣岡靜



同上
三島出張所

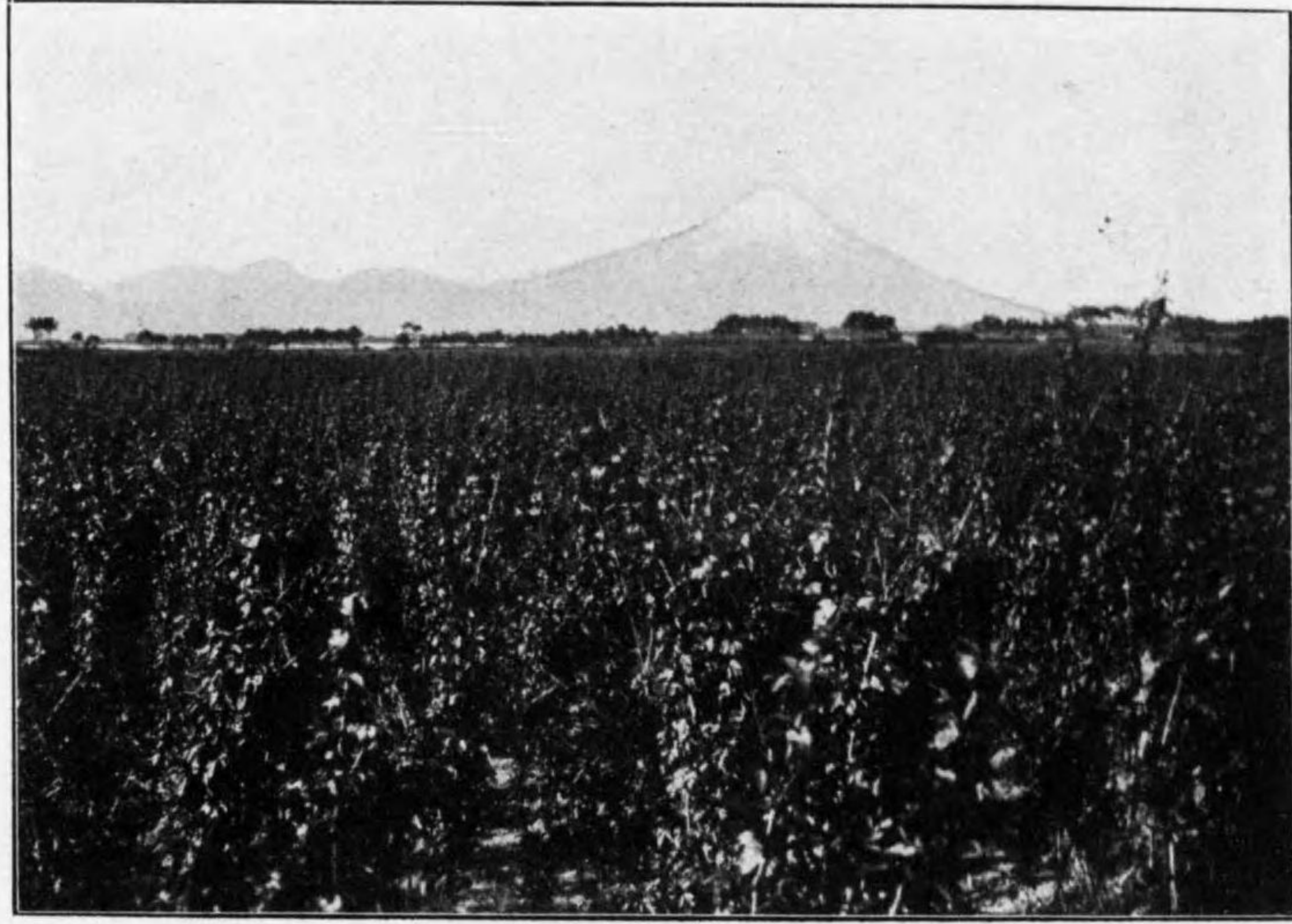


同
靜岡支所

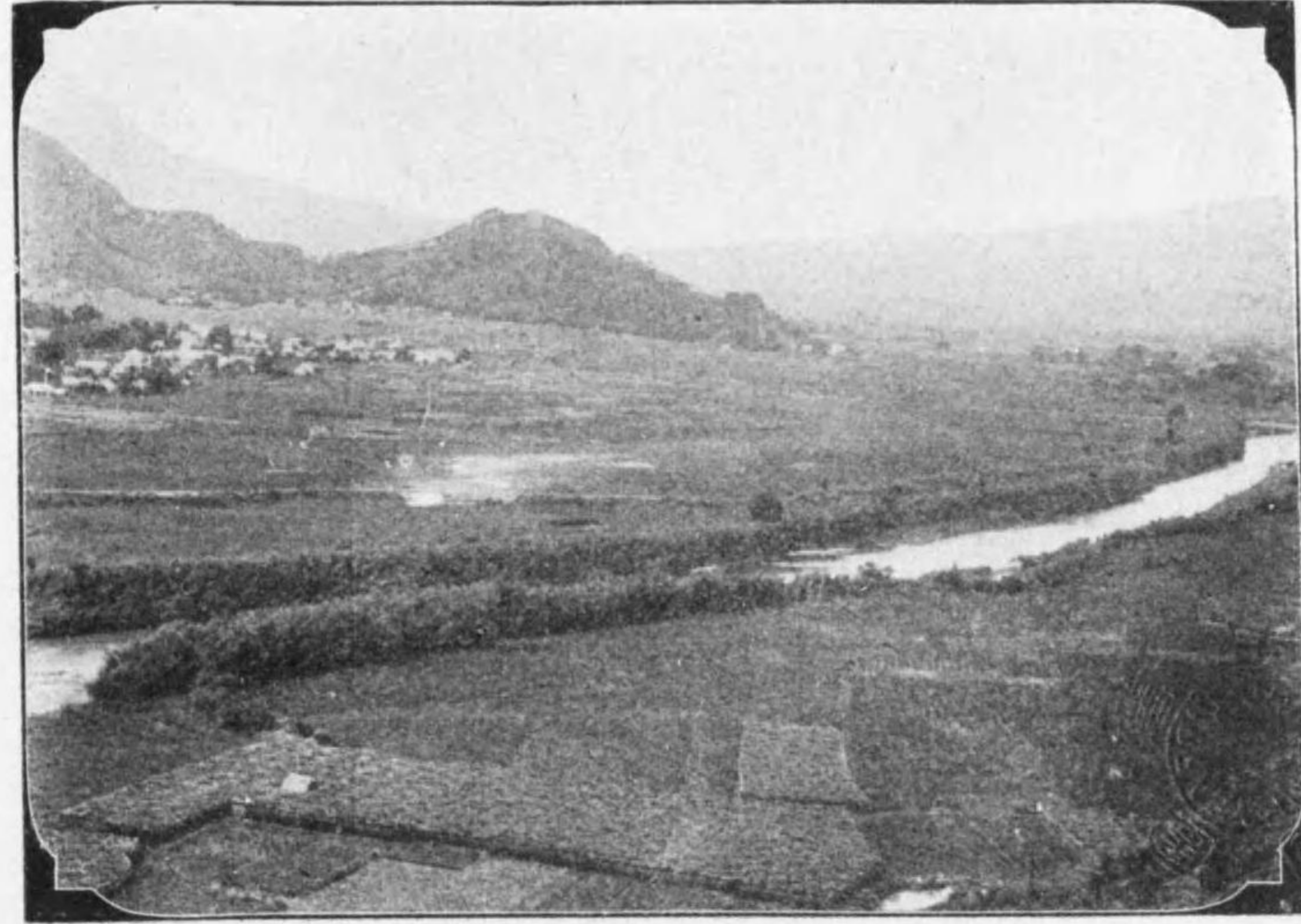


同
下田支所

安倍郡二見村ノ桑園



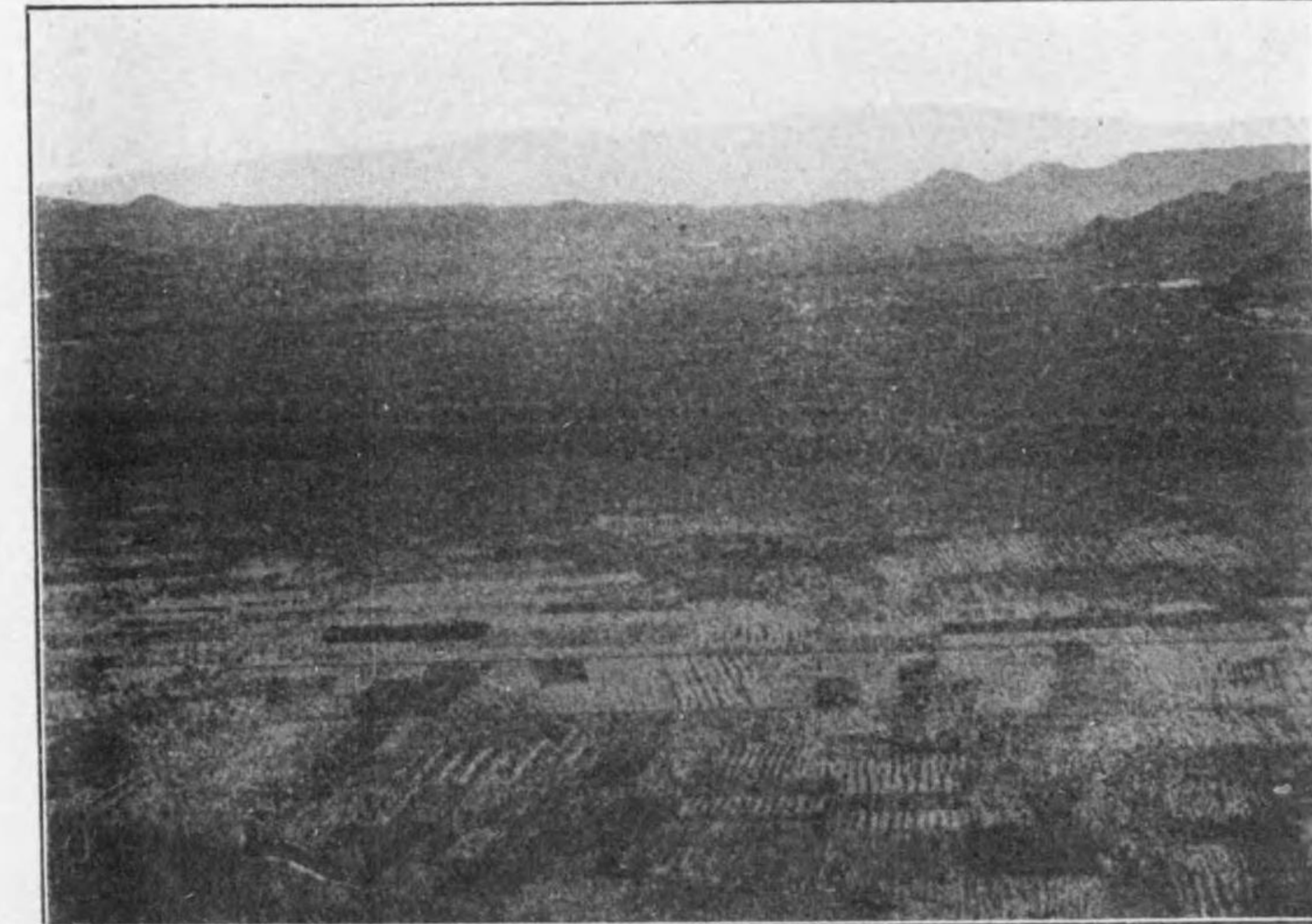
狩野川沿岸ノ桑園其一



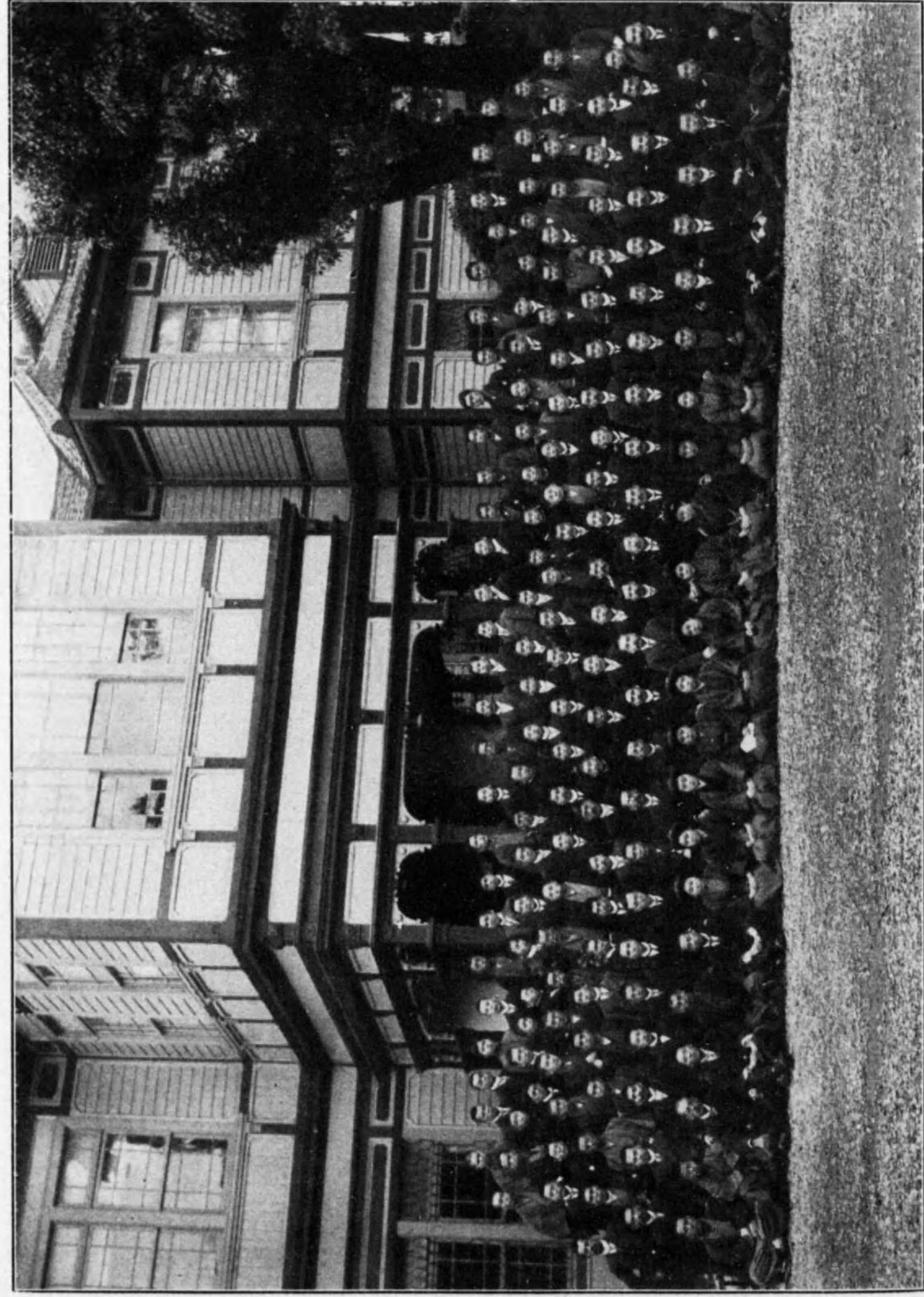
富士山麓ノ桑園



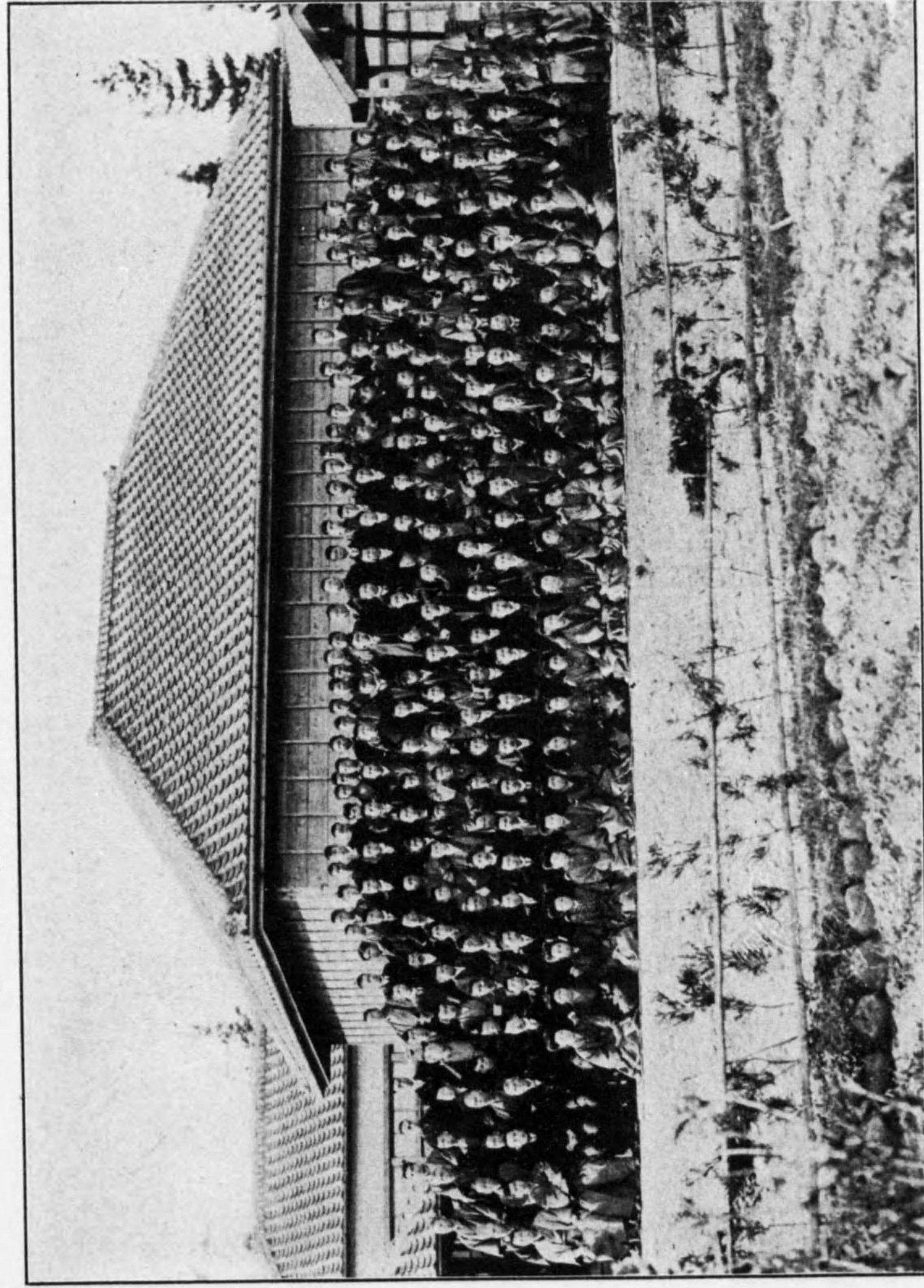
同上其二



第一回靜岡縣夏秋蠶講習會



第二回靜岡縣夏秋蠶講習會



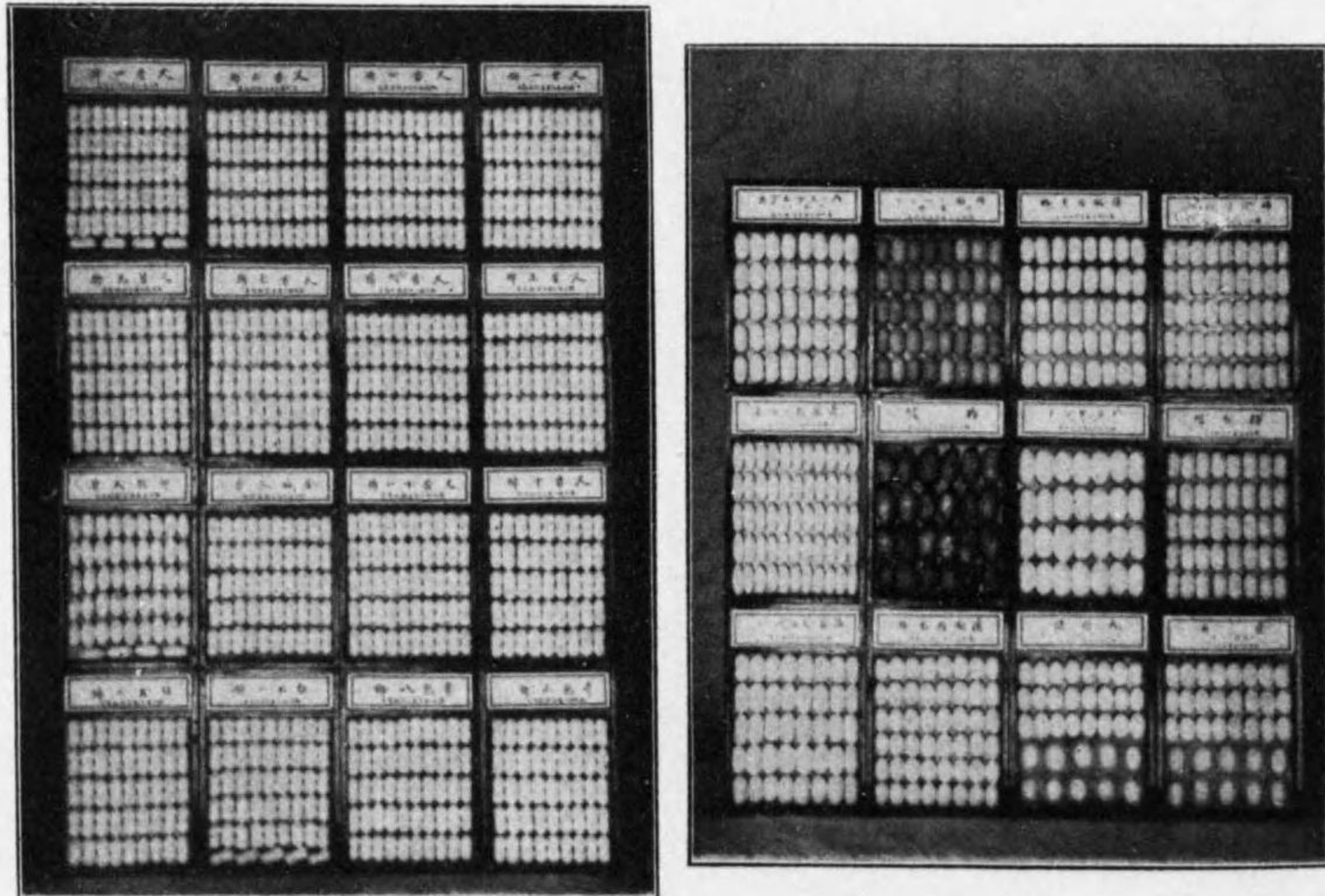
所造製種蠶原立縣岡靜



育通普兒蠶



繭本標所同



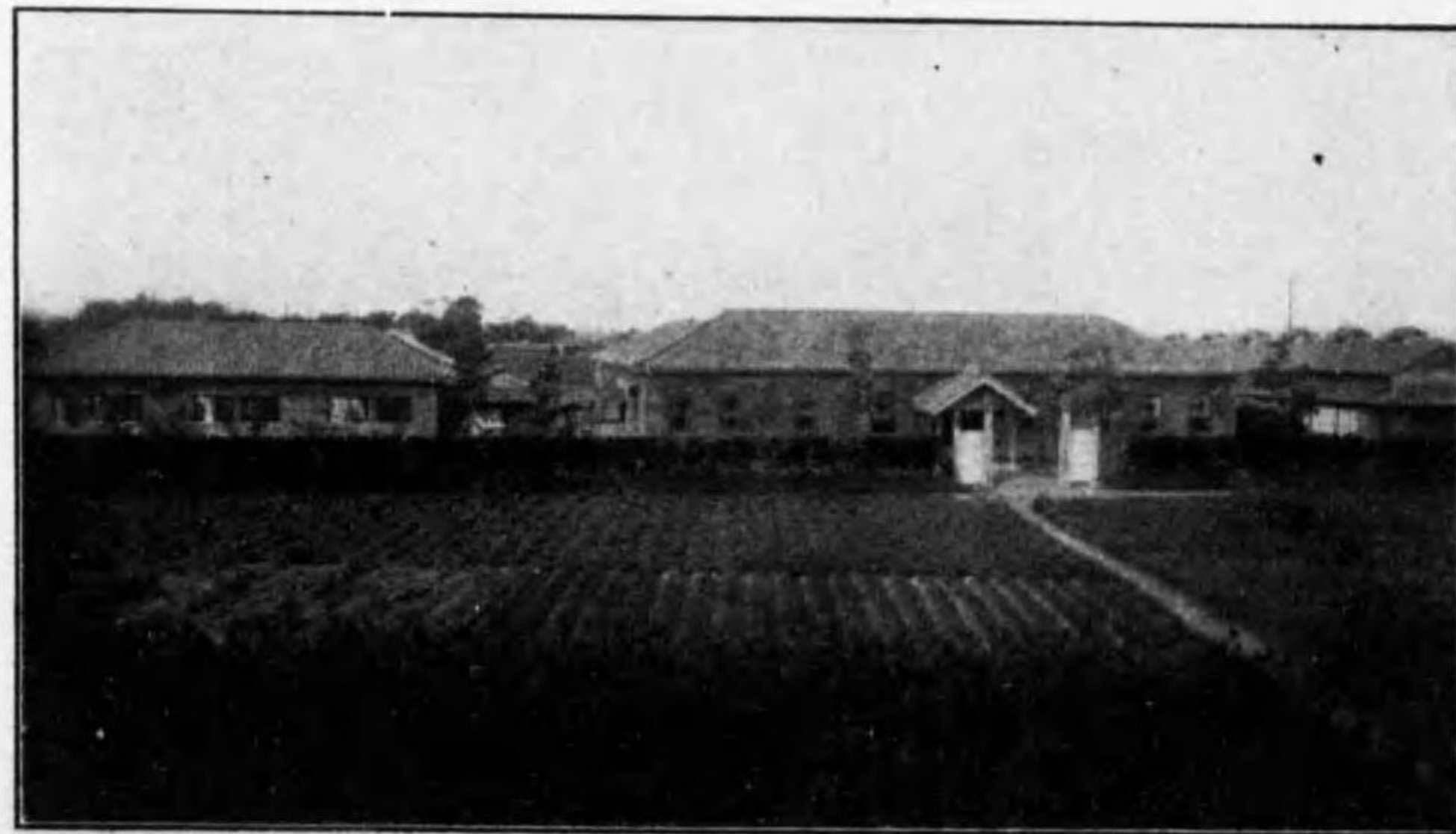
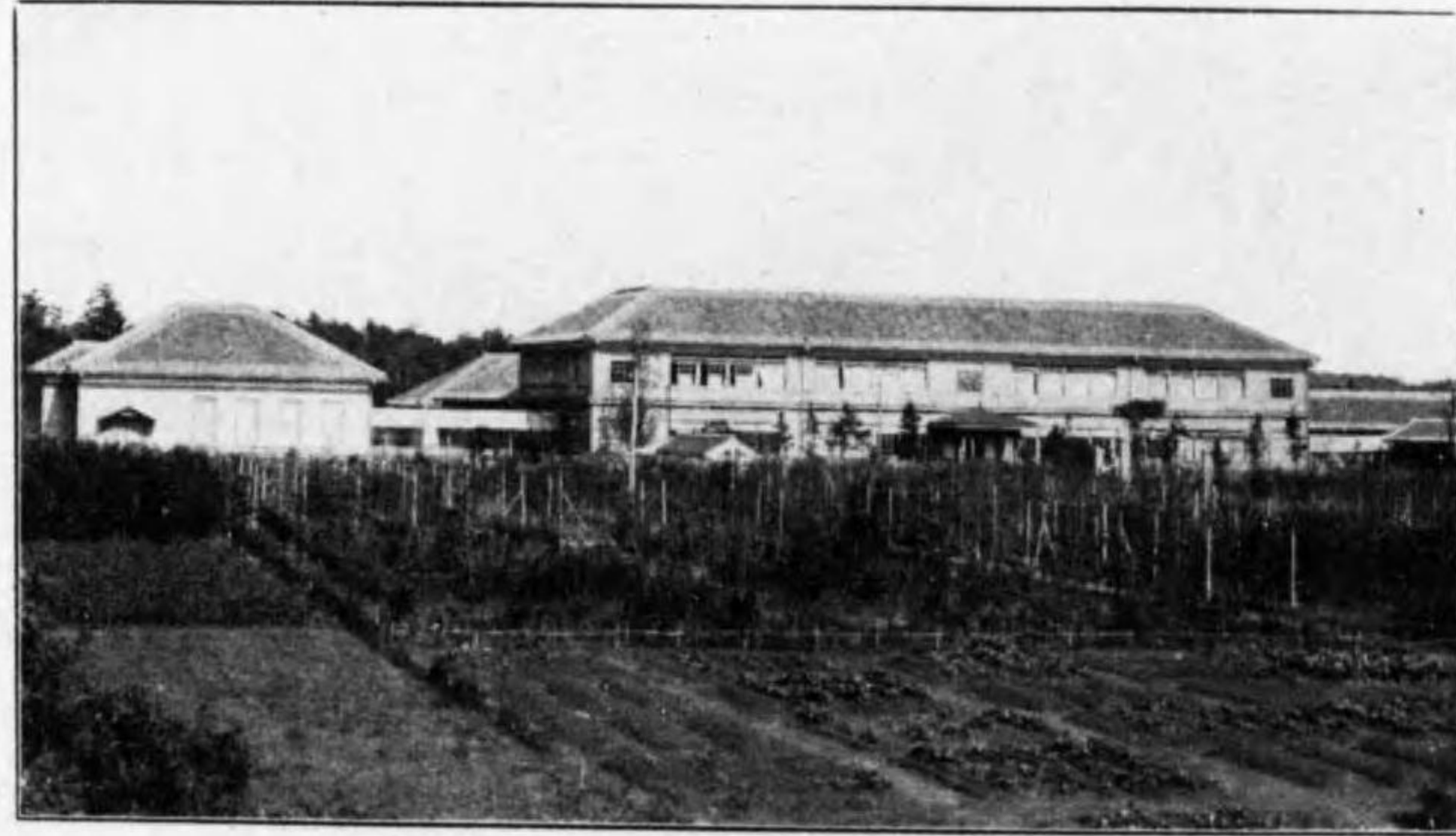
育桑條同



室蠶養校學農立縣岡靜



同上本館



濱名郡立蠶業學校

園桑所造製種蠶原立縣岡靜

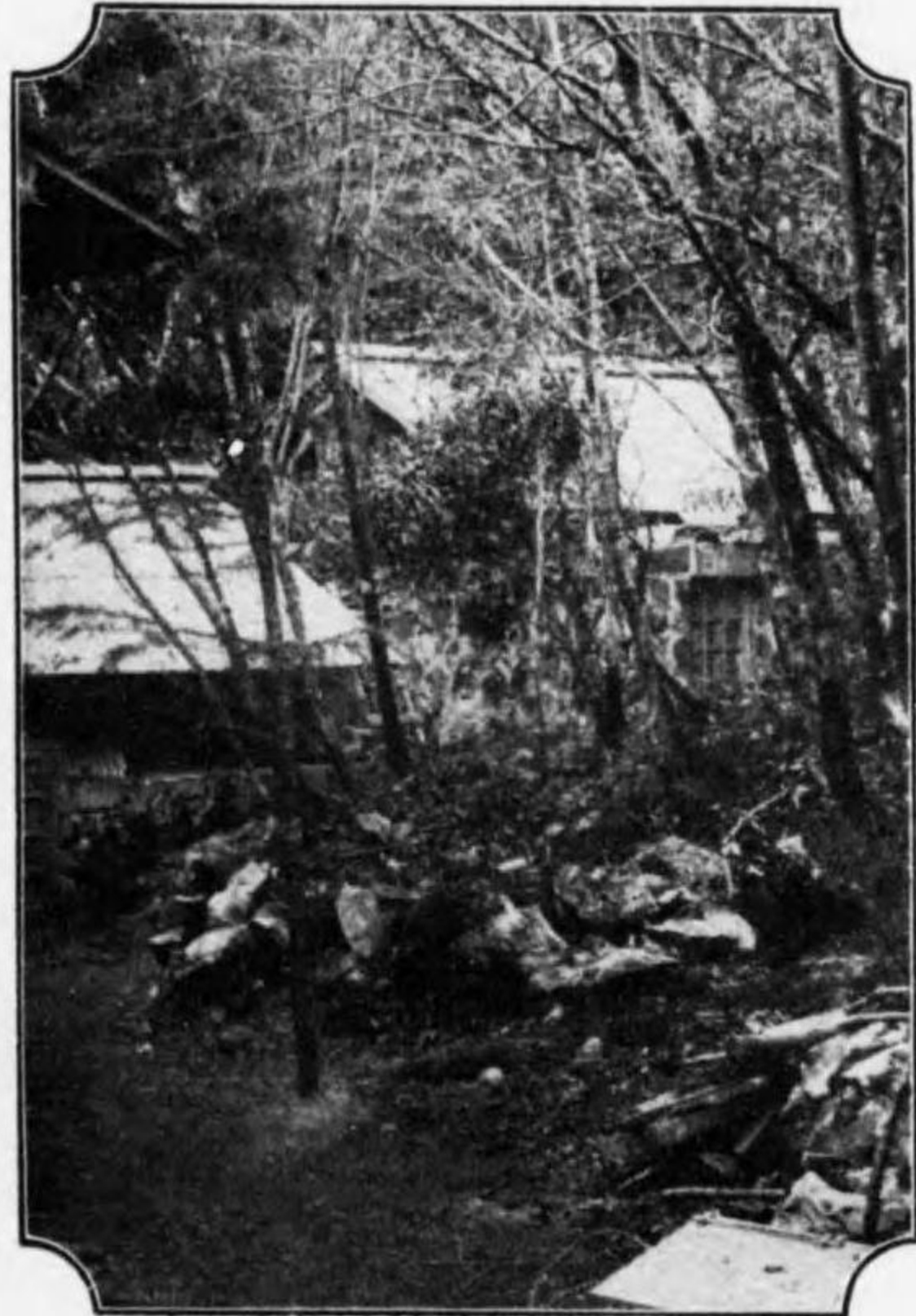


場驗試事農立縣岡靜



天 城 風 穴

工 事 中 之 景



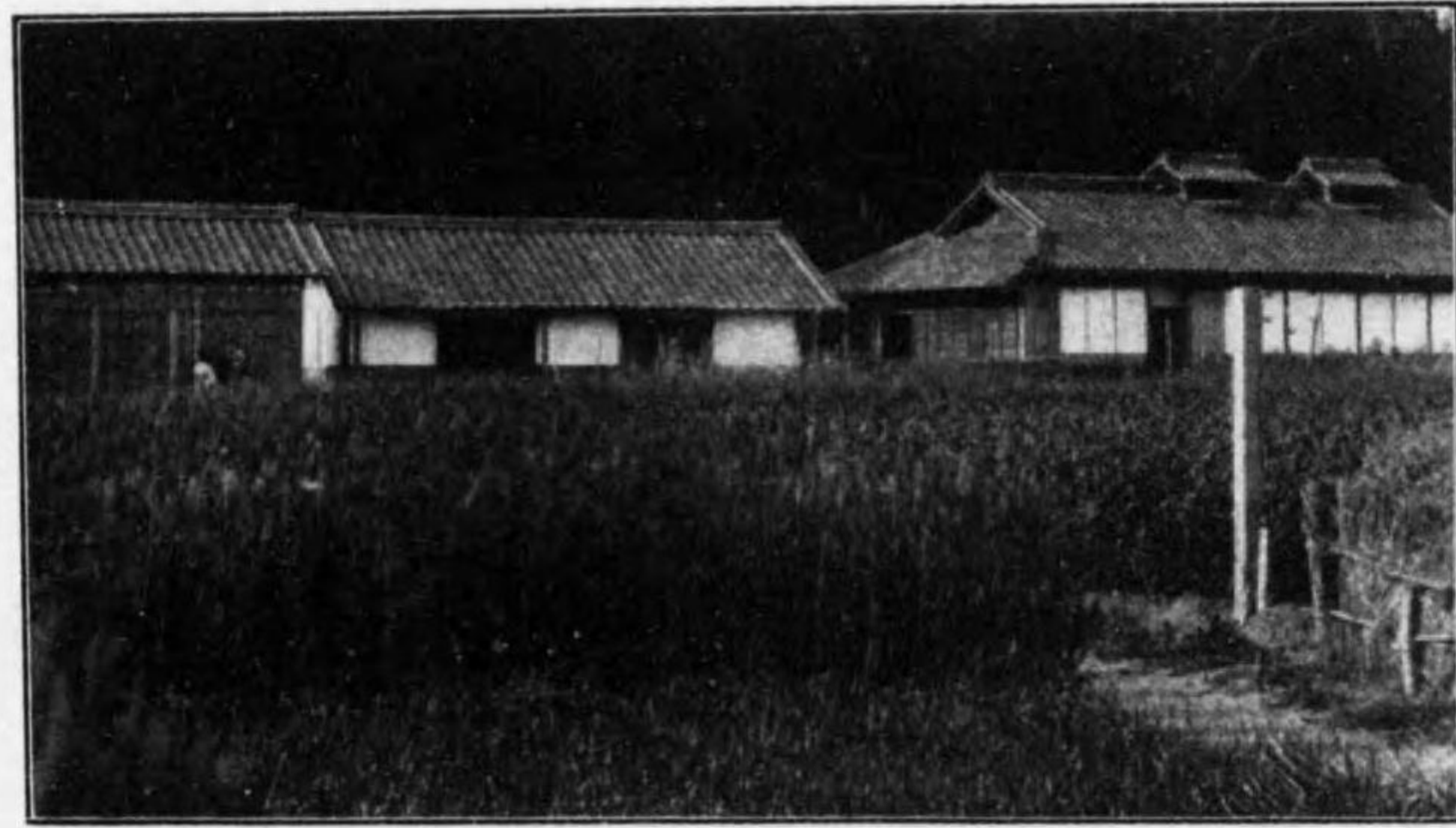
究 理 室



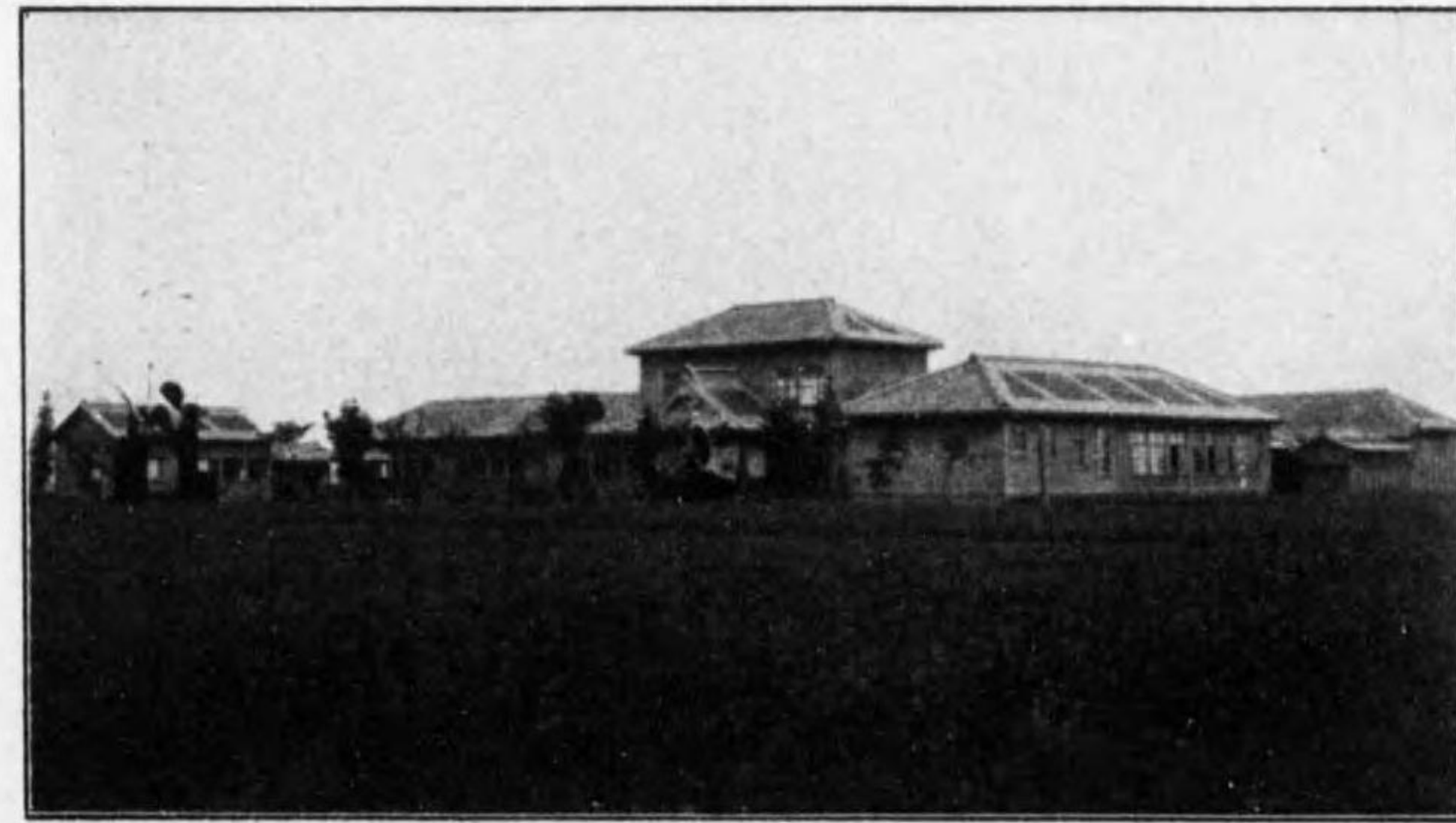
駿 東 農 林 學 校



引 佐 郡 立 農 學 校 養 蠶 室



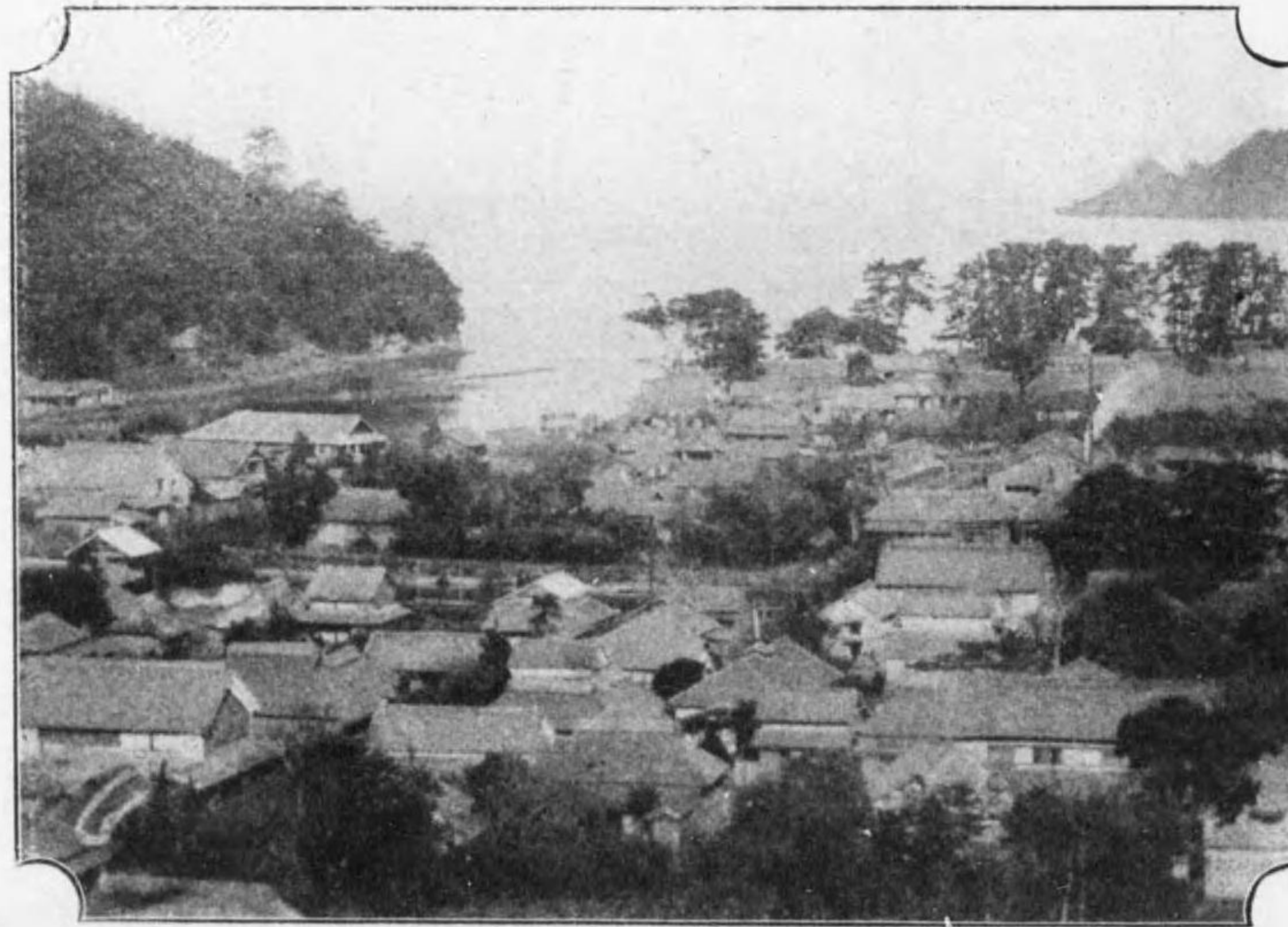
志 太 郡 立 農 學 校



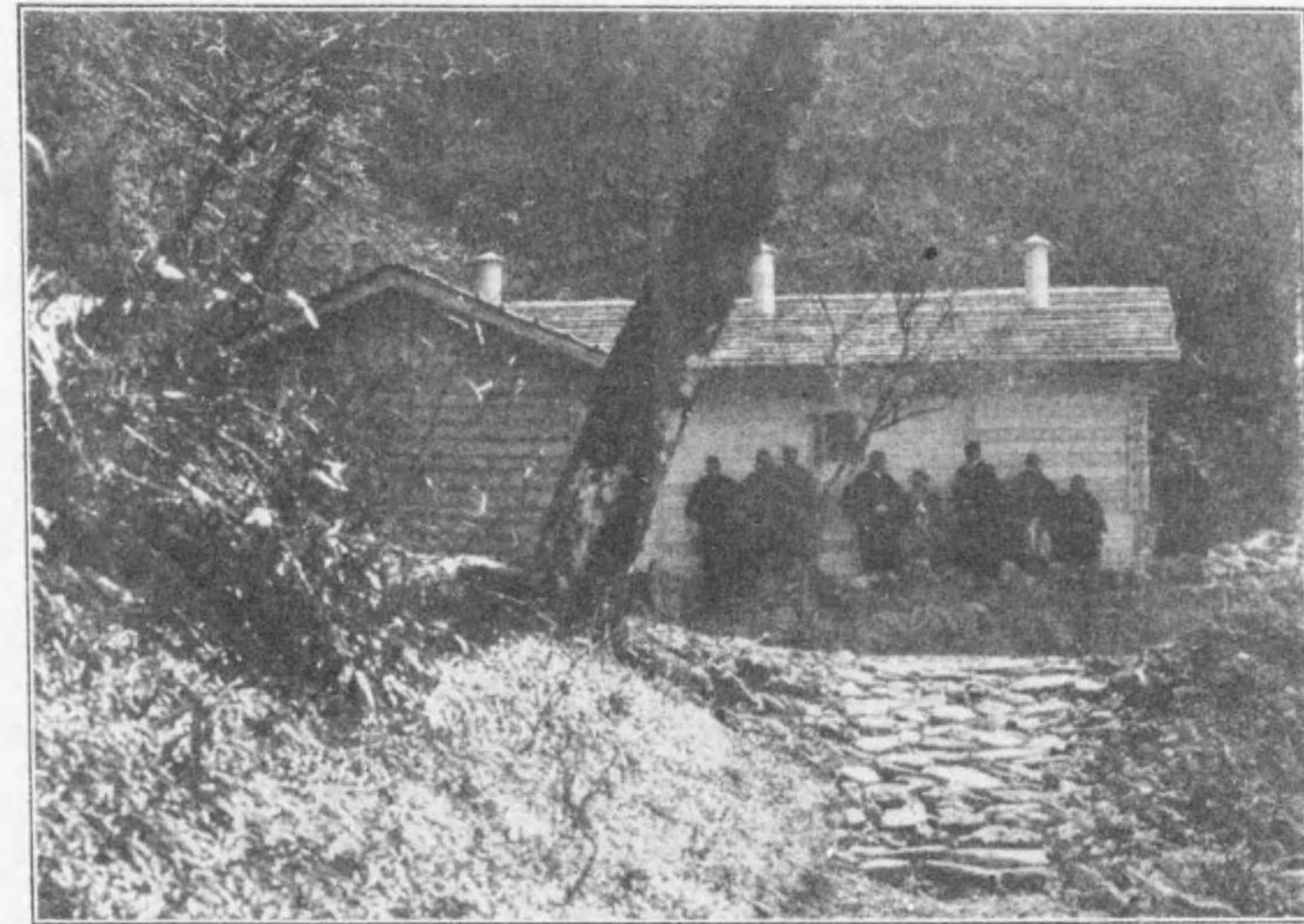
小笠郡掛川町蠶種貯藏庫



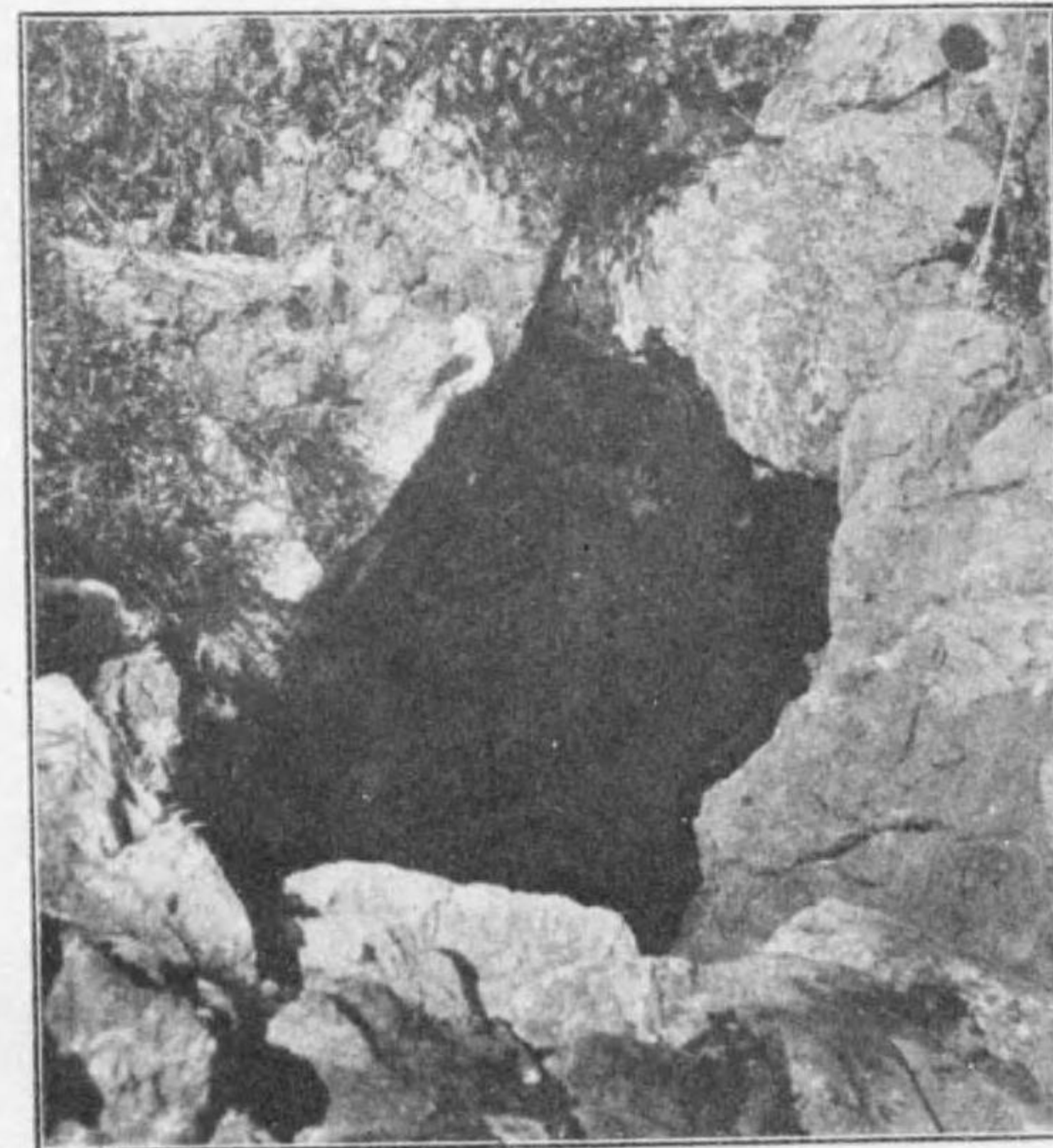
伊豆松崎港



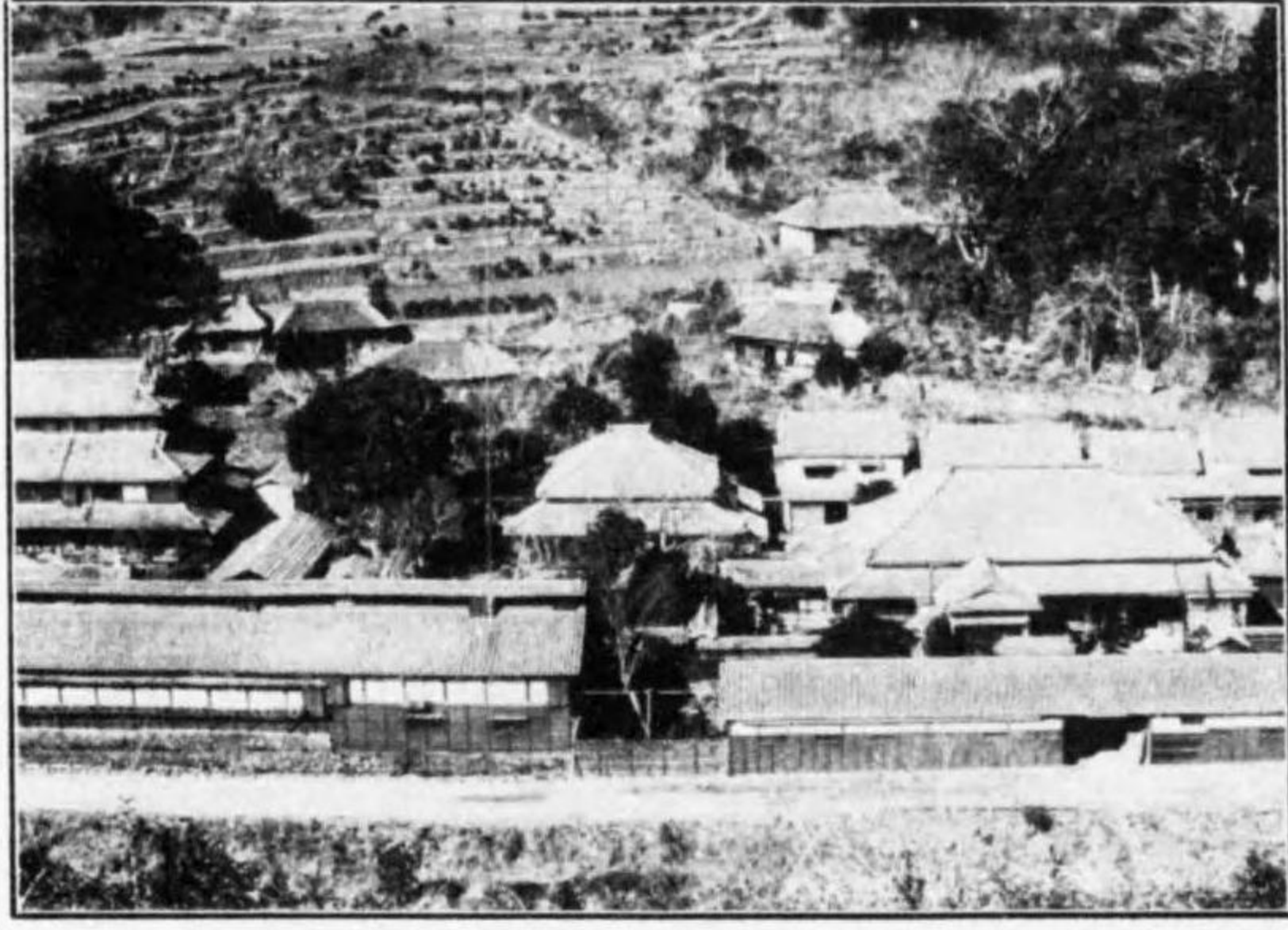
右東木風穴



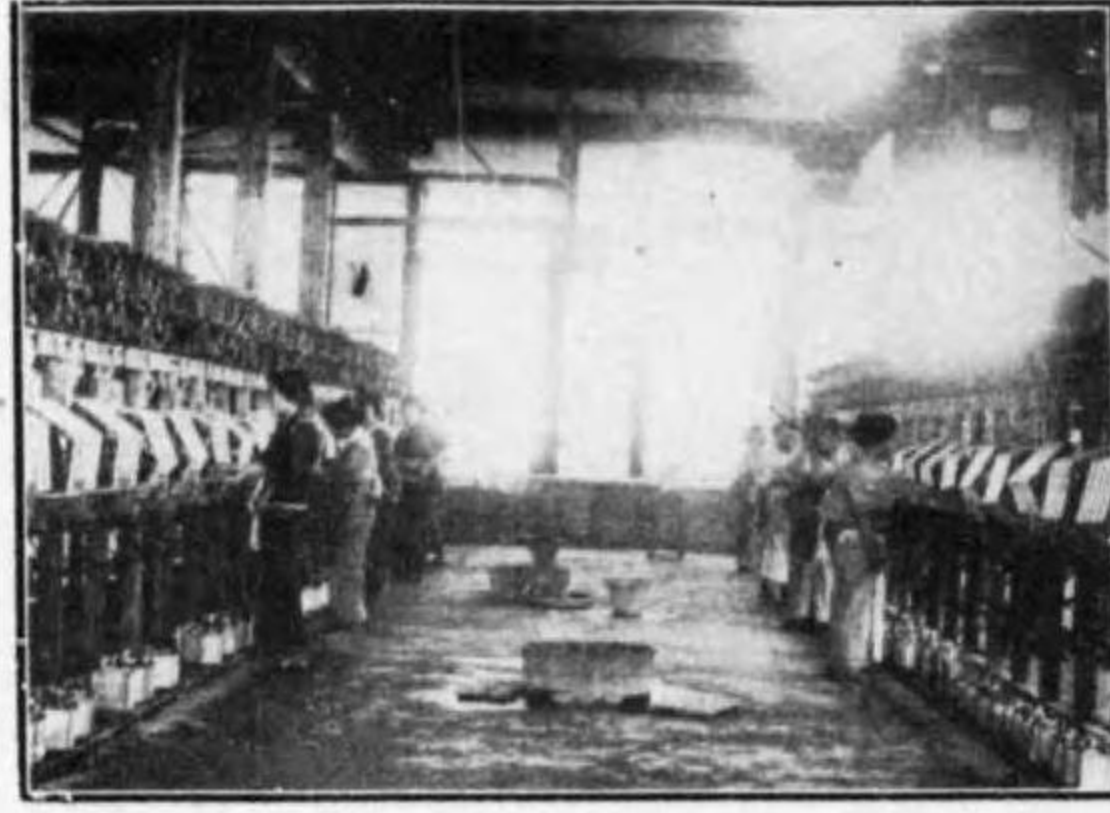
引佐郡都田洞穴



賀茂郡松崎製絲場



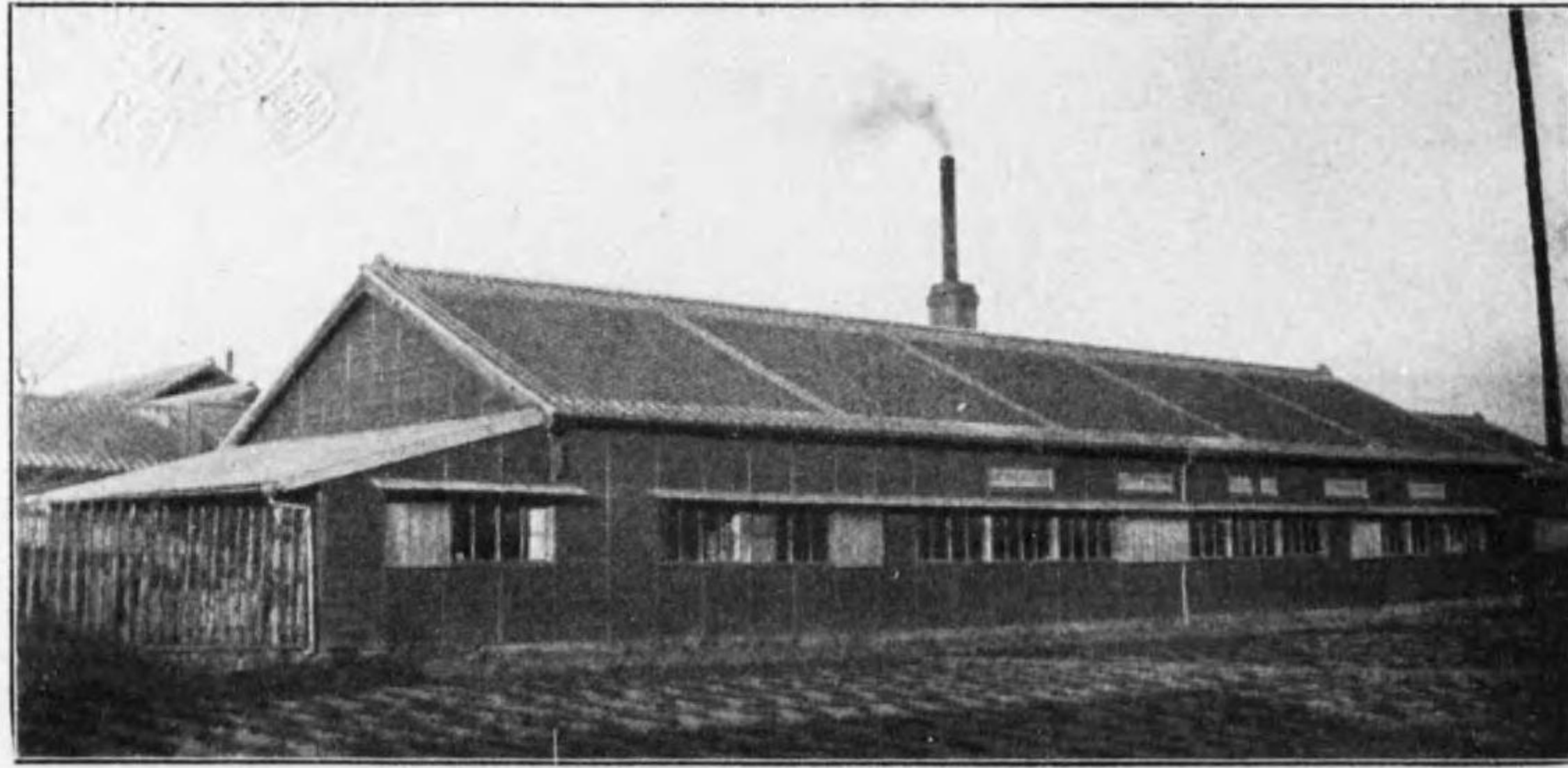
同上內景



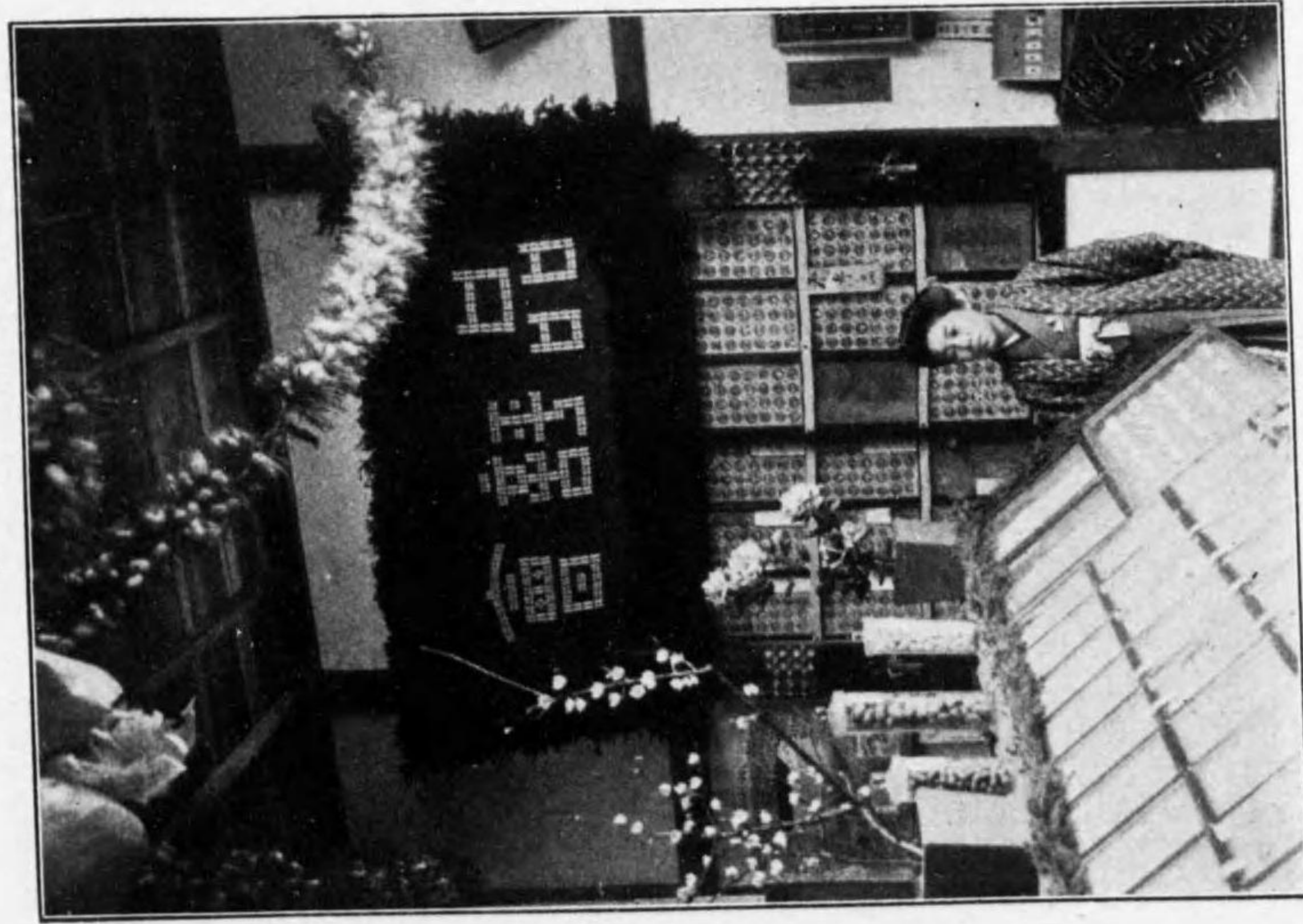
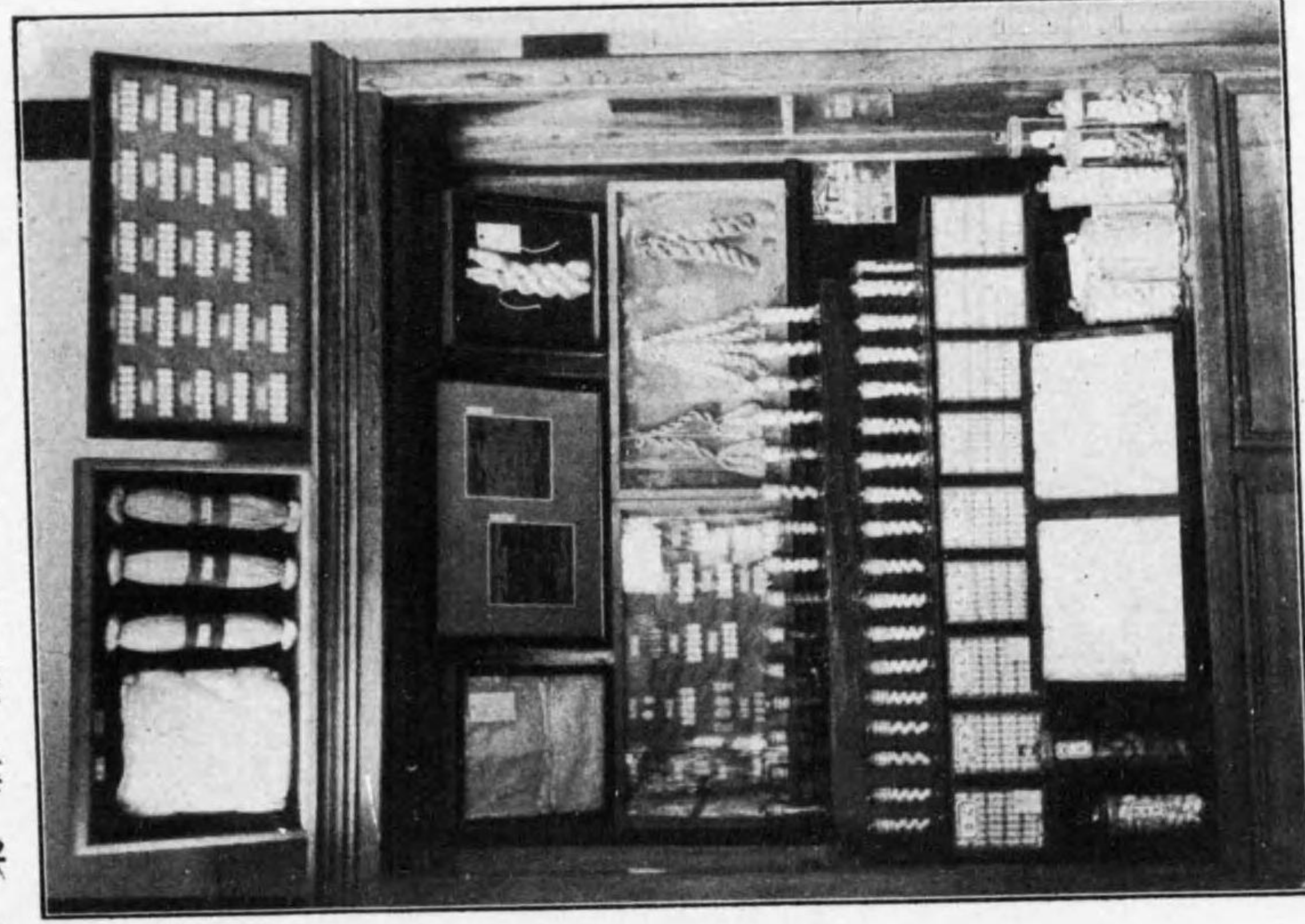
濱名郡岡崎共同揚返場外景



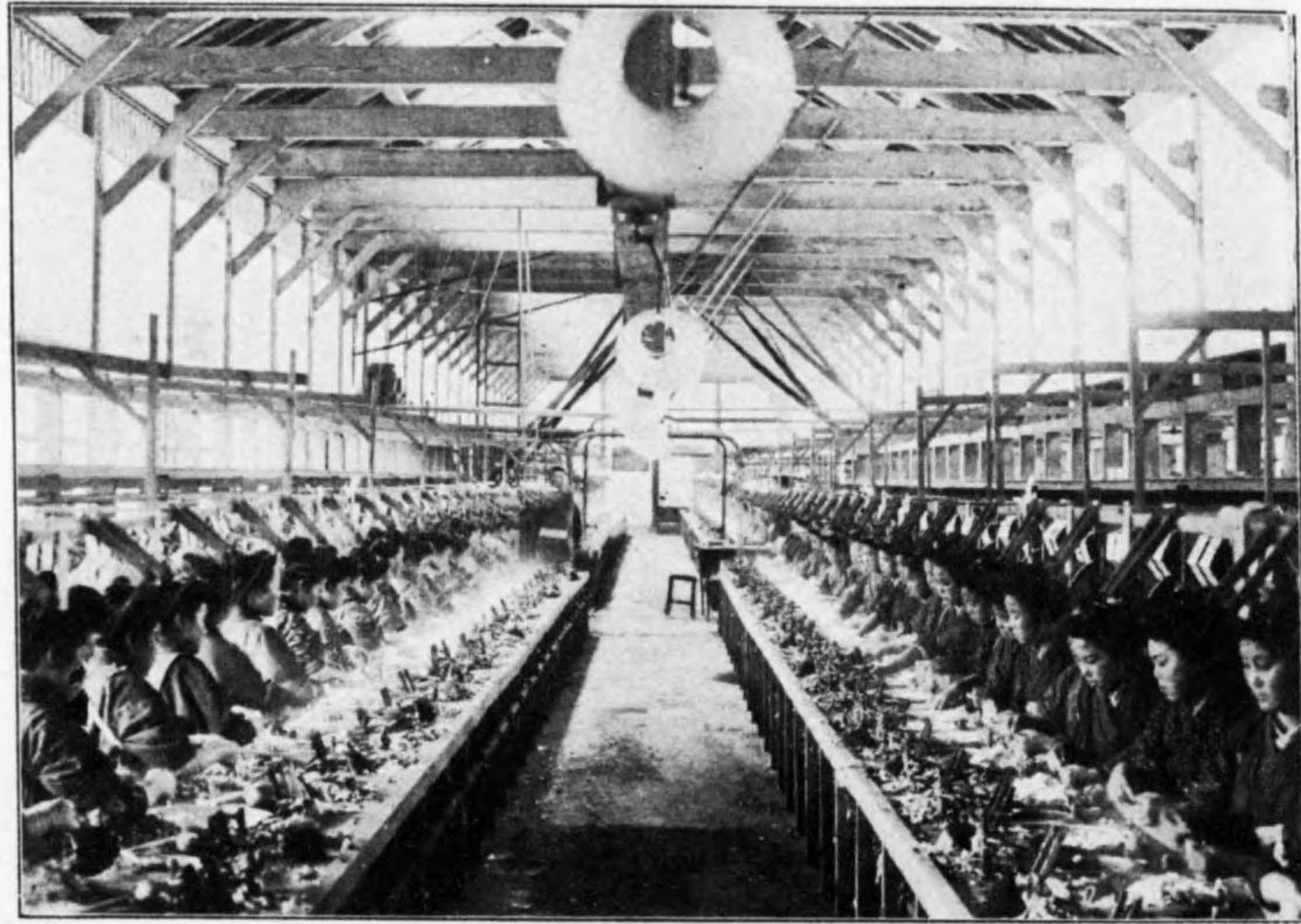
庵原郡岩淵共同揚返場



安倍郡蠶絲業組合陳列室及品評會



濱名郡吉津村崎製絲場其二



橫濱埠頭蠶紙燒棄ノ實況

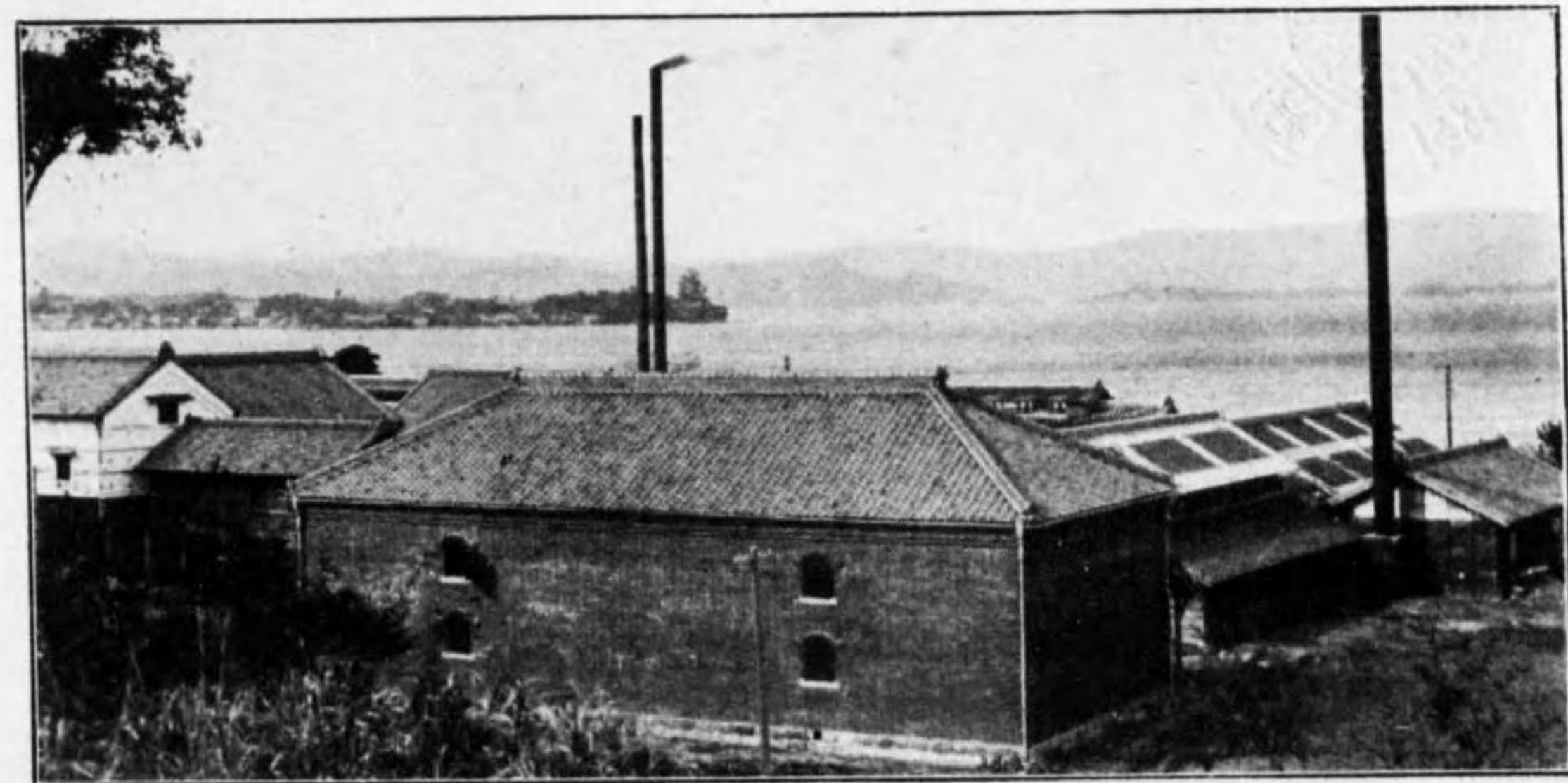
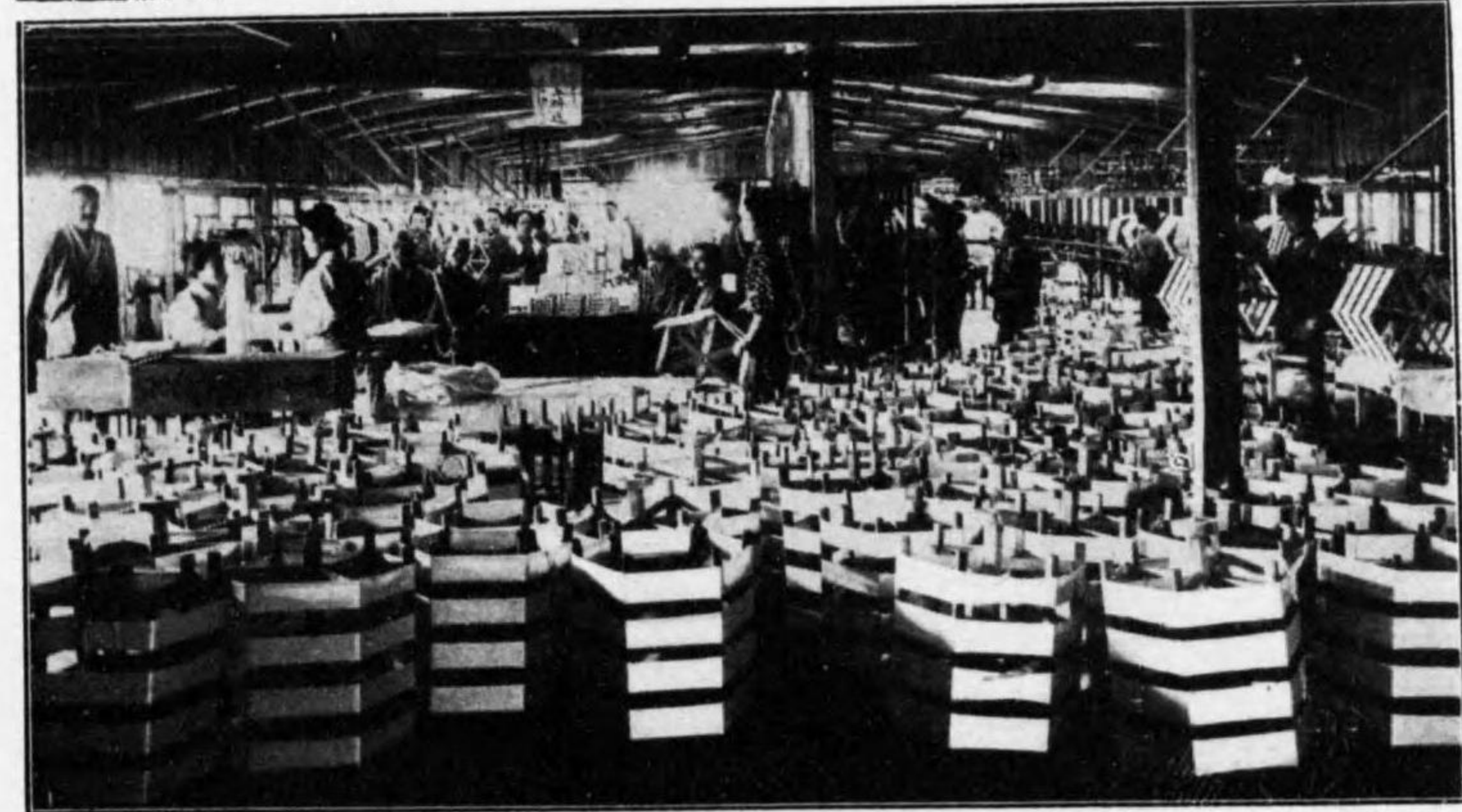


明治八年七月蠶卵紙四十四萬八千四百餘枚ヲ燒棄ス

富士郡大宮町駿陽社外景

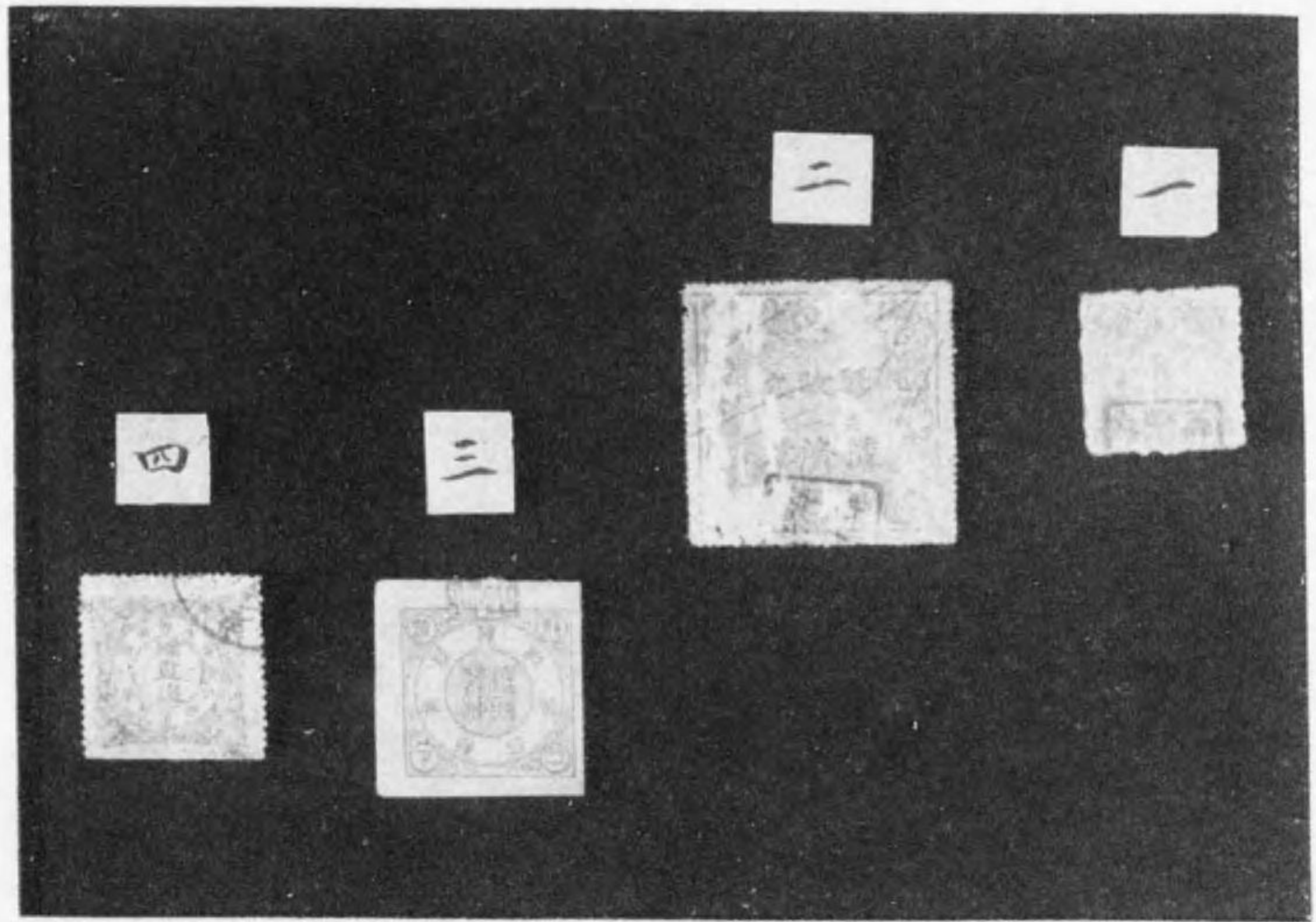


同上内景

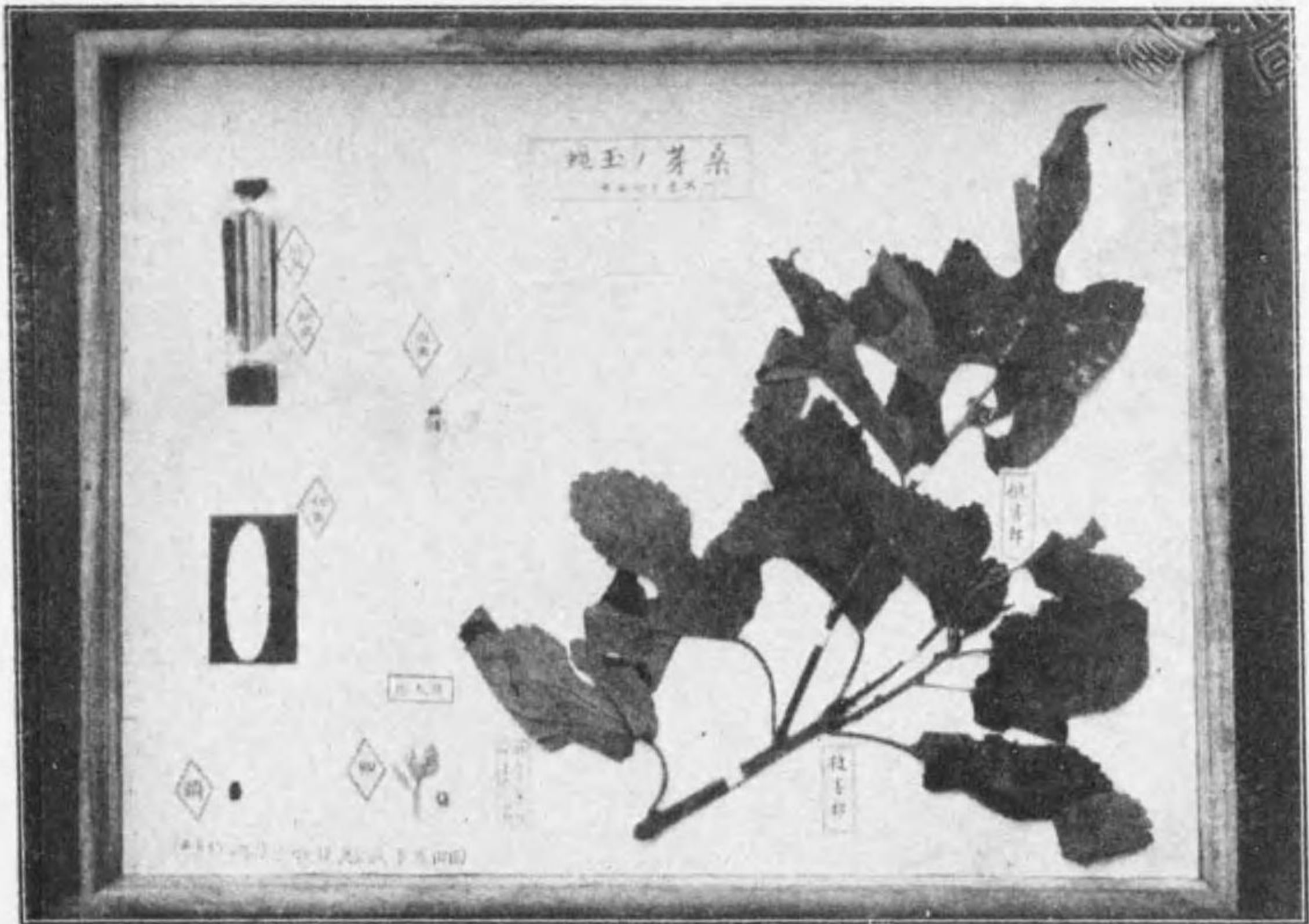


濱名郡吉津村崎製絲場其一

紙 印 種 蠶 年 初 治 明



蠅 玉 ノ 芽 桑



蠶桑
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之始
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之末
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之始
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

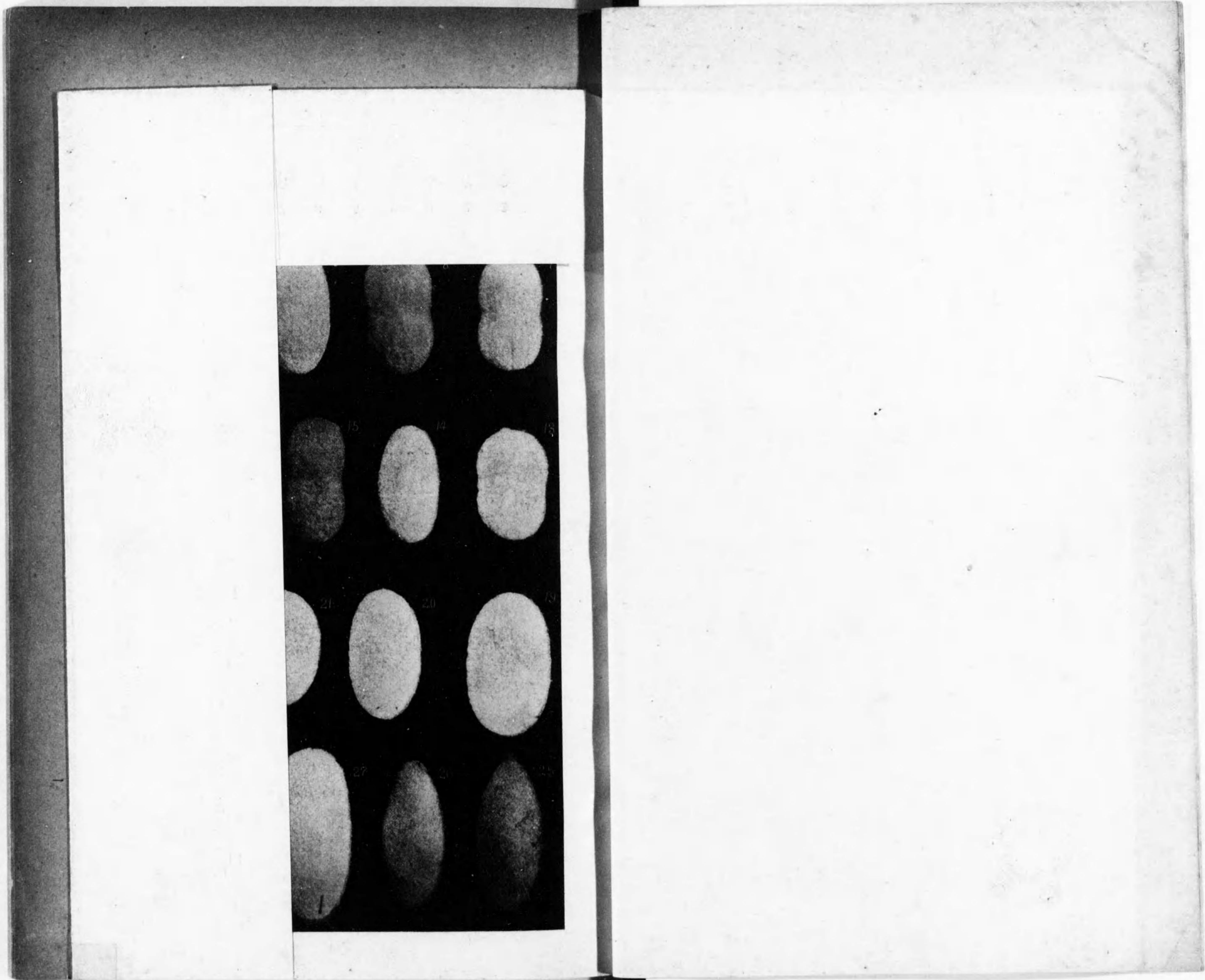
蠶桑之末
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之始
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之末
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之始
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末

蠶桑之末
蠶桑之始 蠶桑之末 蠶桑之始 蠶桑之末



15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
韓國黃繭	韓國白繭	乞食蠶	四化蠶	秋蠶	夏蠶	伯陽	青白	白玉	角又	鬼縮	又昔	小石丸	青熟	赤熟

24 16 支那大圓頭
支那廣東七化蠶

17 支那黃繭
暹羅黃繭

25 支那杭州
暹羅白繭

18 支那會稽
佛國アーレー

26 支那無錫
佛國パースアルプス

19 支那石蠶

27 支那龍角
伊國一號

20 支那石蠶

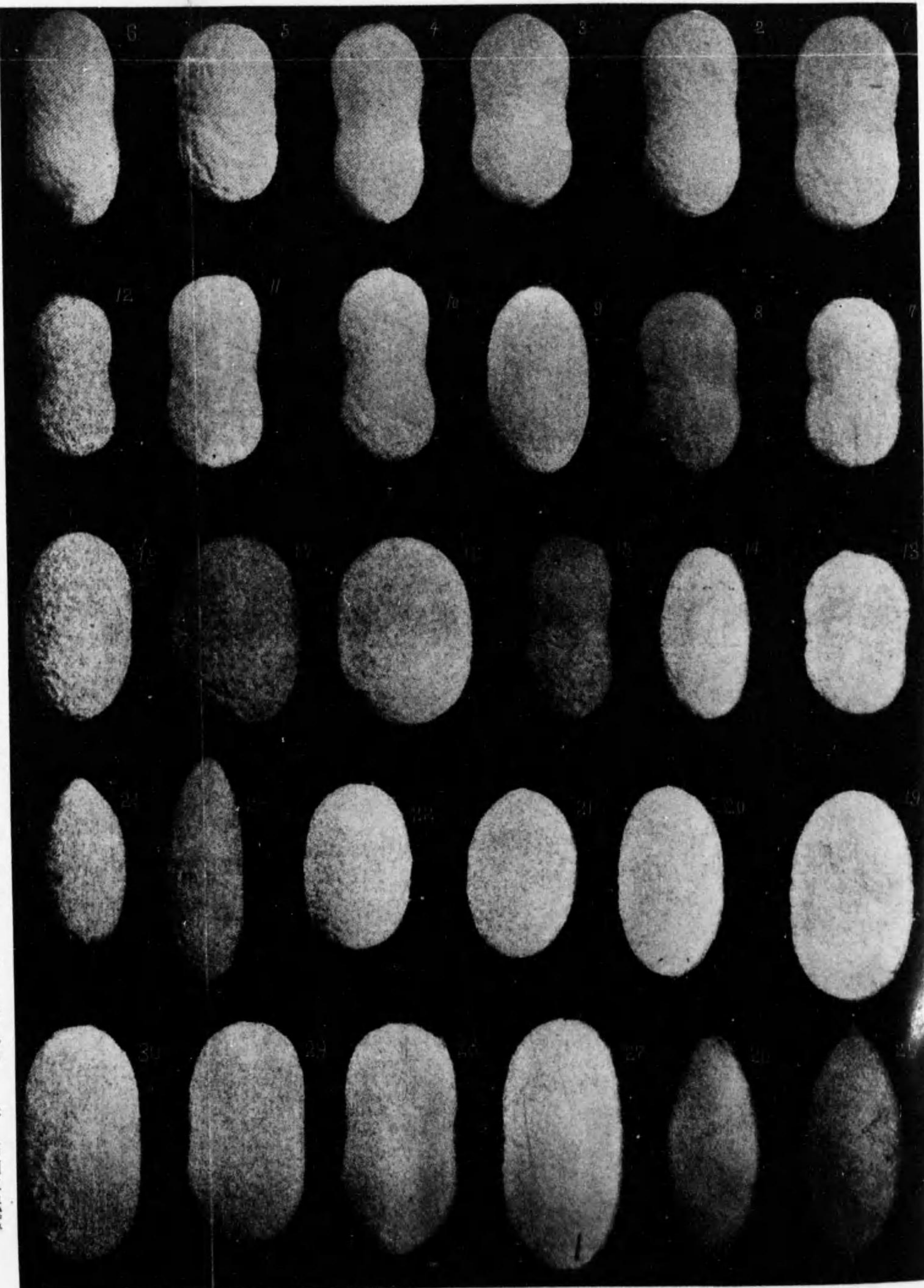
28 支那石蠶

21 支那石蠶

22 支那石蠶

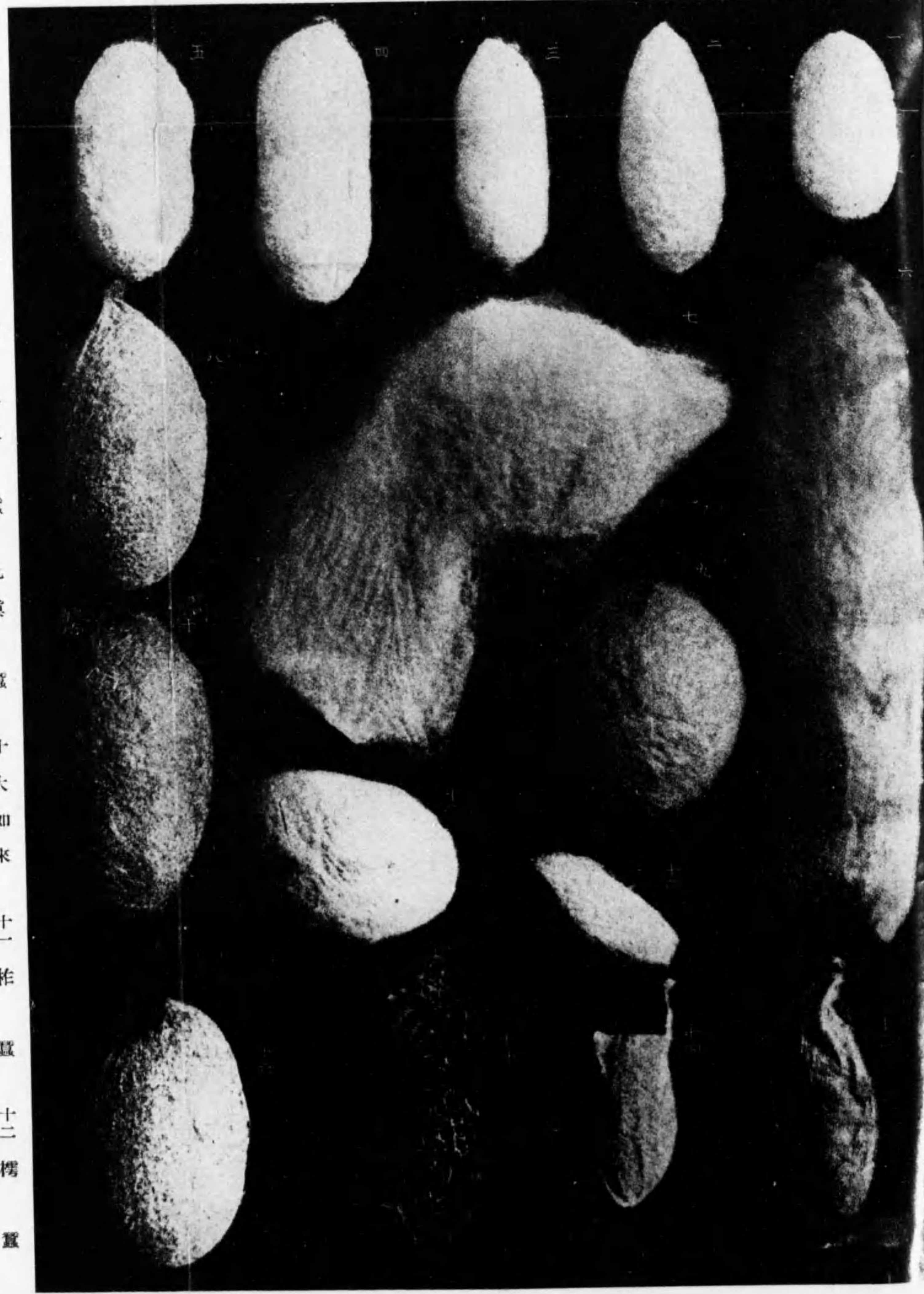
23 四川三眠蠶
伊國二號

30 四川三眠蠶
伊國二號



乙-ダクバ古耳土(五) 甲-ダクバ古耳土(四) 繭絲索加高(三) 繭黄索加高(二) 繭白索加高(一)

十三 六 琉球同功繭
十三 桑 蠶
七 七 綿
十四 十四 山カマス 蠶
八 八 天
十五 十五 樟 蠶
九 九 眞
十六 十六 印度チユツサ 蠶
十大 十大 如來
十一 十一 柰 蠶
十二 十二 楞 蠶



緒言

一、静岡縣ノ蠶絲業ハ輓近製茶業ト相比肩シテ頗ル長足ノ進歩ヲ呈セリト雖前途尙遼遠ニシテ是カ發展ヲ講スルハ刻下ノ急務ナリトス、之レ本書ヲ刊行シテ斯業ノ經營畫策上溫古知新ノ資料ニ供セントスル所以也。

一、本書ハ可及的斯業ニ關スル事項ヲ精細ニ網羅センコトヲ努メタリト雖、文獻ノ徵スヘキモノナク從テ隔靴搔痒ノ憾ナシトセス。

一、本書記スル所ハ簡明ヲ主トセルニ依リ、動モスレハ

乾燥無味ニ失シ且ツ公務繁劇ノ隙ニ成レルヲ以テ
粗漏杜撰ノ譏ナキヲ保セス、希クハ諒焉。

一、本書編纂ニ際シ縣下ノ各郡市役所、學校、各蠶絲業組
合其他ヨリ多大ノ好材料ヲ供給セラレタリ、茲ニ厚
意ヲ謝ス。

明治四十五年四月上浣

静岡縣蠶業取締所

静岡縣蠶絲業沿革史目次

第一項 蠶絲業ノ沿革

古代ノ狀勢

明治時代ノ狀勢

静岡縣蠶絲業沿革一覽表

第二項 各郡市ノ蠶絲業

賀	田	駿	富	庵	安	靜
茂	方	東	士	原	倍	岡
郡	郡	郡	郡	郡	郡	市
二二	二九	三一	三四	三七	四〇	四二

志太郡	四二
榛原郡	四五
小笠郡	四七
周智郡	五〇
磐田郡	五二
濱名郡	五六
引佐郡	六一

第三項 桑園ニ關スル事項

桑園設置獎勵	六六
桑樹種類調査	七一
桑園變換見込調査	七二
桑園増殖獎勵	七四
桑園ト煙草畑トノ關係調査	七七
静岡縣桑園品評會	八一
桑樹病蟲害驅除豫防	九一

第四項 蠶種ニ關スル事項

蠶種取締	九五
蠶種下渡ニ就キ申諭	一〇四
蠶種改良	一〇四
一化性人工越冬ノ起因	一〇八
二化性人工三化ノ起因	一一二
多化性蠶種ノ起因	一一三
中遠蠶種品評會	一一三
沼津支部種繭品評會	一一五
静岡縣種繭品評會	一一七
風穴調査	一二九
共同蠶種貯藏庫	一三〇
静岡縣原蠶種製造所	一三一

第五項 養蠶ニ關スル事項

一三三

- 養蠶ノ開發 一三二
- 共進會並品評會 一三五
- 養蠶傳習所 一三八
- 蠶業講話會 一四七
- 蠶業講習會 一四九
- 蠶絲業大會 一五五
- 蠶絲業ニ關スル諭告 一五五
- 蠶絲業諮問會 一六〇
- 蠶室品評會 一六〇
- 繭質調査會 一六二
- 條桑育及全芽育ノ起因 一六四
- 五眠蠶ノ發生 一六五

第六項 製絲ニ關スル事項

- 縣立製絲所 一六六
- 糸價騰貴ニ就キ論達 一六七

- 製絲傳習 一六八
- 製絲講習會 一六八
- 生絲共同揚簍並荷造所 一六九
- 製絲ニ關スル諮問 一七一
- 殺蛹乾繭場設置獎勵 一七三
- 補成工女養成 一七四
- 製絲競技會 一七六
- 生絲改良 一七八

第七項 蠶絲業關係團體ニ關スル事項

- 組合事業獎勵 一八八
- 静岡縣蠶絲業組合取締所 一九一
- 静岡縣生絲製造同業組合 一九六
- 静岡縣蠶種同業組合 二〇〇
- 賀茂郡蠶絲同業組合 二〇二
- 田方郡蠶絲業組合 二〇四

- 駿東郡蠶絲業組合 二〇六
- 富士郡蠶絲業組合 二〇八
- 庵原郡蠶絲業組合 二一〇
- 安倍郡蠶絲業組合 二一三
- 静岡市蠶絲業組合 二一五
- 志太郡蠶絲業組合 二一七
- 榛原郡蠶絲業組合 二一九
- 小笠郡蠶絲業組合 二二〇
- 周智郡蠶絲業組合 二二三
- 磐田郡蠶絲業組合 二二五
- 濱名郡蠶絲業組合 二二八
- 引佐郡蠶絲業組合 二三〇
- 大日本蠶絲會静岡支會 二三二
- 蠶絲業關係團體一覽 二四九

第八項 蠶業教育ニ關スル事項

二五二

- 濱名郡立蠶業學校 二五一
- 静岡縣立農學校 二五五
- 志太郡立農學校 二五六
- 各乙種農學校 二五六
- 静岡縣立農事試驗場蠶業部 二五八

第九項 蠶絲業取締ニ關スル事項

二六一

- 蠶業取締所 二六一
- 蠶種製造免許 二六五

第十項 蠶病豫防ニ關スル事項

二七五

- 施行機關 二七五
- 蠶病消毒施行ノ狀況 二八〇
- 蠶種製造成績 二八二
- 養蠶者臨檢ノ狀況 二八八
- 蠶蛆驅除ノ狀況 二八九

法令違反者

二九三

自家用蠶種ノ取締

二九八

「フオルマリン」ノ檢定

二九九

講習並講話會

三〇〇

施行ノ影響

三〇二

蠶病豫防事務職員

三〇三

第十一項 蠶種検査法ニ關スル事項

施行ノ狀況

三三二

第十二項 蠶絲業功勞者

綠綬章拜受者

三三八

藍綬章拜受者

三三九

静岡縣桑園品評會表彰者

三四〇

静岡縣生絲製造同業組合表彰者

三四一

大日本蠶絲會表彰者

三四八

世界博覽會受賞者

三五〇

附 錄

統計 圖

静岡縣蠶絲業諸統計

縣勢一斑

一

生産一覽

三

蠶絲業ノ地位

九

勤業費豫算累年表

〇

勸業費豫算

一

郡市蠶絲業經費

一三

桑園ニ關スル事項

一三

桑園反別累年表

一三

桑園反別郡市別表

一四

桑園一反步當收葉量調査表

一五

桑園反別増減及施肥ノ狀況
桑園收支調査表

養蠶ニ關スル事項

春夏秋蠶繭額累年表
春夏秋蠶繭郡市別表
春蠶繭產額郡市別表
夏蠶繭產額郡市別表
秋蠶繭產額郡市別表
春夏秋蠶種掃立割合累年比較表
各種飼育別養蠶戶數調査表
各種共同事業郡市別表
春蠶繭相場累年比較表
普通育養蠶收支調査表
掃立十枚以上ノ養蠶者
生繭賣買業者數郡市別表
繭商會取引調査表

一七
一八
一九
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三

繭若搔ニ關スル調査表
蠶蛆被害調査表

「フオルマリン」消毒量調査表

蠶種ニ關スル事項

蠶種製造額累年表
蠶種製造額郡市別表
蠶種製造額年化性化期別表
蠶種製造者各種飼育別表
主要蠶種名稱及其產出額
蠶種製造收支調査表
種繭十石以上ノ蠶種製造者
蠶種需用高區別調査表
蠶種移出入調査表

製絲ニ關スル事項

蠶絲及真綿產額累年表
蠶絲及真綿產額表

三五
三五
三六
三七
三七
三九
三八
三九
四〇
四〇
四一
四三
四四
四五
四六
四六
四八

- 器械製絲產額郡市別表
- 座繰製絲產額郡市別表
- 玉糸製絲產額郡市別表
- 真綿產額郡市別表
- 器械製絲工場調査表
- 繰座製絲工場調査表
- 玉糸製絲工場調査表
- 製絲業收支調査表
- 鼠族調査

日本蠶絲業諸統計

日本蠶業史年表

桑園ニ關スル事項

- 桑園反別累年表
- 府縣桑園反別比較表
- 府縣耕地反別ニ對スル桑園ノ割合

四九
五〇
五一
五二
五二
五七
五八
五九
六〇
六三
六三
八六
八六
八七
八八

養蠶ニ關スル事項

- 府縣桑園一反歩ニ對スル收繭ノ割合
- 桑樹栽培ノ收支一覽表
- 繭產額累年表
- 府縣別繭產額累年表
- 府縣別春蠶飼育戸數累年表
- 府縣別夏蠶飼育戸數累年表
- 府縣別秋蠶飼育戸數累年表
- 府縣別掃立枚數累年表
- 春夏秋蠶繭產額累年表
- 府縣別養蠶家一戸ニ對スル收繭額
- 府縣別掃立蠶種一枚ニ對スル收繭額
- 全國春夏秋蠶別統計表
- 蠶種一枚ニ對スル收繭額
- 養蠶業ノ收支一覽表

蠶種ニ關スル事項

九〇
九三
九三
九四
九四
九七
一〇〇
一〇二
一〇五
一〇七
一〇八
一一六
一一九
一二〇
一二〇
一二一

蠶種產額累年表	一一一
府縣別蠶種產額累年表	一一二
府縣別蠶種製造戶數累年表	一二四
本邦風穴調査	一二七
蠶種製造業收支一覽表	一二九
府縣別蠶病豫防事務一覽表	一三〇
製絲ニ關スル事項	一三三
府縣別蠶絲產額表	一三三
蠶絲類真綿及蠶種產額累年表	一三五
製絲業收支一覽表	一三六
産業組合農業並蠶業關係官廳學校團體	一三七
最近五ヶ年間ニ於ケル産業組合累年表	一三七
府縣農業並關係官廳學校團體	一三九
各府縣農事試驗場農事及蠶業講習所一覽	一四一
各種農蠶學校	一四四
朝鮮蠶業一班	一五〇
朝鮮桑園反別及養蠶戶數	一五〇
朝鮮ヨリ輸出スル繭數量並價格	一五〇

蠶絲業法並關係法規

蠶絲業法	一
蠶絲業法施行期日ノ件	一
蠶絲業法施行規則	七
蠶絲業法施行手續	七
蠶病豫防心得	三六
蠶絲業法施行事務取扱規程	六二
蠶種検査手數料ニ關スル件	六四
蠶種検査手數料徵收規程	七〇
種繭審査會規則	七〇
蠶業取締所規程	七一
自家用蠶種ヲ製造シ得ヘキ地方指定	七三
	七四

静岡縣蠶絲業沿革史目次終

静岡縣蠶絲業沿革史

第一項 蠶絲業ノ沿革

古代ノ狀勢

▲蠶業ノ起原、本縣蠶絲業ノ起原ハ其由來極メテ古ク、傳フル所ニ依レハ紀元四百四十二年即チ孝靈天皇七十二年、秦人徐福童男女千人ヲ率井テ來リ蓬萊山今ノ富ニ止マツテ遂ニ歸ラスト、後世之ヲ推證シテ、富士山麓ニ接スル甲駿ノ口碑ニ當時秦人カ養蠶ノ道ヲ同地ニ傳ヘシト云フ、蓋秦人徐福カ藥ヲ求メントシテ我國ニ渡來シ、甲駿地方ニ住居セシコトハ事實ニ符合スル處ナリト雖、養蠶ノ傳説ハ信據スル所ナキカ如シ。

▲駿河錦綾ヲ織ル、降テ紀元千三百七十二年即チ元明天皇和銅五年七月、桃文部たけふらびとヲシテ伊勢、尾張、三河、駿河、近江、越前、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、播磨、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波、伊豫、讃岐其他ノ三十一ヶ國ニ命シ錦綾ヲ織ラシメタリト云フ、蓋是等ノ諸國カ錦綾織成ノ命ヲ蒙リタル必スヤ其原料モ同地ニ產出シタルモノナルヘク、若シ果シテ然ランニハ、當時駿河國ハ既ニ養蠶ノ行ハレタルコトヲ知ルニ足ルヘシ。

▲蠶絲ノ文字ヲ獻ス、紀元千四百十七年即チ孝謙天皇天平寶字元年丁酉、駿河國益頭郡ノ人金刺かきざしノ舍人麻自まじハ、蠶ノ絲ヲ吐キテ文字ヲ成スヲ獻ス、其文ニ曰ク「五月八日開ニ下帝釋標ニ知ニ天皇命百年」トアリ、因

テ天平勝寶九年ヲ改メテ天平寶字元年トシ、麻自ヲ從六位ニ叙シ、純二十疋調布八十疋正稅二千束ヲ賜ヒ執待ツテ參上セラル、驛使中位ノ舍人、少初位上賀茂君繼手ヲ從八位下ニ叙シ、純十疋調綿二十屯、調布十疋ヲ賜ヒ、當郡ノ百姓ニハ復一年賦ヲ賜フト、蓋駿河國志太郡モ燒津益津等ノ地名アルヲ見レハ當時益頭郡ト稱セシハ同地方ノコトナランカ。

伊豆駿河絹ヲ産ス、紀元千四百五十六年即チ桓武天皇延歷十五年ノ頃、養蠶ノ行ハレタル國ハ凡ソ三十四ヶ國ニシテ、伊豆、駿河モ其内ニ在リ共ニ絹織物ヲ産セシト云フ、降テ紀元千五百四十七年光孝天皇仁和三年ニ至リ、伊賀、伊勢、尾張、伊豆、近江、美濃、越後、丹後、但馬、播磨、備前、備後、紀伊、阿波、讃岐、土佐等ノ國々ヨリ絹ヲ貢スルニ能惡甚シクシテ昔日ノ如クナラス、勅シテ國寄ヲ謹メ正倉ノ舊樣ノ絹ヲ探リ取り、國毎ニ一疋ヲ賜ヒ舊樣ニ依リテ織物ヲ作ラシムトアリ。

伊豆駿河遠江絹、純ヲ輸ス、紀元千五百八十年即チ醍醐天皇、延喜五年、世ニ有名ナル延喜式ヲ定メ、庸調管料度ヲ凡テ畫一ノ式ニ據ラシムルニ至レリ、即チ庸調ノ蠶絲、絹、綿及品定左ノ如シ。

- 上 絲 國 伊勢外十一ヶ國
- 中 絲 國 伊賀外二十四ヶ國 遠江國此内ニ屬ス
- 龜 絲 國 駿河、伊豆外九ヶ國

又延喜式ニ於テ交易ノ雜物ヲ品定セラレタル中、本縣ニ屬スルモノハ遠江絹六丈八尺、駿河絹二百疋也、尙此式ニ依リ伊賀外二十五國 遠江國此内ニ屬スハ絹ヲ輸シ、駿河伊豆外八國ハ純ヲ輸ス。

調ノ綾	十三疋	二窠綾	八疋	三窠綾	二十疋	七窠綾	二十五疋
小鸚鵡綾	二十七疋	蓋薇綾	二十四疋	六瓜核	十疋	赤瓜核綾	二十疋
吳服綾白	二十疋	吳服綾赤	十五疋	御機料白疋	十二疋	緋綾	四十疋
經綿	十五疋	橡綿	二十五疋	自餘絹ヲ輸ス			
但山香郡ハ調庸布ヲ輸ス							
調ノ一窠綾	六疋	二窠綾	五疋	三窠綾	四疋	小鸚鵡綾	一疋
駿河 微蓋綾	三疋	橡綿	十三疋	綿	百二十疋	標綿	八疋
皂綿	十疋	自餘純ヲ輸ス					

又曰ク祿物價法トシテハ絹一疋、絲一絢 百八十疋當ル 綿一屯トス、本縣ニ屬スルモノハ遠江絹八十束、駿河絹八十束、伊豆絲八束也。

駿河絹綿ヲ産ス、紀元千九百三年以後嵯峨天皇寬元時代駿河國富士郡ヨリ絹綿ヲ産スト傳フ。當時爲家卿ノ歌ニ

駿河なる富士のくはこの新綿は
高嶺の雪の色に似るらん

爾來舊記ノ微スヘキモノナク、本縣蠶業ノ事蹟漠然トシテ知ルニ由ナシト雖、惟フニ駿河遠江ノ一部ニシテ甲信地方ニ隣接セル村落ニ於テハ、自然ニ其風ヲ移シテ往昔ヨリ養蠶ノ行ハレタリシヲ推知スルニ難カ

ラス、然ルニ之カ範圍ハ素ヨリ狭小ニシテ、業態亦微々タリシカ如シ、殊ニ藩政時代ニ至リ是等山間地方ニ於テハ茶業漸次隆盛ニ向ヒタルノ徵候アリシヲ見レハ、本縣蠶業ノ發達セザリシハ蓋偶然ニアラサル也。

明治時代ノ狀勢

前記ノ如ク本縣ノ蠶絲業ハ古來只僅ニ其根跡ヲ止メタルニ過キサリシモ、安政六年貿易市場ノ開始セララルヤ蠶種及生絲ハ頓ニ海外ニ需用セララル、ヨリス業昂進ノ端緒ヲ開キ終ニ今日ノ隆盛發達ヲ見ルニ至リタル也。

▲發展ノ動機、今其事蹟ノ大要ヲ記スレハ、慶應ヨリ明治初年ニ亘リテ長野、山梨等ノ蠶種商人ハ伊豆及東駿地方へ入り來リ、土地ノ野生桑ヲ利用シテ自ラ養蠶ヲ爲シ又繭ヲ買聚メテ蠶種ノ製造ヲ爲ス者多ク繭價爲ニ暴騰セリ、殊ニ伊豆賀茂郡ハ氣候最モ温暖ニシテ能ク養蠶ニ適シ加フルニ野生桑ニモ豊富ナリシカ故ニ、専ラ此地ニ入り來リテ養蠶及製種ヲ營ム者尠ナカラス、一時ハ駿遠豆三ヶ國中第一ノ蠶種製造地タリ、更ニ王政維新ノ頃徳川氏藩籍ヲ駿遠ノ地ニ移スニ當リ、武州八王子邊ヨリ共ニ移住セシ藩士中、自家ノ經驗ニ依リテ養蠶、製種及絹織物ノ業ヲ營ミ相當ノ利潤ヲ得シカハ、附近之ニ倣フニ至レリ、而シテ廢藩置縣ノ頃今ノ静岡縣ハ足柄賀茂郡及相模國足柄郡、韭山、静岡、濱松ノ四縣ニ分轄セラレシヲ以テ、政府ノ殖産興業ノ趣旨ニ基キ産業ノ獎勵ヲ行フニモ自ラ其事情ヲ異ニシタルカ如シ、即チ足柄及韭山縣ハ専ラ蠶絲業ニ濱松縣ハ専ラ茶業ニ重キヲ置キ静岡縣ハ蠶茶業共ニ獎勵セラレタリ。

▲蠶種業ノ一頓挫、明治ノ初年輸出蠶種ノ製造盛ナリシ當時ニアリテ、恐ルヘキ蠶蛆ハ既ニ其害ヲ逞フシタルヲ以テ、發蛾ノ歩合ヲ高メンニハ所謂砂地ノ桑葉ニ如クモノナシトテ、狩野川沿岸ノ清水村富士川沿岸ノ岩松村、大井川沿岸ノ吉田村、天龍川沿岸ノ中瀬村等ニハ桑園ノ開拓ヲ行ヒ蠶種製造ニ著手シタル者續出セリ、然ルニ未タ幾何ナラスシテ不幸ニモ輸出蠶種ハ漸次悲況ニ陥リ、價格一時ニ暴落セシヲ以テ其發達ヲ阻碍シタルコト尠ナシトセス、政府ハ同三年ヨリ八年ニ跨リ種々ノ規則ヲ設ケテ、蠶種ノ取締ヲ勵行シ挽回策ヲ講シタルハ、本縣モ亦同八年發布ノ蠶種製造條例ニ基キ豆相組、富士川組、舜川組等ヲ組織シ、更ニ同九年三組合ヲ合同シテ鼎組トナシ多少ノ製造ヲ繼續セシモ、種價遂ニ恢復ヲ見ルニ至ラス、加之輸出益々減少スルノミナレハ、同十一年ニハ蠶種ニ關スル取締規則全廢セララル、ニ從テ、自然組合モ解散シ蠶種ノ製造全ク中絶スルノ悲運ニ遭遇セリ、之ニ反シ生絲ハ漸次海外ノ需用ヲ増加シ來リ、輸出品トシテ最重要ノ位置ヲ占メタルノミナラス、政府ハ富岡製絲場ヲ開始シテ各府縣ヨリ傳習生ノ入場ヲ許シタルニ依リ、明治五年松崎、韭山、濱松等ヨリ二十餘名ノ子女之ニ入場シ、同八年卒業歸國スルト同時ニ有志ノ結社ヲ以テ韭山及松崎ニ製絲場建設ヲ見ル、同製絲場ハ富岡ノ共燃式ヲ本製ニ改造シタルモノニシテ汽力ニ依リテ煮繭セリト云フ、又小樽止ヲ踏ミ止メトナシタルノ新案ヲ添ヘテ設備ハ勿論微々タル試験的ノモノナリシ次テ同十年縣立製絲場ヲ静岡勸工所内ニ起シ、更ニ之ト相前後シテ濱松ニ五ヶ所其他ニ數ヶ所ノ工場設立セラレ、縣ノ獎勵ト相俟テ民間有志ノ經營ニ成ルモノ同十二年ニ八十餘ヶ所ヲ算スルニ至リタレトモ、適當ノ原料繭ニ乏シカリシト技術進マサリシトニ依テ、收支償ヒ難ク遂ニ四五年ニシテ多クハ失敗ニ終ラシメ、未タ斯業ノ趨向ヲ進ムルノ時運ニ達セザリシ。

▲挽回ノ期ニ向フ、蠶絲業ノ健全ナル發達ヲ期センニハ、先ツ從來未熟ナル飼育法ノ改善ヲ圖ルヲ以テ急務トナシ、有志ノ唱導ニ依リテ同十六年富士郡岩松村ニ養蠶傳習所ヲ開設シ教師ハ福嶋縣伊達郡ヨリ縣費ヲ以テ招聘セリ、奥州ニ行ハレタル清温育莖栽桑法ノ傳習ヲ行ヒ、次テ翌十七年ヨリ縣廳ニ養蠶教師二名ヲ常設シ、樞要ノ地ニ公設傳習所ヲ開キテ生徒ヲ養成シ、又一面ニハ巡回指導及講話ヲ爲シ、尙桑園ノ増殖ヲ圖ランカ爲種苗交換法ヲ設ケテ苗木ノ配付ヲ行ヒ、着々改良ノ途ニ向ハントスルニ際シ、同十八年政府ハ蠶絲業組合規則ヲ發布シ生絲荷造ノ一定及蠶種微粒子病毒検査ヲ施行セシムルコトナレリ。

▲擴張時代、同十九年蠶絲業組合取締規則ヲ制定シテ取締所ノ下ニ各郡組合ヲ組織セシメ、生絲莖蠶種ノ検査ヲ實施セリ、翌二十年ヨリ更ニ座繰製絲傳習所ヲ各地ニ開キテ製絲ノ獎勵ヲ行ヒ孜々トシテ改良ニ努ムル處アリ、時恰モ東海道鐵道全通シ交通機關ノ完成ニ伴フテ追々信州地方製絲家ノ繭出張仕入ヲ始メタレハ、繭價ハ追々向上シテ自ラ斯業ノ發展ヲ促シ一旦沈衰セシ地方製絲業モ續テ再興ノ時運ニ會セリ、斯クテ同二十七八年頃ヨリハ絲價一層順調ヲ保チ、蠶絲業ヲシテ益々有望ノ事業タラシメタレハ、到ル處桑園ノ新設ヲ見サルナク、進ミテ蠶室ヲ建造シテ大養蠶ヲ試ミントスル者續出セリ、當時小松原知事ハ縣雇教師ヲ各郡蠶絲業組合ニ派遣シ、自ラ縣下ヲ巡回シテ親シク當業者ノ實況ヲ視察シ、郡蠶絲業組合ニ勸メテ町村毎ニ小組合ヲ組織セシメ、共同一致ノ効果ヲ全フセムコトヲ期セシメタリ、殊ニ製絲場ノ如キモ此際一時ニ勃興シ、三十年ニハ實ニ七十餘ヶ所ノ多キニ達シ、同三十二年ニハ絲價更ニ昂騰セシ爲遂ニ九十餘ヶ所ヲ算スルニ至レリ。

▲保護獎勵、時勢ノ進歩ニ伴ヒ大ニ斯業ノ發達ヲ謀ラサルヘカラサル状態ニアルヲ以テ、縣ハ同三十五年以來保護獎勵ノ方針ヲ樹テ、補助金交附ノ規程ヲ設ケテ短期蠶業傳習、同講習講話會、蠶種改良、蠶病消毒、桑園増殖、殺蛹乾繭場、生絲共同揚糞所、同荷造所、製絲工女養成、製絲競技會、桑園品評會、種繭品評會、製絲技術員設置等各種事業ノ獎勵ヲ行ヒ、年ヲ逐テ進歩ノ趨勢ヲ示シツ、アリ、尙重復ノ嫌ナキニ非サルモ桑園、蠶種、養蠶、製絲ノ各項ニ就キ其事蹟ノ大要ヲ記セハ左ノ如シ。

一、桑園、由來本縣ノ氣候風土ハ好ク桑樹ノ生育ニ適シ野生ノ桑樹到ル所ニ繁茂セシカハ、當初ノ養蠶者ハ殆ト之ニ依テ任意ノ採桑ヲ爲シ得タルカ故ニ、栽桑ニ意ヲ用フルモノ甚タ尠ナカリシ、然ルニ斯業ノ進歩ニ伴ヒ漸ク栽桑ノ必要ヲ認メ、明治十一年頃ヨリ縣ノ獎勵保護ニ依リ、福島地方ヨリ漸次新種類ヲ移入シ、同二十年ニハ實ニ二千四十餘町ヲ算スルニ至レリ、斯クシテ逐年増加シ四十年前ニ比スレハ約六倍程ヲ設ケ桑園ノ増殖ト改良トヲ獎勵セシ結果、現今一萬二千有餘町歩ニ達シ二十年前ニ比スレハ約六倍ノ増加ヲ示セリ、桑種中最モ多ク栽植セラル、モノハ十文字ニシテ全桑園ノ八割ヲ占メ、其他ニアリテハ各郡一律ナラス、即チ濱名、引佐、遠州高助通稱、遠高、磐田、周智ハ四方咲、島村、安倍、庵原ハ魯桑、富士ハ坂東、信濃芽、駿東、田方ハ與平、魯桑、賀茂ハ島桑、魯桑等ヲ最多トス、仕立法ハ種々アレトモ概ネ根刈ニシテ近來密植ニ傾キ一反歩千本以上ヲ越ユルモノ多キニ至レリ、耕耘及施肥ハ土地ノ狀況及農家經濟ノ状態ニ從ヒ時期施肥量區々タルヲ免レサルモ、概ネ春季刈取前後及晩秋若ハ初冬ニ耕鋤ヲ行ヒ同時ニ雜肥、雜草、海草、人糞尿、魚肥、大豆粕等ヲ施スヲ常トス、而シテ桑園ハ多ク河川ノ沿岸ニ在リテ、

殊ニ狩野、天龍兩川ノ沿岸及濱名湖周邊ノ桑園ハ縣下ニ冠タルモノトス。

二、蠶種、輸出ノ旺盛ナリシ時代ハ相當ノ産額ヲ見タリシモ、數年ニシテ衰頽ニ傾キ爾來專ラ長野、福島、群馬、埼玉、栃木、山梨等ノ蠶種ヲ需用セリ、斯クテ明治三十一年蠶種検査法ヲ施行セララル、ヤ、縣ハ地方蠶種ノ發達ヲ促サンカ爲、三十四年以後三ヶ年間蠶種改良費交付規程ヲ設ケ、青熟、中巢、小石丸、又昔、白玉ノ四種ヲ限定シテ補助ヲ與ヘ、殊ニ原種製造ヲ獎勵シタル結果漸次蠶種ノ信用ヲ高メテ長足ノ進歩ヲ來シ、加フルニ風穴ノ設備整フト共ニ、風穴秋蠶種ノ製造次第増加シタリ、尙賀茂、田方、駿東、周智、引佐等ニハ秋蠶生種ノ産出尠ナカラスシテ、其成績良好ナルモ特ニ風穴秋蠶種ハ頓ニ名聲ヲ昂メ躍然他ヲ拔クノ概アリ、彼ノ濱名郡ニ於テ一時隆盛ヲ極メタル多化性蠶種ノ製造ハ秋蠶種ノ改善増加ニ伴ヒ、逐年産額遞減シツ、アリ、今ヤ本縣蠶種製造業ハ旭日昇天ノ勢ヲ以テ數年以前ヨリ愛知、徳島、千葉、茨城、福島其他各府縣ヘ移出スルノ盛況ヲ呈シ、原種産出額ノ如キ實ニ全國ノ第四位ヲ保ツニ至レリ。

三、養蠶、明治十四、五年頃迄ハ天然育ニ依リタルモノナルヘシト雖、爾來福島、長野、群馬等ヨリ教師ヲ聘シ、又ハ同地方ニ出テ傳習ヲ受クルモノ多ク漸次改良ノ歩ヲ進メタリ、然ルニ當時ノ飼育法ハ極メテ區々ナリシカ爲、一般養蠶者ヲシテ殆ト五里霧中ニ彷徨セシメ、失敗ヲ招クモノ尠ナカラサリシカ、同二十七年以降縣ニ技手三十八年以降ハ技師ヲ置キテ、毎年各地ニ講習講話會ヲ開キ盛ニ學理ノ普及ニ努メタル結果、逐年進歩發達ノ域ニ進ミ産額モ年ト共ニ著シク増加シ全國ノ第十位ヲ占ムルニ至リヌ。

四、製絲、明治十年前後漸ク素地成リシモ微々トシテ振ハサルコト久シ、後二十七八年ヨリ經濟界ノ膨

脹ニ伴ヒ俄ニ企業熱勃興シ、同三十年 年始メテ生絲製造同業組合ノ設立アリテ漸次斯業ノ發展ヲ企テ、縣獎勵ノ下ニ揚返、荷造、販買等ノ共同的經營ニ努メ着々改良ノ實蹟ヲ舉ケツ、アリ、而シテ生絲ノ品質ハ常ニ佳良ニシテ太絲ハ信州上一番ニ比シ四五十圓ノ高値ヲ維持シ、細絲モ亦優位ヲ占ムルノ状態ニアリ、然ルニ本縣ハ繭ノ出廻リ早キカ爲、各縣ヨリ爭フテ出張買入ヲ爲シ産額ノ約六割ヲ移出セラル、ノ有様ナルカ故ニ、勢ヒ競争ノ弊害ニ陥リ殊ニ松崎、濱松ハ其中心市場トナリ地方製絲家ニ及ホス影響尠ナカラサルモノ、如シ、今明治二年以降四十五年ニ至ル本縣蠶絲業ノ沿革ヲ表示スレハ左ノ如シ。

静岡縣蠶絲業沿革一覽表

年次	知事、部長	産額	縣事業費	事業其他
白明治二年至同九年		八年蠶種 九年同	三六六枚 一七七枚	<ul style="list-style-type: none"> ▲二年政府ハ勸業ノ令ヲ布キテ殖産興業ヲ獎勵セラリ元菑山縣ハ熱心農蠶ヲ獎勵シ桑樹ヲ植エシム ▲三年蠶種製造規則發布セラリ、同年大井川洪水ノ爲吉田村堤決潰シ長田六十餘町歩ハ荒蕪地トナル、同村飯塚孫次郎之カ開拓ノ方法ヲ案シ自己ノ所有地二十餘町歩ヲ桑園トナシ蠶業ノ獎勵ニ努ム ▲四年榛原郡吉田村ニ富岡式六人繰木製器機製絲場建設 ▲六年蠶種取締規則發布ニ依リ元濱松縣下河合三郎ハ大總代ニ元静岡縣下高杉太郎ハ副總代ニ舉ケラル ▲七年元柏木足柄縣令ハ伊豆地方ニ座繰製絲ヲ誘導ス ▲八年蠶種製造組合條例ニ依リ藤川組、富士川組豆相組ヲ組織ス

◎蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with columns for years (明治一〇年, 明治一二年, 明治一三年, 明治一四年, 明治一五年, 明治一六年, 明治一七年, 明治一八年) and rows for administrative details, production statistics (繭種, 蠶絲), and financial aspects (養蠶資金貸下, 製絲場建設).

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with columns for years (明治一三年, 明治一四年, 明治一五年, 明治一六年, 明治一七年, 明治一八年) and rows for administrative details, production statistics (繭種, 蠶絲), and financial aspects (養蠶教師費, 桑苗交換費).

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

明治二三年	明治二二年	明治二一年	明治二〇年	明治一九年	大書記官
知事 時任 爲基 書記官 伊志田友吉	知事 關口 隆吉 書記官 伊志田友吉	知事 關口 隆吉 書記官 伊志田友吉	知事 關口 隆吉 書記官 伊志田友吉	知事 關口 隆吉 書記官 伊志田友吉	永峰 彌吉 伊志田友吉
蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他
四九〇石 三三三石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	三三九石 三三三石
前年ニ同シ	補助蠶業組合取締所 八〇圓	蠶絲業組合取締所 八〇圓	蠶絲業組合取締所 八〇圓	桑苗交換費 二〇〇圓	
▲蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲田方郡上大見村八木下彌佐ハ一化性人 ▲越冬ノ試験ヲ行フ	▲養蠶教師縣御用掛ヲ廢シ各郡ニ補助ヲ 與ヘテ養蠶講習所ノ設置ヲ獎勵シ二十七 年度迄繼續ス ▲蠶絲業組合取締所ハ検査員ヲ置キテ蠶 種ノ検査ヲ行フ	▲養蠶教師縣御用掛ヲ廢シ各郡ニ補助ヲ 與ヘテ養蠶講習所ノ設置ヲ獎勵シ二十七 年度迄繼續ス ▲蠶絲業組合取締所ハ検査員ヲ置キテ蠶 種ノ検査ヲ行フ	▲座繰製絲普及ノ爲縣ヨリ補助ヲ與ヘテ 縣下七ヶ所ニ製絲講習所ヲ設置シ二十三年 迄繼續ス ▲傳林宇太郎ハ静岡製絲株式會社ヲ興ス ▲十二月農商務省養蠶巡回教師伊藤精一 ヲ本縣ニ派遣シ二十ヶ所ニ講話會ヲ開催 ▲天城山ニ小規模ノ風穴蠶種貯藏所ヲ設 ケ	▲引佐郡井伊谷村ニ私立養蠶講習所設立 ▲濱名郡白須賀町ニ於テ多化性蠶種ノ製 造販賣ヲ開始ス ▲静岡縣甲第九十九號蠶絲業組合取締規 則ヲ發布セラレ三月同規則ニ依リ蠶絲業 組合取締所ヲ創設シ縣下六區ニ分チテ 蠶絲業組合設置 ▲蠶絲業組合取締所事務業トシテ生絲製造 及荷造ノ検査監督並蠶種検査施行 ▲七月農田外五郡蠶絲業組合品評會ヲ 開催シ七等出仕土屋實審查長ヲ ▲安倍郡有東木ニ小規模ノ風穴蠶種貯藏 所ヲ設ケ	

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

明治二四年	明治二五年	明治二六年	明治二七年	明治二八年
知事 時任 爲基 書記官 村田 豊	知事 時任 爲基 書記官 久米 金彌	知事 小松原英太郎 書記官 岩男 三郎	知事 小松原英太郎 書記官 岩男 三郎	知事 小松原英太郎 書記官 三橋 勝到
蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他	蠶種 桑園 計 玉生絲 其他
二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石	二四六石 一四七石
前年ニ同シ	前年ニ同シ	前年ニ同シ	前年ニ同シ	蠶業教師雇入補助 二三四圓
▲蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲田方郡上大見村八木下彌佐ハ一化性人 ▲越冬ノ試験ヲ行フ	▲蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲駿東郡蠶絲業組合ニ於テ顯微鏡使用法 講習所ヲ開設	▲三月縣令第二十二號ニ依リ蠶絲業組合 取締所ノ組織ヲ變更シテ所長ヲ置キ各郡 蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲十二月農商務省技術士松永伍作ヲ聘シ賀茂 外六郡ニ巡回講話ヲ爲ス	▲蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲十一月舊豊田、山名、磐田郡蠶絲業組合 ハ静岡縣中遠蠶種品評會ヲ見付町ニ開催 ▲町田讓静岡縣技術士任セラレ三十年迄 繼續ス	▲養蠶講習所設置補助ヲ廢シテ各郡蠶絲 業組合ハ養蠶教師ヲ派遣シ三十三年度迄 繼續ス ▲六月生絲検査法發布ニ依リ蠶絲業組合 取締所生絲検査ヲ廢ス ▲蠶絲業組合取締所ハ蠶種ノ検査ヲ行フ ▲富士郡蠶絲業組合ハ蠶種品評會ヲ開 催 ▲八木下彌佐ハ天城風穴ヲ築造シ蠶種依 託貯藏ヲ開始ス

蠶絲業ノ沿革 靜岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with 4 columns: Year (明治二九年, 明治三〇年, 明治三一年, 明治三二年), Officials (知事, 書記官), Production (桑園, 蠶種, 蠶絲), and Expenses (蠶業教師雇入補助). Includes detailed financial data and a list of activities at the bottom.

蠶絲業ノ沿革 靜岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with 4 columns: Year (明治三三年, 明治三四年, 明治三五年), Officials (知事, 書記官), Production (桑園, 蠶種, 蠶絲), and Expenses (蠶業教師雇入補助). Includes detailed financial data and a list of activities at the bottom.

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with columns for years (明治三六年, 三七年, 三八年), officials (知事, 書記官), and various categories of expenses (桑園, 蠶種, 蠶絲, 蠶病豫防費, etc.) and a list of activities at the bottom.

蠶絲業ノ沿革 静岡縣蠶絲業沿革一覽表

Table with columns for years (明治三九年, 明治四〇年), officials (知事, 書記官), and various categories of expenses (桑園, 蠶種, 蠶絲, 蠶病豫防費, etc.) and a list of activities at the bottom.

明治四二年	知事李家隆介 内務部長小島源三郎	桑園 蠶種 普通製 一〇九四町 一五七九四一 六五九七枚 四七五〇枚 共六六七〇石 一八九七石 一八六四石 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓 桑園增殖獎勵費 三〇〇〇圓 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓	蠶絲 生絲 其他 四四八七貫 三三三二貫 三〇〇八貫 三〇〇五二圓	種繭品評會褒賞費 五〇圓 蠶業講習會費 三〇〇圓 補助工女養成費 一〇〇〇圓	蠶病豫防費 一〇〇〇圓 蠶業獎勵費 一〇〇〇圓 殺蛹乾場設置 一八〇〇圓 補助乾場設置 一八〇〇圓 桑園增殖獎勵費 三〇〇〇圓 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓	<ul style="list-style-type: none"> ▲六月三日 皇后陛下東京蠶業講習所ハ行啓アラセラレ勸業獎勵ノ令旨ヲ賜ハリタルニ付訓令乙第三六〇號ヲ以テ一般蠶業者ニ對シ勸業獎勵ノ諭旨ヲ發ス ▲十月十日 伏見宮總裁殿下ノ台臨ヲ仰キ静岡市ニ於テ大日本蠶絲會静岡支會發會式並品評會ヲ開催 ▲十一月十日 松平大日本蠶絲會頭、下岡農務局長、芳賀廣生、生絲検査所技師、鹽谷農務技師、來縣 ▲十月十日 縣會講事堂前庭ニ於テ蠶絲業大會ヲ開キ會スル者約二千名 ▲蠶絲同業組合沼津支部ハ第一回種繭品評會ヲ沼津町ニ開催生方木縣技師審査長ヲリ ▲第二回静岡縣製絲技術會ヲ開ク ▲女子蠶病豫防員養成ヲ爲四十一、二ノ兩年度女子蠶業講習會ヲ静岡市ニ開催 ▲桑園增殖獎勵ノ結果六十五町歩ヲ新設ス ▲十月濱名郡立蠶業學校ハ別科女子部ヲ開設 ▲本多東京蠶業講習所長ハ天城風穴改造調査ノ爲來縣 ▲四月明石農商務技師ハ女子蠶病豫防吏員檢定試驗ノ爲來縣 ▲賀茂郡下田町ニ生絲共同荷造所城南社建設 ▲工女養成ノ爲志太郡相川村小笠郡大須賀村ニ製絲傳習所ヲ開設 ▲第三回静岡縣製絲技術會ヲ開催ス ▲桑園增殖獎勵ノ結果百三十町歩ヲ新設ス ▲縣立農學校ハ見付ヨリ中泉ニ移轉シ蠶室四棟ヲ建設シ沼津支部ハ第二回種繭品評會ヲ沼津町ニ開催 ▲四月松田農商務技師ハ女子蠶病豫防吏員檢定試驗ノ爲來縣
-------	---------------------	--	---	---	--	--

明治四三年	知事李家隆介 内務部長小島源三郎	桑園 蠶種 普通製 一一五五町 一五五五四一 六五九七枚 四七五〇枚 共六六七〇石 一八九七石 一八六四石 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓 桑園增殖獎勵費 三〇〇〇圓 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓	蠶絲 生絲 其他 四四八七貫 三三三二貫 三〇〇八貫 三〇〇五二圓	種繭品評會褒賞費 五〇圓 蠶業講習會費 三〇〇圓 補助工女養成費 一〇〇〇圓	蠶病豫防費 一〇〇〇圓 蠶業獎勵費 一〇〇〇圓 殺蛹乾場設置 一八〇〇圓 補助乾場設置 一八〇〇圓 桑園增殖獎勵費 三〇〇〇圓 製絲增殖獎勵費 三〇〇〇圓	<ul style="list-style-type: none"> ▲一月生絲製造同業組合ハ蠶絲業功勞者ノ表彰式ヲ舉行 ▲本縣技師ニ渡道亥八任セラレ勤續中 ▲第一回静岡縣種繭品評會ヲ静岡市ニ開催シ渡邊本縣技師審査長ヲリ ▲農事試験場長審査長ヲ開催シ狩野 ▲第四回静岡縣製絲技術會ヲ開催渡邊技師審査長ヲリ ▲八月大水害善後策トシテ大日本蠶絲會静岡支會ハ晩秋蠶飼育ヲ獎勵ス ▲九月蠶質統一ノ目的ヲ以テ當業者ヲ縣廳ニ召集シ蠶質調査ヲ開ク ▲十一月濱名郡舞坂地方ニ「スキムシ」發生シ被害激甚ヲ極メタルニ付蠶病豫防法ヲ講ス ▲右實況視察ノ爲丹羽東京蠶業講習所技師來縣 ▲十一月木多東京蠶業講習所長天城風穴並名郡桑園ヲ視察 ▲十一月蠶種桑園品評會並製絲技術會褒賞式ヲ静岡市ニ舉行シ終テ蠶業講習會ヲ開催木多東京蠶業講習所長、番同所技師、松田農商務技師、沼津支會、下岡農務局長、芳賀廣生、生絲検査所技師、鹽谷農務技師、來縣 ▲九月十日 東京蠶業講習所技師ヲ下岡農務局長、芳賀廣生、生絲検査所技師、鹽谷農務技師、來縣 ▲十一月十日 松平大日本蠶絲會頭、下岡農務局長、芳賀廣生、生絲検査所技師、鹽谷農務技師、來縣 ▲十月十日 縣會講事堂前庭ニ於テ蠶絲業大會ヲ開キ會スル者約二千名 ▲蠶絲同業組合沼津支部ハ第一回種繭品評會ヲ沼津町ニ開催生方木縣技師審査長ヲリ ▲第二回静岡縣製絲技術會ヲ開ク ▲女子蠶病豫防員養成ヲ爲四十一、二ノ兩年度女子蠶業講習會ヲ静岡市ニ開催 ▲桑園增殖獎勵ノ結果六十五町歩ヲ新設ス ▲十月濱名郡立蠶業學校ハ別科女子部ヲ開設 ▲本多東京蠶業講習所長ハ天城風穴改造調査ノ爲來縣 ▲四月明石農商務技師ハ女子蠶病豫防吏員檢定試驗ノ爲來縣 ▲賀茂郡下田町ニ生絲共同荷造所城南社建設 ▲工女養成ノ爲志太郡相川村小笠郡大須賀村ニ製絲傳習所ヲ開設 ▲第三回静岡縣製絲技術會ヲ開催ス ▲桑園增殖獎勵ノ結果百三十町歩ヲ新設ス ▲縣立農學校ハ見付ヨリ中泉ニ移轉シ蠶室四棟ヲ建設シ沼津支部ハ第二回種繭品評會ヲ沼津町ニ開催 ▲四月松田農商務技師ハ女子蠶病豫防吏員檢定試驗ノ爲來縣
-------	---------------------	--	---	---	--	--

明治四四年	知事 石原健三 法學博士 松井茂 内務部長 小島源三郎	桑園 蠶種 普通製 價格 三、四、七、四、町 三、四、七、四、町 五、三、一、一、枚 五、四、五、〇、圓 九、七、五、四、石 四、一、三、七、石 四、一、六、五、石 五、三、〇、五、圓 蠶絲 價格 五、三、〇、五、圓	蠶病豫防費 蠶業獎勵費 殺蛹乾繭場設置 補助蠶種會費 製繭品評會費 種繭品評會費 蠶業講習會費	九、一、九、六、圓 一、〇、〇、〇、圓 六、〇、〇、圓 一、五、〇、圓 三、〇、〇、圓 三、〇、〇、圓 一、〇、九、圓	任用 ▲小笠郡蠶絲業組合ハ共同蠶種貯蔵庫ヲ 掛川町ニ建設 ▲外山博士來縣ノ際三島町ニ於テ蠶種ニ 關スル講話ヲ爲ス ▲蠶絲業十年計畫樹立ノ準備トシテ桑園 トナシ得ハキ不毛ノ地積ヲ調査ス ▲丹橋准一ハ事務官トシテ就任セラレ現 ニ勤續中
▲二月五日ヨリ三週間第一回本縣夏秋蠶 講習會ヲ静岡市ニ開催 ▲三月廿八日法律第四七號ヲ以テ蠶絲業 法公布セラレ ▲四月蠶病豫防事務所ヲ設置シ渡邊技師ヲ 岡縣蠶病豫防事務所ヲ設置シ渡邊技師所 長ヲ命セラレ下田、沼津、静岡、見付、濱松 ニ支所ヲ分置ス ▲五月十日勅令第一五〇號ヲ以テ原蠶種 製造所官制公布セラレ ▲第二回静岡縣蠶種講習會ヲ静岡市ニ開 催ス土屋東京蠶業講習所技師ニ審査長ヲ囑 託ス ▲第二回静岡縣桑園品評會ヲ開催渡邊技 師審査長ヲ任ズ ▲第五回静岡縣製繭技師講習會ヲ開催 ▲八月暴風水害ニ付大日本蠶絲會静岡支 會ハ常業者ニ警告書ヲ發シテ善後策ヲ講 ズ ▲十一月二十一日勅令第二七六號ヲ以テ 種繭講習會規則公布セラレ ▲十一月静岡縣第二回桑園品評會ハ蠶絲 業功勞者表彰式ヲ舉行 ▲十一月蠶種桑園品評會並蠶絲競技會褒 賞授與式ヲ静岡市ニ舉行シテ蠶業講習會 チ土屋東京蠶業講習所技師、明石農商務 技師、吉池大日本蠶絲會理事、右講師ト シテ來縣 ▲横田東京蠶業講習所技師、坪井、岩淵同 所兩技師ハ夏秋講習會講師トシテ來縣					

明治四五年	知事 法學博士 松井茂 内務部長 小島源三郎		蠶業取締費 殺蛹乾繭場設置 補助蠶種會費 製繭品評會費 種繭品評會費 蠶業講習會費	一、〇、八、六、圓 一、〇、〇、〇、圓 六、〇、〇、圓 一、五、〇、圓 三、〇、〇、圓 三、〇、〇、圓 一、〇、九、圓	▲一月一日蠶絲業法施行ニ就キ蠶業取締 所ヲ縣廳内ニ設置シ渡邊技師所長ヲ命セ テ所ヲ分置ス蠶業取締吏員八十一名ヲ任 用 ▲一月一日縣訓令第一號蠶業取締所處務 規程ヲ設ケ ▲一月十一日ヨリ三日間蠶業取締所主事 會議ヲ開キ松井知事ノ訓示アリタリ ▲一月十六日ヨリ五日間第二回夏秋蠶講 習會ヲ濱松市ニ開催 ▲十月東京蠶業講習所技師ハ右講師トシ テ來縣 ▲二月五日勅令第九號ニテ蠶種検査手數 料規程ヲ發布 ▲蠶種製造免許ハ二月末日迄ニ完了 ▲四月一日原蠶種製造所ヲ開始シ渡邊技 師所長ヲ阿部金子ノ兩人技師ヲ命セラレ ▲種繭講習會ヲ設置シ種繭ノ審査ヲ開始
▲小笠郡蠶絲業組合ハ蠶室品評會ヲ開催 渡邊技師審査長ヲ任ズ ▲製繭指導改善ノ爲縣農業者技師ヲ設置シ テ藤田新祐ヲ任用ス ▲六月太田技師ノ後任トシテ小林衛ハ縣 技師ニ任セラレ勤續中 ▲四月藤田新祐縣技師ニ任セラレ勤續中 ▲七月水野事務官補ノ後任ニ原日晃任セ ラレ勤續中 ▲十二月二十二日農商務省告示第六〇ニ 號ヲ以テ原蠶種製造所支所ノ位置及名稱 ヲ定ム ▲十二月二十八日縣令第一〇一號ヲ以テ 蠶絲業法施行手續ヲ發布ス ▲同縣令第一〇二號ニテ家用蠶種取締 規則ヲ廢止セラレ ▲縣會議長ニ池田猪三ヲ當選 ▲十二月外國蠶種調査ノ爲太田農商務技 師來縣 ▲岩井敬太郎ハ前警部長長岡篤敬ノ後任 トシテ勤續中					

生絲改良費 一七〇圓
種繭審査會費 五八圓
原蠶種製造所費 三六七圓

第二項 各都市ノ蠶絲業

賀茂郡

▲蠶業發達ノ由來、

本郡蠶絲業ノ起原ハ邈トシテ尋ヌルニ由ナシト雖、古キ手織木綿、紡織物等ニ往々絹糸ヲ織リ入レタルニ徴スレハ、少ナクモ二百餘年以前ヨリ養蠶ヲナセシモノアルヲ知ルニ足ルヘシ、古老ノ言フ所ニ依レハ、七、八十年以前ヨリ甲州郡内地方ノ絹ヲ行商スル者、毎年春冬ノ候信州産ノ蠶種ヲ携ヘ來ツテ之ヲ賣リ其顧客ハ蠶種半枚若ハ四半枚等ニシテ皆截賣ヲナスヲ常トセリ、種類ハ詳ナラサレトモ通稱姫子ト唱ヘ、繭ハ白色ニシテ少數ノ黄色繭ヲ雜ヘタルモノナリ、飼育ハ野桑ヲ摘ミ一日三四回ノ給桑ヲナスノミニシテ全ク農閑婦女子ノ餘業トナシ、一部落數戸ノ飼育ニ止マリテ掃立量モ僅少ナルモノナリシ、收購ハ各自ニ手取りシ屑物ハ夜業等ニ紡績シ手織綿トナシテ自家用ニ供スルヲ常トス、又甲州郡内相

▲各郡蠶絲業組合ハ蠶絲業法ニ基キ組織ヲ變更シテ同業組合ト爲サントス
▲三月廿五日大日本蠶絲會ハ各府縣代表者會ヲ開催
▲三月十八日ヨリ中央種繭審査會開會
▲四月田方、庵原、志太ノ各郡ニテ蠶業技手ヲ採用
▲農商務省ヨリ春蠶經濟調査ヲ本縣ニ囑託永井農商務技手來縣
▲四月二日遠州地方ニ去ル廿五年四月十日以來大凍害アリ桑園ノ被害少ナカラサルニ付善後策ヲ講ス
▲四月七日生絲製造同業組合ニテハ教婦長峰やゑヲ採用
▲五月四日大日本農會第三十回大集會ヲ静岡市ニ開會牧野農商務大臣、松平會頭、紫藤商務官、横井澤村兩農學博士、安藤農學士、前田正名等來縣セラル
▲五月四日牧野農商務大臣ハ本縣農事試驗場原蠶種製造所、工業試驗場、師範學校等ヲ視察セラル
▲五月松井知事養蠶狀況ヲ視察セラル

州八王子邊ヨリ地方ニ移住セシ者、往々他家ノ收購ヲ賃線シ或ハ賃機ヲナス者アリテ總テ彼ニ倣フノ風アリ、要スルニ蠶絲業ニ關スルコトハ中古甲相地方ヨリ移入セシモノ多カラシ。

明治二年ノ頃大政始メテ統シ官ハ勸業ノ令ヲ布キ四木三草ノ植栽ヲ獎勵セラル、地方廳當時葦山縣ハ管下篤志者數名ヲ擧ケテ、勸業係ト爲シ各部落ヲ巡回勸誘セシム、本郡ハ由來山桑ニ饒カナリシヲ以テ農閑ノ稼業トシテ、先ツ養蠶ヲナサシメタルニ多少ノ成績ヲ擧ケタリ、依テ桑園ヲ開キ或ハ田畑ノ畔閑宅地ノ周圍ニ桑樹ヲ栽培セシメ、蠶種ヲ福島、群馬、長野ノ諸縣ヨリ購ヒテ爾來斯業發展シタルカ、種類ハ皆青白ト唱フル黄色繭ナリシ、會々蠶種ノ海外輸出盛トナリ甲相駿ノ商估來ツテ成繭ヲ購フニ、其時期最モ早キヲ奇貨トシ新荷ノ先出ヲ競ヒ、數年ナラスシテ蠶種製造商ハ東西ヨリ幅濶シ、社寺堂宇ノ空濶ナルモノハ一時皆蠶種ノ製造所トナリ盛ナルコト想像ノ外ニアリ、蠶勢斯ノ如クナルカ故ニ繭價俄ニ騰貴シ繭一升ノ價五六拾錢ノ上ニ出テタルハ、實ニ成繭賣買ノ始メト爲ス、是ニ於テ郡民ハ蠶業ノ農家副業トシテ適切ナルモノタルコトヲ知レリ。

明治七、八年ノ交蠶種ヲ海外ニ輸出スルコト大ニ減退ス、即チ蠶種粗製濫造ノ結果横濱阜頭ニ在ル巨萬蠶種ヲ沒收シテ之ヲ野毛山ニ燒キ、又ハ令シテ他家ノ成繭ヲ買收シ蠶種ノ製造ヲ嚴禁セラル、ヤ本郡ニ又一人ノ蠶種製造者來ルコトナク而モ製絲業者無キ爲、收購者ハ其販路ニ困ミ僅ニ仲買人ニ依テ買收セラル、ノミナリシカハ、繭價大ニ下落シ蠶ヲ養フ者皆損失ヲ招ケリ、乃チ桑園ハ殆ト荒廢ニ頓シタルヲ以テ、桑ヲ拔キ或ハ楮ヲ植ユルモノアルニ至ル、當時足柄縣令柏木氏ハ大ニ之ヲ憂ヒ、勸業係ヲシテ各所ニ坐繰製

絲ヲ誘導セシメタルモ、業俄ニ熟セスシテ收支又償ハサリキ。

明治九年ニ至リ中川村大澤ニ松崎製絲場四十人ノ設立アリテ、同地附近及上河津村小鍋、稻生澤村、稻梓村横川、南中村下小野、南上村市之瀬等ニ繭ノ出張買入ヲ爲シ暗ニ仲買者ノ專買ヲ制シタルニ依リ、繭價大ニ挽回ス、同年依田勉三ハ群馬縣島村田島彌平ニ就キ養蠶ヲ學ヒ、同人製スル所ノ蠶種赤熟數枚ヲ持テ來リテ、土屋準次ト共同飼育ヲ爲シタルカ、其法從來ト異ナリ結果皆良好ナリシカハ、附近之ニ倣フ者多ク當時稱シテ清涼育ト云フ、同十二年ノ頃駿州沼津町ノ人土屋奠養蠶ニ精シト聞キテ依田佐二平先ツ之ヲ聘シ福島縣伊達郡産ノ蠶種赤熟青熟十數枚ヲ携へ來リテ飼育ス、田島式ノ家屋ヲ建設シテ中小ノ區劃ヲ設ケ、多ク火力ヲ利用シタルカ成績最モ良好ナリシカハ附近亦倣フモノ多ク之ヲ温度育ト云ヘリ、又稻生澤村矢田部強一郎ハ明治十年上州信州ヨリ伊勢崎、市平、小牧、與平等ノ苗木ヲ取寄セ所有ノ田圃ニ移植ス、同十一年、十二年ニ於テ蠶種二枚半宛ヲ從來ノ飼育法ニ依リテ飼育シ、失敗ヲ重ネタルカ故ニ之カ改良ノ必要ヲ感シ、十四年會々東京ニ開設ノ第二回内國勸業博覽會ノ參觀ヲ兼ネ、上武地方ノ養蠶製絲織物等ニ就キ視察調査ヲ爲シ得ル所アリテ歸來スルヤ、群馬縣島村田島彌平ヨリ蠶種青白ヲ取寄セ、上州ニ於テ行ハル、清涼育ニ改メタルニ成績良好ニシテ見ルヘキモノ多シ、翌十五年福島縣ヨリ市平、六郎、高助、赤木等ノ種類ヲ取寄セ之ヲ希望者ニ頒テリ、十八年森田龜次郎ヲ福島縣ニ遣ハシテ、伊達郡山戸村八島成正ニ就キ火助育ヲ研究セシメテ實行シタル結果一層良好トナリシヲ以テ、一般ニ改良ノ必要ヲ認め、先ツ自ラ生徒ヲ養成シテ大ニ該法ノ普及ニ努メシカハ、地方之ニ倣フ者漸次増加スルニ至リタリ、郡ニ於テハ蠶絲業組

台、蠶絲同業組合等ト圖リ一致戮力之カ獎勵ニ努メタルコト別項ニ詳ナリ、前述ノ經歷ニ依リ本郡ノ蠶業ハ明治十八九年ノ頃ヨリ一年ニ増進シ現今ノ盛況ヲ極メタルモノニシテ四十四年ニ於ケル産額ハ九千七百十一石價格三十七万三千九百圓ノ多キニ達セリ。

▲蠶種、前項記スルカ如ク一時海外輸出ノ盛ナルニ當リテハ、各地ノ製造家輻湊シ堂宇等ニ在リテ蠶種ノ製造ヲ爲シタルモ明治六、七年ノ頃輸出俄ニ減退ノ結果、製造人ノ來集頓ニ減少シ爾來信州邊ノ商人ヨリ需用ヲ仰キツ、アリシニ、十八九年頃ヨリ漸次蠶業ノ發展ニ伴ヒ、他府縣ノ蠶種ハ病毒多ク危險ノ虞アルヲ覺リシニ依リ自家用蠶種ヲ製造スル者多キヲ加へ、又二十年頃ヨリ蠶種ノ製造ヲ業トスル者漸次増加シツ、現時ノ狀況ヲ來シタルモノニシテ、今日ニ在リテハ他府縣産ハ約三分ノ一内外ニ止マリ、主トシテ、長野、山梨、福島、群馬等ヨリ移入ヲ爲ス、種類ハ同十四五年ノ頃青白種專ラ行ハレ、十八九年ノ頃ヨリ白繭種即チ赤熟、青熟、又昔、白玉等多キヲ加フルニ至リシカ、組合ニ於テハ蠶種ノ統一ヲ企圖シ、同三十年中又昔、白玉ノ二種ヲ矢田部強一郎ニ囑託製造シ、原種三千蛾ヲ組合員ニ配付飼育セシメタリ、尙組合ハ同二十二年頃ヨリ毎年蠶種検査員ヲ置キ、自家用蠶種ノ検査ヲ爲サシメタリ。

▲桑園、其開拓ヲ獎勵スル爲、明治十六、七年ノ頃ヨリ各町村ニ一二反歩ノ桑園ヲ設ケ、市平、柳田、六郎高助、赤木等ヲ養成シテ無代配付ヲ爲スコト四、五年ニ及ヒシカ故ニ桑園トシテ見ルヘキモノアルニ至レリ、次テ同十八年頃ヨリ福島縣産六郎高助、市平、赤木等ヲ購入シ、尙魯桑、大和錦、伊太利亞、十文字其他ノ種類モ漸次移入セラレテ、自然雜駁ニ傾キタリ、近來主トシテ栽培セラル、モノハ島實生、魯

桑實生、赤木等トス、同二十年前後ニ在リテハ移入苗木ニ依リ栽培シ來リシモ、取木、接木等ノ繁殖法專ラ行ハレ、他府縣ヨリ苗木ヲ移植スルコト僅少ナルニ至レリ、次ニ仕立方ハ根刈專ラ行ハレ、稀ニハ中刈高刈等アリ

▲傳習、明治十九年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	教師	傳習生數	年次	開設町村	教師	傳習生數
明治十九年	稻生澤	森田龜次郎	八名	明治二十年	竹麻町	小林董二	二五名
二二	下田町	同	一五	二九	上河津	大竹作之助	二二
二七	稻生澤	島木長	二九	三一	巡東	相馬某	?
二八	松崎町	小林董二	二〇	三七	仁科	永井碩庭	一一
	伊東町	毛利正雄	二一				

▲講習講話、明治二十一年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講師	聽講者數	年次	開設町村	講師	聽講者數
明治二十一年	下田町	佐々木長淳	?	明治二十年	安里	白倉保	三六名
二二	要所數ヶ所	伊藤藤精一	三〇名	二九	南中	阿部保太郎	二五
二五	各町村	同	?	三〇	福田	福田省三	五〇
二七	同	松永伍作	?		同	同	五〇
					阿部保太郎	阿部保太郎	三一

三一	稻生澤	河原次郎	六〇	各	各	鈴木國太郎	?
三三	字久須	井口幹夫	四六	各	生澤	土佐屋半次	八〇
三四	南上	同	三〇	各	科	阿部保太郎	六三
三五	白濱	横山賢	一五	各	濱	太田兵太郎	六七
三七	朝日	永井碩庭	一九	各	町	金子保	四六
三八	岩神	白倉賢保	三五	各	村	鈴木國太郎	?
三九	同	黒田龜次郎	?	各	村	石上國太郎	一三〇
	同	阿部保太郎	?	各	村	太田兵太郎	二七
	同	横山賢	四八	各	村	土屋半次	三二
	同	阿部保太郎	五〇	各	村	阿部保太郎	四〇

▲製絲、蠶業ノ發展ヲ圖ランニハ先ツ製絲業ヲ興スノ必要アルニ依リ、伊豆ニ二ヶ所ノ製絲場ヲ設ケントシ、田方郡ハ有志ヲ翁合シテ之ヲ韭山ニ設置シ、本郡ハ依田佐二平是ニ當レリ、乃チ明治五年妹ミチ、同姓善六、娘リク、同姓善吾、娘トヨ外數人ノ子女ヲ上州富岡ノ製絲場官立模範製絲場ニ學ハシメ、同八年業ヲ修メテ郷ニ歸ル、翌ニ於テ同年松崎町字清水ニ二十五人繰富岡式木製製絲器械ヲ備へ、前製絲場卒業ノ子女ヲ教師トナシテ製絲ヲ試ム、之レ本郡器械製絲ノ嚆矢也、同九年中川村大澤ニ四十人繰富岡式木製器械製絲場ヲ建設シタルカ、總テ前工場ヲ移轉セルモノニテ之ヲ松崎製絲場トナス。後規模ヲ擴張シテ六十人繰ト

改ム、次テ二十二年朝日村ニ渡邊製絲場、二十五年三濱村ニ勝田製絲場、二十八年南中村ニ山本製絲場、南崎村ニ山崎製絲場、二十九年稻生澤村ニ河内製絲場、岩科村ニ岩科製絲場、三十二年下河津ニ正木製絲場、川津製絲合資會社、三十三年稻梓村ニ加度製絲場、三十四年同村ニ鈴木製絲場、三十六年白濱村ニ白濱座製絲場ノ設立アリシカ、同三十五年ニハ山崎製絲場、三十三年ニハ加度製絲場、三十七年ニハ白濱座製絲場、四十年ニハ渡邊製絲場相次テ廢業シ、川津製絲合資會社及鈴木製絲場ハ種々ナル變遷ノ下ニ前者ハ己人有ノ川津製絲場、後者ハ稻梓製絲合資會社トナリ現存スルモノハ松崎、岩科、勝田、山本、河内、稻梓、川津、正木ノ諸工場ナリトス。

同二十年稻生澤村河内ニ郡立座製絲傳習所ヲ設ケテ、福島縣伊達郡鈴木トメ外鈴木某ノ兩人ヲ雇入レ該製絲ノ傍眞錦製造ノ傳習ヲナシタリ、其期間四ヶ月ニシテ生徒二十四人アリ、翌二十一年引繼キ同所ニ開設シ、教師トシテ群馬縣前橋谷關莊四郎夫妻ヲ雇入レ、約四ヶ月間ノ傳習ヲ爲サシメ生徒ハ同シク二十四人ナリシ、更ニ翌二十二年六月ヨリ約五ヶ月間朝日村田牛ニ座製傳習所ヲ設ケ、前記谷關莊四郎夫妻ヲ教師トナシ生徒三十五人ヲ養成セシカ、續テ渡邊製絲場ノ設置ヲ見ルニ及ヘリ、越エテ同三十年郡蠶絲業組合ハ下田町ニ眞綿傳習所ヲ設ケ、約二ヶ月間角眞綿製造ノ傳習ヲ爲シタリ、時ニ教師ニ福島縣伊達郡小國村ノ人三名ヲ雇入レ、生徒百二十人ヲ養成ス、翌三十一年引繼キ下河津村谷津ニ二ヶ月間開設シテ教師二名ヲ長野縣ヨリ雇入レ角眞綿及玉絲製造法ノ傳習ヲナシ生徒八十人ヲ養成シ、翌三十二年ハ岩科村岩科ニ二ヶ月間開設シテ教師二名ヲ長野縣ヨリ雇入レ角眞綿及玉絲製造法ノ傳習ヲナシ生徒三十五人ヲ養成

ス、亦翌三十三年三濱村ニ二ヶ月間開設シテ同シク長野縣ヨリ教師二名ヲ雇入レ、角眞綿及玉絲製造ノ傳習ヲナシ生徒四十人ヲ養成セリ。

▲織物、明治三十五年九月稻梓村落合ニ野田織物工場ノ設立アリタルモ、經營七年間ニシテ同四十一年中終ニ廢業スルニ至リシヨリ、本郡ニ於ケル織物ハ殆ト賃機織アルニ過キス。

田 方 郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡ノ養蠶ハ何レノ時代ニ創始セラレタルヤ詳ナラスト雖、明治初年頃迄ハ單ニ自家用ニ供スル目的ヲ以テ飼育シタルモノニシテ特記スヘキ事項ナク、爾後蠶絲ハ輸出品トシテ重要物産ナルコトヲ知り同九年以降川西村古奈石橋正哉函南村肥田小永井治郎兵衛其他ノ有志者率先シテ斯業ノ振興ニ努メ漸次各町村ニ飼育者ヲ増加スルニ至レリ、次テ明治十九年ニ及ヒ本縣御用掛鈴木彌十ヲ聘シ、各町村ニ講話會ヲ開催シテ斯業ヲ奨勵シ、二十二年ニハ福島縣ヨリ養蠶教師佐藤五郎助ヲ聘シ各町村ノ巡回教授ヲ爲サシメ、翌二十三年ニハ群馬縣高山社長町田菊次郎ヲ聘シ三島町ニ講話會ヲ開キテ飼育上ノ改良ヲ圖リ、尙同社ヨリ教授員ノ派遣ヲ請ヒ數年間巡回教授ヲ繼續シタル等改良指導ニ努メタリ、爾來引繼キ講話、講習會等ヲ開設シテ時代ノ進運ニ伴ヒ漸次改良ノ途ヲ講シタルヲ以テ、今ヤ一ケ年ノ産額五十有餘萬圓ニ達シ本郡重要物産中屈指ノ價格ヲ占ムルニ至レリ。

▲桑園、種類ハ十文字、與平、市平、魯桑、白早生、小牧、高助、小左衛門等ニシテ仕立法ハ多ク根刈

仕立也、種苗ハ長野、山梨、群馬等ヨリ購入シタルモ近時ハ郡内ニテ生産スルモノ尠ナカラス。
 ▲傳習、明治十八年以降屢開設セル狀況左ノ如シ、但シ二十三年以後モ數年繼續セリ。

年次	開設町村	講師	傳習生數
明治十八年	函南	鈴木彌十	?
明治二十年	下大見	鈴木彌惣八	四〇名
明治二十三年	各町巡回教授	高山社員	?

▲講習講話、明治三十三年以降三十五年ヲ除キ四十三年マテ各年開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講師	傳習生數
明治三十三年	伊東町	井口幹夫	三六名
明治三十四年	下野	同	七一
明治三十五年	土肥	同	五七
明治三十六年	中田	恩田慶次郎	五一
明治三十七年	戸田	同	二八
明治三十八年	内浦	阿部保太郎	五七
明治三十九年	北野	同	九六
明治四十年	上野	同	二八
明治四十一年	北野	同	九六
明治四十二年	中野	同	二八
明治四十三年	小室	同	九七
明治四十四年	田中	同	一三〇
明治四十五年	北山	同	一〇〇
明治四十六年	上野	同	?
明治四十七年	山北	同	?
明治四十八年	上野	同	?
明治四十九年	山北	同	?
明治五十年	上野	同	?
明治五十一年	山北	同	?
明治五十二年	上野	同	?
明治五十三年	山北	同	?
明治五十四年	上野	同	?
明治五十五年	山北	同	?
明治五十六年	上野	同	?
明治五十七年	山北	同	?
明治五十八年	上野	同	?
明治五十九年	山北	同	?
明治六十年	上野	同	?
明治六十一年	山北	同	?
明治六十二年	上野	同	?
明治六十三年	山北	同	?
明治六十四年	上野	同	?
明治六十五年	山北	同	?
明治六十六年	上野	同	?
明治六十七年	山北	同	?
明治六十八年	上野	同	?
明治六十九年	山北	同	?
明治七十年	上野	同	?
明治七十一年	山北	同	?
明治七十二年	上野	同	?
明治七十三年	山北	同	?
明治七十四年	上野	同	?
明治七十五年	山北	同	?
明治七十六年	上野	同	?
明治七十七年	山北	同	?
明治七十八年	上野	同	?
明治七十九年	山北	同	?
明治八十年	上野	同	?
明治八十一年	山北	同	?
明治八十二年	上野	同	?
明治八十三年	山北	同	?
明治八十四年	上野	同	?
明治八十五年	山北	同	?
明治八十六年	上野	同	?
明治八十七年	山北	同	?
明治八十八年	上野	同	?
明治八十九年	山北	同	?
明治九十年	上野	同	?
明治九十一年	山北	同	?
明治九十二年	上野	同	?
明治九十三年	山北	同	?
明治九十四年	上野	同	?
明治九十五年	山北	同	?
明治九十六年	上野	同	?
明治九十七年	山北	同	?
明治九十八年	上野	同	?
明治九十九年	山北	同	?
明治一〇〇年	上野	同	?

▲製絲、明治二十年頃迄ハ凡テ座繰器械ヲ用ヒテ製絲セルモノナリシカ、同二十三年河島製絲場ニ於テ器械製絲ヲ開始セシヨリ以來各所ニ工場設立セラレタリシモ、今日現存スル重ナルモノハ河島、市川、井出等ノ各製絲場也トス。

駿東郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡ニ於ケル養蠶業ノ創始亦詳ナラスト雖、弘化年間黃繭種ヲ飼育セシヨリ後漸次白繭種ヲ飼育シテ相當ノ收繭ヲ見タリ、從來幕府ノ禁絹主義ニ依リ蠶絲業ノ發達遅々タリシモ、安政五年横濱開港以來蠶種生絲絹織物等ノ輸出行ハレ、明治三年蠶種製造規則發布セラル、ヤ、同規則ニ依リ御厨町高杉太郎ハ元静岡縣蠶種副總代ヲ命セラレ、専ラ輸出蠶種ノ取締ニ當リ子上昇平、遠藤庄九郎、勝又茂三郎、贊川五平、大古田長平等盛ニ蠶種製造ヲ行ヒタリ、同七年縣參事南部廣予ハ本郡ヲ巡視シテ蠶業ノ有利ナルヲ説キ、縣勸業獎勵金ヲ各町村ニ貸與シ信州ヨリ小牧、甲州ヨリ與平ノ苗木ヲ購入セシム、當時永井嘉六郎、室伏收平、江藤俊平等率先シテ有志ヲ勸誘シ、群馬縣ヨリ養蠶教師ヲ聘シテ、桑樹及蠶兒飼育法ノ改良ヲ圖リ斯業ノ發展ニ意ヲ注ク所アリ、爾來生絲及絹織物ノ輸出益々増加スルニ伴ヒ、漸次進歩發達ノ狀況ヲ呈セリ、同十二年頃清水村玉川高田讓八郎ハ絹織會社ヲ創立シ、製絲並絹織物ノ製造輸出ヲ爲ス、延テ二十年頃ヨリ秋蠶飼育始マリシカ當時蠶種ヲ信州松本ニ需メ、飼育法何レモ幼稚ナリシヲ以テ養蠶者ハ共同シテ巡回教師ヲ傭聘シ研究ニ努メタリ、由來養蠶ハ本郡主要ナル事業ノ一トシテ目セララルルカ故ニ、

益々之カ進歩發達ヲ期センカ爲蠶種ノ共同購入、共同貯藏及共同催青等ヲ獎勵シ經濟上ノ利益ヲ促シ、更ニ共同稚蠶飼育ノ効果尠ナカラサルヲ認メシカハ、郡下清水村ニ飼育場ヲ建設シテ縣ヨリ教師ヲ聘シ講習會ヲ開設セリ、尙進ンテ桑園ノ改良増殖ヲ圖リ、又ハ蠶業上必要ナル共同購入、幻燈使用、巡回講話等ヲ實行シ、若ハ蠶蛆ノ豫防上所々ニ殺蛹器ヲ備付タル等、大ニ養蠶業ノ獎勵ニ努メツ、アリ。

▲蠶種、 明治ノ初年小山幸治ハ狩野川及黃瀬川沿岸ノ畑地ヲ蠶種製造用桑園ニ適スルモノトシテ之カ獎勵ニ努メタリ、二十三年頃贊川邦作、石垣專一郎等蠶種ノ製造ヲナシタルヨリ、自家用蠶種ノ製造ヲナス者並長野、山梨縣等ヨリ移入スル蠶種モ年一年ニ増加ヲ來セシカ、近年ニ至リテハ本縣製造蠶種ノ需用多キヲ加へ、今ヤ他縣ノ蠶種ハ殆ト其跡ヲ絶ツニ及ヘリ、種類ハ從來又昔、白龍、青熟、小石丸、大巢、改良又昔等ヲ飼育セシカ、近年共同購入ヲ爲ス結果大巢、小石丸、改良又昔、大和錦等重ナルモノトナレリ。

▲桑園、 明治ノ初年群馬縣島村崎玉縣兒玉郡地方ヨリ苗木ヲ移植シタルモ成績良好ナラサリシカ爲、群馬縣ヨリ桑樹栽培ニ熟練セル人ヲ聘シ或ハ十七、八年ノ頃崎玉縣地方ヨリ十文字ヲ購入シテ桑園ノ改良ヲ行ヘリ、是ヨリ先キ苗木ノ養成販買ヲ爲シテ好評ヲ博シタリシヲ以テ、採苗ノ業ヲ營ム者漸次増加シ尙一面ヨリ獎勵金ヲ支出シテ桑苗ノ無代配付ヲ爲ス等、之カ保護獎勵ニ努メタル結果著シク桑園ノ増殖ヲ見ルニ至レリ、然ルニ郡内晩生桑ノ割合多キニ偏セルニ依リ、將來ハ可成の中生桑ノ移植ヲ圖リ、以テ熟蠶期ヲ早カラシメンコトニ努メツ、アリ。

▲傳習、 明治二年頃群馬縣ヨリ養蠶教師ヲ聘シテ飼育法ノ傳習ヲ爲サシメ、後再ヒ本縣御用掛鈴木彌十ヲ聘シ傳習會ヲ開キタリ、爾後養蠶家ハ各自共同シテ巡回教師ヲ雇入レ、教授ヲ受タル等著々進歩發達ノ域ニ向ヘリ。

▲講習講話會、 開設狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講 師	職講者數	年次	開設町村	講 師	聽講者數
明治四年	清水村	太田兵太郎	六〇名	明治四年	清水村	太田兵太郎	一〇五名
同	同	曾布川誠一	一三〇	明治四年	徳倉村	飯島善太郎	八八

富 士 郡

▲蠶業發達ノ由來、 本郡ノ養蠶業ハ維新以前ヨリ自家用トシテ營ミタルモノアリシハ明カナリ、後横濱市開港場トナルニ及ヒテ生絲ノ輸出盛ニ行ハレタルヨリ、本郡ニ於テモ器械製絲ノ開始ヲ見ルニ至レリ、之レ實ニ今ヨリ三十年前ノコトナリキ、明治十八年八月郡下大宮町高瀬牧太郎、池谷繁太郎、池谷佐平等ハ蠶絲業組合設立ノ件ニ付縣廳へ上申シタルカ、翌十九年組合準則ヲ發布セラレ、同四月富士郡蠶絲業組合ヲ創立セラル、爾後改善ノ途ヲ講シ幾多ノ困難ヲ經テ、同二十九年頃ニ至リ愈々蠶業ノ改良ヲ要スルモノ多々アルヲ覺知シ組合ハ此機ニ乘シテ養蠶教師ヲ巡回セシメ、講習講話會品評會等種々ノ方法ヲ設ケテ、桑園ノ増殖及改良ヲ計リ以テ今日ニ至レリ、然ルニ組合創立以前ニ於テハ繭ノ産額僅少ナリシニモ拘ラス

製絲工場ノ建設アリシカハ他府縣ヨリ原料繭ヲ輸入シ取引盛ニ行ハレタルニヨリ、自然其供給ニ應スルノ利益アルヲ覺リ、飼育者ハ漸次増加シテ組合設立當時ノ如キハ不相應ナル大養蠶ヲ試ムルモノ多カリシカ、飼育術幼稚ナリシニ依リ不幸ニシテ多クハ失敗ニ歸シタルヲ以テ、他縣ヨリ教師ヲ聘シテ改良ニ努メタリト雖、是レ又氣候風土ノ經驗ニ乏シカリシ爲、飼育ノ方法ヲ誤リ失敗セシ者少ナカラス、當時生絲相場ノ低落ハ一般養蠶者ニ大ナル影響ヲ及ホシ一時衰頹ニ陥リタルコトアリシカ、後漸次順調ニ復スルニ隨ヒ、一面縣又ハ組合等ノ獎勵ニ依リ一層飼育ノ研究ニ力ヲ盡シ益々發達ノ域ニ進ミツ、アリ。

▲蠶種、本郡蠶絲業組合創設以來明治二十九年迄、静岡縣蠶絲業組合取締所ノ規定ニ基キ蠶種検査ヲ勵行シ來リシニ、三十年三月蠶種検査法ヲ發布シ、翌三十二年四月ヨリ之ヲ施行セラル、ニ至リタルヲ以テ、組合ハ組合員ノ希望ニ依リ顯微鏡検査ヲ行ヒ又ハ蠶種ノ貯藏ニ注意ヲ施シ上、三十一年ニハ貯藏箱百個ヲ製造シテ各町村ニ配付シタリ、蠶種ハ主トシテ長野、群馬、山梨、栃木、岐阜、富山ノ各縣ヨリ移入セラレタルモ、近年ニ至リテハ郡内ニ於テ製造セラレ、モノ尠ナカラス、種類ハ又昔、小石丸、青熟、白玉、銀白、均白、白龍、寶玉、信濃錦等種々アリシモ晩近ハ漸次其數ヲ減シ又昔、小石丸、青熟、中巢最モ多ク行ハレ概シテ大巢モノニ傾キツ、アリ。

▲桑園、從來與平、小牧、野桑ノ數種ニ過キサリシニ、明治十八九年頃ニ至リ縣廳ヨリ奥州苗木數種ヲ配付セラレタルヲ試作セシヨリ、養蠶ニ望ヲ囑スルモノ漸ク多キヲ加ヘテ、桑苗ノ植込ミモ亦盛ナルニ至レリ、時ニ苗木ノ賣買頻繁ナリシカ、國富一本七八拾錢大葉物四五拾錢ニシテ、魯桑、伊太利亞、落葉、

九紋龍等大葉者ヲ嗜好シ鶴田、柳田、高助、菊葉、十文字ハ庭木ノ如ク取引シテ只管流行ノ念ニ驅ラレ珍ヲ好ミ奇ヲ競フヨリ往々損失ヲ招ク者アリキ、サレハ何レノ桑園モ種類ノ雜駁ヲ免レサリシカ、追年栽植實驗ノ結果、土地ニ適合スルモノヲ選出シタルニヨリ、現今ニテハ十文字、與平、信濃芽阪東、魯桑ヲ多ク栽植セリ、種苗ハ主トシテ山梨、長野、福島地方ヨリ購入セシモ近年ハ却テ各縣へ移出スルヲ見ル、從來ハ單ニ春蠶用ノ目的ニテ栽植セシニ過キサリシト雖、追々夏秋蠶飼育行ハル、ニ從ヒ、摘葉數度ニ亘リシカハ桑樹ヲ萎縮スルモノト思考シ、一時ハ夏秋蠶飼育ヲ憂慮スル者サヘ生シタリシカ、事實ハ全ク之ニ反シ益々夏秋蠶飼育ノ旺盛ヲ來セシニヨリ、栽培法モ漸次變遷シ多ク密植桑園又ハ夏秋蠶專用桑園ヲ仕立ツルニ至レリ、郡蠶絲業組合施設事業中桑園ニ關スル獎勵事項ヲ舉クレハ、同三十六年、三十九年、四十年、四十四年ニ四回ノ桑園品評會ヲ開催シテ其改良ニ資シ、三十九年桑園ノ害蟲驅除ヲ各町村ニ依託勵行セシメタルニ、尺蠖六十五萬餘、金蝸蠶二萬餘、姬象四萬餘、金龜子二萬餘頭ヲ捕獲シタリ、同四十年補助金ヲ交付シテ各町村ニ新設桑園三十七ヶ所ヲ作ラシムル外縣廳ノ補助ヲ受ケ桑園十七ヶ所ヲ新設シ、四十一年ニハ桑苗ヲ仕立テテ、各町村組合員ニ配付セリ。

▲傳習、郡蠶絲業組合施設事業トシテ、養蠶傳習所又ハ巡回教師ヲ設置シタルモノヲ舉クレハ左ノ如シ。

年次	開設町村	教師
明治二十九年	傳法	山崎 又次
三〇	北山 上井出 白絲	淺見 喜代藏
明治三十三年		富士根 大淵 大宮 富丘
三四	加島 田子 岩松	關口 林源 小長 野三 佐野 山須 影山 子

三一	今泉 原田 吉永 須津	岡田 孫三 郎	四〇	郡下巡廻教授	關口 源三 郎
三二	霞岡 傳法 島田 柚野 上野	淺關 見喜 代藏	四二	郡下巡廻教授	關山 源三 郎

▲講習講話、郡蠶絲業組合同村農會ノ施設ニ係ルモノ左ノ如シ。

年次	開設町村	講師	日數	聴講者數	年次	開設町村	講師	日數	聴講者數
明治三四年	北山、上井出、白糸ノ三ヶ村	淺見喜代藏	一四	？名	明治四年	吉永	岩浪爲治	七	五九名
三五	同 大宮町	井口幹夫	二五	四四	同	野	横山 賢二	一四	一〇二
三六	同	横山 賢二	二六	七七	同	野	横山 賢二	七	一〇〇
三六	同	恩田經次郎	二五	二五	同	野	飯島善太郎	七	三七
三八	原田	石上巖太郎	七	五七	同	野	横山 賢二	一四	一〇〇
三九	南部各村	同	七	？	同	野	立田 清巳	七	五八
四〇	各町	田中直義	七	二三	同	野	黒田 龜次郎	七	？
四一	北山	田地川兵太郎	四〇	？	同	野	飯田 傳太郎	七	？
四一	岩松	金子保	七	一一七	同	野	立田 清巳	七	？
			七	四三	同	野	飯島善太郎	一四	？

▲製絲、座繰製絲ハ維新以前ヨリ行ハレタルモノナリシカ、横濱開港後生絲ノ輸出盛ナリシ爲、明治十六年頃始メテ器械工場ヲ設置シテ生絲ヲ製造シタルカ、相當ノ收益ヲ見タルヨリ漸次之カ増設ヲ來シ現今工場約二十ヲ算シ、縣下第一ノ製絲事業地トシテ目セラル、ニ至レリ、其製絲統一ヲ圖ルノ必要ヲ認メ、同三

十八年縣ヨリ補助ヲ受ケ大宮町ニ共同揚簀所ヲ設置シ製品ノ改良ヲ講シツ、アリ。
▲織物、明治三十五年吉永村ニ大島風通織ヲ製造スル者アリシカ、一、二年ニシテ失敗ニ終リ、三十七年縣ノ補助ヲ得テ大宮町ニ羽二重實習所ヲ設置セシカ、是レ亦充分ナル成績ヲ舉クル能ハス、次テ同四十一年同町ニ器械木綿織ヲ開始セシモ未タ好結果ヲ舉クルニ至ラサル状態ナリ。

庵原郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡ノ養蠶家ハ極メテ後進ニ屬シ、今ヲ去ルコト約八十年前即チ天保年間ニ於テ、稀ニ飼育スルモノナキニアラサリシモ其狀況詳ナラス、口碑ノ傳フル所ニ依レハ嘉永年間甲斐國八代郡ノ者烟草ヲ行商シテ、傍蠶種ヲ齎シ來リタルヨリ多少之ヲ試ムルモノアルニ至レリト雖、多クハ姥媪ノ閑業タルニ過キスシテ、當時飼育スル所ノ蠶兒ハ主トシテ二化性ヲ撰ミタルモノ、如シ、而シテ稀ニ一化性ヲ飼育スル者アルモ、發育不良又ハ病斃蠶續出シテ遂ニ結繭ヲ見ルニ至ラサリシカ、同人ハ年々來リテ蠶種ヲ商フト共ニ只管斯業ノ指導開發ニ努メタリト云フ、超エテ明治八年兩河内村源平鶴十郎ナル者養蠶業ニ留意シ、山梨縣ノ蠶業ヲ視察シテ専心斯業ニ從事セシモ、未タ研究ノ足ラサリシニ依リ成績著シカラス、茲ニ於テ歐然群馬縣ニ出テ飼育法ヲ學ヒタリ、是レ實ニ十六年ニシテ本郡ニ於ケル蠶業研究ノ嚆矢ト爲ス、同十八年茨城縣丸田徹三郎來リ、蠶業上ニ於ケル智識技術ヲ一般農家ニ注入シタル結果、歲ニ月ニ斯業ヲ經營スルモノ増加シタルヲ以テ、二十四年始メテ群馬縣高山社員片岡喜藏ヲ巡回教師トシテ聘シ、爾來時

々同一ノ方法ニ依リ斯業ノ發展ヲ促シツ、現今ニ至レリ。

▲蠶種、明治十二年ノ頃富士郡岩松村久保田庄作ノ製造ニ係ルモノヲ廣ク飼育セシコトアリ、而シテ十四年頃ヨリ山梨縣ノ者ニテ富士郡大宮町ニ觀音ノ例祭陰曆三月十八日アルニ際シ、露店ヲ張リテ白繭種ヲ競賣シタルカ購入掃立ヲ爲スモノ甚タ多カリシモノ、如シ、同二十五年頃ニ至リ内房村望月鶴吉、望月縫右工門及兩河内村ノ源平鶴十郎ハ、蠶種ノ製造ヲ試ミタルモ各十枚乃至八十枚ニ過キヌシテ成績不良ノ爲、三四年ニシテ中止スルニ至レリ、當時山梨、長野、群馬縣等ヨリ盛ニ販賣人入込ミ互ニ販路ノ擴張ヲ競ヒツ、漸次原種ノ選擇ニ努メ大巢大巢青、小巢白石丸ニ小巢ハ中巢ニ改良シテ直接養蠶家ニ供給セリ、同三十四五年頃ヨリ漸ク蠶種ノ購入ニ注意ヲ拂フニ至リ、殊ニ蠶種ノ検査法嚴重ナルニ及ヒテ一層蠶種ノ選擇ニ留意シ、田方、富士郡ヨリ購入シ又ハ共同購入等ヲ行ヒ、掃立ノ如キモ漸次増加シ四十二年ニ至リテハ春蠶四千七百八十枚、夏蠶九百九十三枚、秋蠶千七百二十二枚ノ多キニ達セリ。

▲桑園、明治十二、三年頃マテハ桑園ト稱スルモノ無ク、單ニ野桑即チ地桑又ハ山桑ノ粗植アリタルヨリ供給シ來リシモ、兩河内村源平鶴十郎ハ武藏國八王子ヨリ十文字苗五百本ヲ購入シ、同十八年茨城縣ノ丸田徹三郎來リテ、十文字、國富、魯桑、落葉、伊太利等ヲ獎勵シ全郡ニ普及セシメタリ、農家カ桑園ノ經營ニ努ムルニ至リシハ、蓋同人ノ熱心ナル指導與テカアルモノ、如ク、十文字、魯桑ハ現時猶優良タルノ資格ヲ失ハス。

▲傳習、明治二十六年兩河内村源平鶴十郎ハ蠶種製造ノ目的ヲ以テ私立傳習所ヲ設ケテ、自己ノ住宅蠶室ヲ傳習室ニ充テ田方郡川西村岩浪爲治、小笠郡伊藤誠太郎ヲ聘シ約三十名ノ終了者ヲ出セリ。

▲講習講話、明治二十五年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講	師
明治二年	由比町	井口幹夫	?
明治三年	興津町	松比野	岩浪爲治
明治四年	由比町	橫山	賢
明治五年	興津町	飯島善太郎	賢
明治六年	由比町	飯島善太郎	賢
明治七年	各町	市川和雄	一雄
明治八年	内房村	市川和雄	一雄
明治九年	西河内	池田國太郎	雄
明治十年	高部	池田國太郎	雄

備考 聽講者數ハ不詳ナルヲ以テ略ス

▲製絲、明治十八年九田徹三郎カ由比町入山ニ於テ座繰絲玉絲真綿ノ製造法ヲ傳習シタルヲ嚆矢トス、三十五年同町望月平太郎始メテ器械製絲場ヲ創立セシヨリ、以來引續キ松野村ニ手嶋、内房村ニ遠藤、富士川町ニ影山、蒲原町ニ五十嵐、江尻町ニ杉山羽衣、庵原村ニ庵原共同等ノ各製絲場設置セララルニ至レリ、次ニ座繰製絲場ノ重ナルモノハ小嶋村鈴木直次郎、同望月久作、飯田村佐藤松次郎等ノ經營ニシテ、其他工女十名以下ノ工場ハ二十六ヶ所アリ。

安 倍 郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡ニ於ケル蠶業ハ何レノ時代ニ創始セラレタルヤ明カナラスト雖、古老ノ言ニ依レハ北部山間ノ村落ハ最モ古クヨリ養蠶行ハレテ、順次南部平坦ノ地ニ及ホシタルモノ、如シ、今其一般ヲ叙スレハ、約百三十年前天明ノ年梅ヶ島村ノ某蠶種ヲ製造シ之ヲ甲州ニ賣出シタルコトアリ、後明治初年ニ於テ信州ノ商人大河内村有東木ニ來リテ養蠶ヲ勸誘スル折シモ、前記某ハ同地ヨリ養蠶教師ヲ聘シテ村内ヲ巡回セシム、斯ク北部山村ニ於ケル斯業ノ發端ハ先進地タル信州ノ商人カ山葵買入ノ爲、有東木地方ニ來リタルヨリ自然ニ其風ヲ移シタルニ起因ス、尙服織村ハ往昔服織ノ庄ト稱シ年代詳ナラサルモ多少ノ蠶兒ヲ飼育シタルモノノ如ク明治ノ初年ニ於テハ服織ノ職ハ機織ノ故事ニ依リテ名ツケシト云ヘリ石上久左工門ハ同地率先者ノ一人トシテ自ラ養蠶教師ヲ傭入レ専ラ斯業ヲ誘導スル所アリキ、轉シテ南部平坦ノ村落ハ主トシテ明治四、五年頃ヨリ始マリタルモノニテ、先ツ長田村方面ヨリ順次有度、豊田、大谷、千代田ノ各村ニ及ホセリ、其後同十六、七年本縣ヨリ教師ヲ派遣シ各村ニ講話會ヲ開キテ、蠶業思想ヲ鼓吹セラレタルニ依リ漸次發達ノ域ニ進ミタリ、同十九年以降蠶絲業組合ノ設立ヲ見ルニ當リ、蠶種及桑苗ノ無代配付若ハ巡回教師ヲ各村ニ派遣スル等、當業者ヲ指導誘掖スルニ努メ、三十九年ヨリ郡ハ毎年補助ヲ與ヘテ一層組合ノ活動ヲ促シ、又四十二年度ヨリハ組合技手ヲ常置セシメ、尙一面蠶病消毒、蠶蛆驅除豫防ノ普及ヲ圖ル等、協力一致之カ獎勵ニ努メタル結果、愈々發展ノ度ヲ加ヘ以テ今日ニ至レリ。

▲蠶種、明治ノ初年迄ハ多ク青白ヲ飼育セシカ後漸次白繭種トナリ、現今ハ春蠶種又昔、青熟、小石丸、白玉、白龍、光澤丸、白綾、青熟大巢、夏秋蠶ハ大和錦、龍馬、千代鶴等多クシテ、此等ノ大部分ハ本郡内製造蠶種ヲ以テ供給シツ、アリ。

▲桑園、北部ノ村落ニハ山林中ニ繁茂セル野生桑アリシヲ以テ、從來之ヲ少許ノ飼育ニ充テ來リシト雖、一般ニ栽植ヲ行フニ至リタルハ文久、慶應ノ頃ニシテ、信州松本地方ヨリ蠶返、四ツ目桑ヲ購入シタルヲ始メトス、明治初年ニハ青軸種ヲ移入シタル後更ニ甲州ヨリ金子、與平、菊葉等ヲ取寄セ、又同三十、三十一ノ兩年ニ於テハ、蠶絲業組合ヨリ多胡早生、十文字ヲ當業者ニ配付栽培セシメタレハ、漸次桑園ノ増殖ヲ見ルニ至リシカ、現今主ナル種類ハ十文字、魯桑、多胡早生、遠高、菊葉、金子ニテ就中十文字ハ最モ多シ、仕立法ハ多ク根刈ナレトモ稀ニ中刈若ハ喬木アリ。

▲傳習、明治二十年頃服織、玉川ノ二村ハ郡費ノ養蠶傳習所、又十七八年頃ヨリ三十五年頃迄静岡市西草深町ニ私立笹間傳習所、同二十七年服織村新聞ニ靜機社傳習所ヲ開設シテ地方養蠶ノ改良ヲ促セリ、尙近來大里村ノ岡南社、長田村ノ晁西社等各養蠶傳習所設置セラレテ幾多ノ生徒ヲ養成シツ、アリ。

▲講習講話、郡蠶絲業組合施設事業トシテ、數年以前ヨリ本縣技術官並蠶病豫防吏員ノ派遣ヲ請ヒ、尙郡蠶絲業組合技手ヲシテ各町村ニ就キ短期講習又ハ巡回講話ヲ爲サシメ、且ツ屑繭整理講習ヲモ開キツ、アリ。

▲製絲、明治十八九年頃ヨリ座繰製絲ハ各所ニ行ハレテ、三十四年頃座繰揚返場ヲ大里村川邊ニ設ケタ

ルモ幾何モナクシテ閉鎖シ、三保村ニ遠藤、服織村ニ靜綾館ノ二器械製絲場ヲ創設セラレシカ、前者ハ現時庵原郡ニ移轉シタレハ、目下ハ靜綾館製絲場ヲ存スルノミトナレリ。

▲織物、壽永年間服織ノ庄現今ノ服織村ニ於テ有名ナル倭文ト稱スル横筋ノ縮布ヲ織出シタルカ、今モ尙太神宮ノ御衣トシテ存スル由也、其他有名ノ賤機織ハ、明治十七八年頃靜岡授産場ニ於テ一種ノ綾織トシテ一時賞用サレタルモ近年ハ殆ト跡ヲ絶チタリ。

靜岡市

▲蠶業發達ノ由來、本市ハ從來養蠶者至テ尠ナク、主トシテ繭生絲商ナレハ蠶業ノ事蹟ハ特ニ記スヘキモノナシト雖、明治十七八年ノ頃笹間洗耳ハ西草深町ニ靜岡養蠶傳習所ヲ創立シ、土屋奠ヲ教師トシテ三十四五年頃專ラ是ニ盡瘁セシカハ、養成シタル生徒ハ廣ク縣下ニ亘リテ多數ニ達セリ。

▲講習講話、明治二十九年群馬縣高山社長町田菊次郎ヲ聘シテ講話會ヲ開キタリ。

▲製絲、明治二十年ノ頃樽林宇太郎ハ本市追手町舊城内ニ一大製絲場ヲ興シ、器械、工場共ニ殆ト理想的ニシテ縣下他ニ能ク比肩スヘキモノナカリシカ、同三十二年頃遂ニ閉鎖スルニ至ル、現今ハ本縣工業試驗場ノ充用家屋トナリタレトモ、大煙突ハ巍然トシテ昔ノ俥ヲ存セリ。

志太郎郡

▲蠶業發達ノ由來、明治五年頃郡下大洲村益田郁太郎大富村ノ原川治兵衛ハ、山梨、埼玉兩縣ヨリ教婦ヲ聘シ始メテ模範的養蠶ヲ營ミタリシカ、技術幼稚ナリシ爲數年ナラスシテ失敗ニ歸シ一時中絶ノ姿ナリシモ、十五年頃有志ノ發起ニ依リ小川村ニ養蠶傳習所ヲ開設シテヨリ漸次斯業ニ從事スルモノ増加シ、越エテ十六年始メテ本郡蠶絲業組合設置セラレ各所ニ傳習所ヲ設ケ、養蠶ニ桑園ニ改良發達ヲ圖リ以テ今日ニ至レリ。

▲蠶種、明治十五六年迄ハ安倍郡地方ヨリ多ク黃繭種ヲ移入セシモ、同二十七八年ヨリ主トシテ又昔、青熟、小石丸、良白、白龍等ノ白繭ヲ用ヒ、掃立蠶種ノ約七割ハ長野、山梨等ヨリ來リタルカ、近ク數年以來ハ移入蠶種約三割ニ減シ一般ニ地方種ヲ用フル傾向ヲ示セリ。

▲桑園、明治五年本郡ノ原川治兵衛益田郁太郎等ハ、埼玉縣ヨリ始メテ小牧苗ヲ購入シ各二三反步ツ、ノ試植ヲナス、當時之ヲ改良桑ト稱シテ一般ニ植付タリ、然ルニ栽培法宜シキヲ得サルト養蠶法ノ幼稚ナルトニ因リ、多クハ失敗ニ歸シタルヲ以テ一旦植付ケタル桑樹モ掘リ拔クノ止ムナキニ至レリ、後同十五年頃ヨリ養蠶業ノ漸次發達スルニ伴ヒ再ヒ各地ニ栽植セラレ、殊ニ蠶絲業組合ノ設立ト同時ニ種類ノ撰擇桑園ノ改良等ヲ組合事業トシテ奨勵シ近來ハ多ク遠高、十文字、市平、青軸等ノ種類ヲ植付クルニ至リタレハ埼玉縣ヨリ小部分ヲ移入スルニ止マレリ。

▲傳習、組合施設トシテ養蠶傳習所ヲ開設シタルモノ左ノ如シ。

年次	開設町村	年次	開設町村	年次	開設町村	年次	開設町村
明治二〇年	六合川	明治二十四年	相葉梨川	明治二八年	大富	明治三三年	郡内二ヶ村
二二	小川	二七	相川	二九	合		

尙層繭整理傳習所ヲ設置シタル狀況左ノ如シ。

年次	箇所數	教	師	傳習生數	年次	箇所數	教	師	傳習生數
明治四〇年	一	細梅いさ	?	?	明治四二年	五	石黒まゑ		一七八
四一	三	野村せつ		一〇八	四三	六	横尾かつ		一五〇

▲講習講話、 明治三十三年郡下二ヶ所ニ蠶業講習會ヲ開キ、後今日迄毎年講習會若ハ講話會ヲ開催シツ、アリ。

▲製絲、 明治二十五年頃靜濱村ノ横山卯一郎ハ始テ三十人繰ノ器械製絲場ヲ設ケシモ數年ナラスシテ失敗ニ終リタルヲ以テ、有志者胥謀リテ該器械ヲ買受ケ大富製絲所ヲ設置シテ五十人繰ニ擴張シ、繼續シタリシカ是レ又數年ナラスシテ失敗ニ歸シ、又同三十三年大洲村大石六右衛門ノ所有ニ移リ自村ニ於テ經營シタルニ同三十六年遂ニ該工場ハ閉鎖スルニ至レリ、且ツ明治二十六年ニ相川村河村製絲場六合村ニ塚本製絲場等設置セラレタリシカ、現今繼續セルモノハ塚本製絲場ノミトナレリ、又座繰製絲ハ同二十八年頃ヨリ數年間大富村増田銀次郎ノ經營ニ係ルモノアリシニ過キササルナリ。

榛 原 郡

▲蠶業發達ノ由來、 本郡ノ蠶業ハ舊記ノ因ルヘキモノナシト雖、古老ノ言ニ依レハ金谷町五和村地方ハ元治元年頃ヨリ養蠶行ハレタルカ如シ、然レトモ素ヨリ微々タルモノニシテ全ク自家衣料ノ一端ニ供シタルニ過キサリシカ、明治五年ニ至リ金谷町ニ於テハ、甲州郡内ヨリ養蠶教師内田海六内田吉六ヲ永井文平方ニ招キテ飼育法ノ指導ヲ受ケシニ依リ、同地方斯業ヲ營ム者漸次増加スルニ至レリ、是ヨリ先キ同三年ニハ大井川洪水ノ爲堤防決潰シテ吉田村ノ良田六十餘町歩荒蕪地トナリシカハ、同村飯塚孫次郎ハ之カ開拓ノ方法ヲ案シ、上州佐位郡ヨリ桑苗二十萬本購求シ、先ツ自己ノ荒蕪地二十餘町歩ニ桑樹ヲ植付ケ、更ニ同被害者ニ對シ試作セシメテ蠶業ノ獎勵ニ努メタリ、同九年再度ノ洪水ニテ又々破堤シテ被害田地少ナカラサリシニ依リ、是カ善後策トシテ同村半田平七ハ本縣ヘ出願シ、桑苗三萬本ノ下附ヲ受ケ之ヲ被害者ニ配付シテ桑園ノ開拓ニ努メヌ、蓋現今同村蠶業ノ發展ハ兩人ノ力與ツテ大ナルモノト謂フヘシ、尙本郡上川根村殿岡幸八ハ明治以前ヨリ蠶業ニ從事シ、十一年頃同家幸治郎大村文一郎等ト謀リ、桑苗ヲ購入シテ桑樹栽培ヲ奨励ス、越エテ同二十六年蠶絲業組合ノ設立以來、巡回教師ヲ置キテ實地ノ指導又ハ各町村ニ講習講話會ヲ開キテ、漸次時代ノ進運ニ伴フ改良ノ途ヲ講シタル結果、現今益々發達ノ域ニ進ミツ、アリ。

▲蠶種、 從來蠶種ハ福島、宮城、長野、山梨、群馬等ヨリ購入セシモ、近來ハ多ク郡内又ハ安倍、濱名

兩郡ノ製造ニ係ルモノヲ需用スルニ至レリ。

▲桑園、現今各町村ニ栽培スルモノハ、十文字、山中高助、多胡早生、小牧、魯桑、國富、市平、赤木、空桑等ニシテ桑園約百十餘町ヲ有ス。

▲傳習、明治二十九年以降ノ梗概左ノ如シ。

年次	開設町村	教	師	傳習生數
明治二十九年	初倉	久森柴郎	一六名	
四二	上川根	北川俊次	一〇名	
四二	金谷原	北川房次	一〇名	
四二	古旗安平	澤甚太郎	二五名	
四二	金谷原	古旗安平	二五名	
四二	瀧澤春吉	瀧澤春吉	一六名	

▲講習講話、明治二十九年以降三十、四十、四十一年ヲ除ク外各年ニ於ケル開設狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講	師	聽講者數
明治二十九年	白六ヶ所	久森柴郎	三五名	
三二	榛原郡役所	石波繁胤	一五名	
三二	川崎	阿部保太郎	四五名	
三七	外地頭ヶ所	阿部保太郎	四五名	
三七	金谷町	小泉梯藏	二三名	
三八	吉田	太田兵太郎	二二名	
四二	地頭方	金子保	三五名	
四二	川崎	阿部保太郎	四五名	
四二	外地頭ヶ所	阿部保太郎	四五名	
四二	同	伊部ツウ	二三名	
四二	同上	同	二三名	
四二	地頭方	阿部保太郎	二三名	

▲製絲、明治四年吉田村飯塚孫次郎ハ上州富岡製絲器械ヲ見習ヒ、人力運轉ニ因ル木製六人繰製絲場ヲ創設ス、是レ本縣製絲場ノ濫觴ナリトス、同五年五和村増田忠五郎ハ簡便ナル座繰製絲器械ヲ考案シタレハ専ラ之ヲ使用シタルコトアリシカ、後川崎町ニ若杉金谷町ニ伊藤ノ各製絲場設立セラレタリ。

小笠原郡

▲蠶業發達ノ由來、近ク明治年代ニ於ケル斯業發達ノ徑路ヲ尋ヌルニ、同二十年頃迄ハ未タ幼稚ノ域ヲ免レス、只僅ニ野生桑ニ依テ自家用飼育ヲ試ミタルニ過キサリシカハ、飼育法ノ如キモ甚タ不完全ニシテ、深サ二三寸ノ木箱ニ蠶兒ヲ容レ自然ノ溫度ニ放任セシモノナリシ、後我邦蠶業進步ノ狀勢ニ伴ヒ、同二十五六十年頃ニ至リ有志者ニ依テ斯業ノ有利ナルヲ唱導セラレ、福島、長野、埼玉等ノ先進地ヨリ教師ヲ聘シテ傳習所ヲ設置シ、若ハ練習生ヲ同地方ニ派シテ、専ラ蠶業思想ヲ鼓吹スルト共ニ斯業開發ニ努メタル結果、漸次各地ニ普及シ昔日ノ面目ヲ一新スルニ至レリ、然レトモ尙未タ研究ノ時代ニ屬シ之カ改善ヲ要スルモノ多々アルカ故ニ、郡ニ於テハ毎年蠶絲業組合ニ補助ヲ與ヘ蠶業講習會、桑園爾品評會等ヲ開設シ、

更ニ最近ノ事業トシテ組合ハ蠶種貯藏庫建設及蠶室品評會ヲ施設シ、熱心ニ斯業ノ發達進歩ヲ促シツ、アリ、由來本郡ハ茶業盛ニシテ動モスレハ蠶業ト兩立スルノ難キ事情ヲ有スルト雖、農業知識ノ進歩ニ伴ヒ、地味氣候ノ適否ヲ比較考案シテ各自經濟上有利ノ方向ニ進ムニ至リタルヲ以テ、部落ニ因リテハ一張一弛アルヲ免レサルモ郡下全般ヨリ見ルトキハ、逐年養蠶業者ノ増加ト共ニ多々益々桑園ノ開拓セララルコト疑ナシ。

▲蠶種、明治初年ヨリ十八九年迄ハ多クハ青白種ナリシモ二十年頃漸ク白繭種行ハレ、次テ二十八年東山口村養蠶傳習所ニ於テ白鶴、白玉種ノ飼育、製種ヲ爲シタリ、延テ三十二年ノ頃本縣ヨリ補助ヲ與ヘテ、白玉、又昔、青熟、中巢、小石瓦等ノ蠶種製造ヲ奨励セシヲ以テ郡下ノ製造並飼育ハ殆ト前記ノ數種トナリシカ、現今春蠶ニ在リテハ又昔、白玉、最モ多ク、青熟小石丸之ニ亞キ、秋蠶ニ在リテハ中巢、種ケ島最モ多ク大和錦、青熟之ニ亞ケリ、從來多ク長野地方ヨリ購入シタルカ、現今ハ春蠶種ノ約一割ト秋蠶種ノ約七割ヲ愛知、埼玉、山梨、東京、熊本、神奈川、富山、岐阜、宮城、三重、群馬、山形ノ諸縣及磐田郡ヨリ購入シ、從テ種類モ亦漸次雜駁ニ傾キツ、アリ。

▲桑園、明治十八九年ヨリ同三十年ニ亘リ、本縣磐田、濱名及三河、埼玉地方ヨリ遠高、十文字、山中高助、柳田等ノ改良種ヲ移入セシモ、現今ハ十文字最モ多數ヲ占メ遠高、魯桑之ニ亞ク、栽培法ハ概ネ根刈仕立ニシテ從來ニ比スレハ密植ニ傾キツ、アリ、今種類ヲ大別スレハ、早生種ハ多胡、市平、赤木、遠高、中生種ハ八ッ房、鶴田、柳田、小牧、四方咲、魯桑、青市、晚生種ニ在リテハ大部分十文字ナリトス。

▲傳習、從來傳習所ヲ開設セシモノ左表ノ如クナルカ、現今尙引續ケルハ、東山口村鈴木正一ノ設置ニ係ル私立東山口村養蠶傳習所アルノミ矣。

年次	開設町村	教師	傳習生數
明治二〇年	干濱	小野田 邦太郎	一名
自二八 至現今	東山口	笠原國三 中山高樹 波邊米三 伊達佐太郎 小柳津平四郎 赤木正一 鈴木木一	每年一〇五以下
明治三〇年	大須賀	白井保三 某	五名
自三一 至三五	河城	笠原國三	三名
自三二 至三五	西郷	杉崎光太郎	?

▲講習講話、明治三十三年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講師	聽講者數
明治三三年	東山	鈴木正一	二五名
三五	中内	林技手	?
四〇	下田	田川兵三郎	一〇二
自二九 至四三	大池	鈴木正一	?
自三九 至四三	東山	高木由六	六〇
自四三 至四三	倉口	清水重保	四五
自四三 至四三	千濱	清水重	?
明治四一年	佐東	清水徳重	六〇名
自四一 至四一	原谷	阿部保太郎	?
自四一 至四一	岩滑	田川兵三郎	?
自四一 至四一	曾我	久保田 喜代太郎	?
自四一 至四一	千濱	太田兵太郎	五〇
自四一 至四一	河城	阿部保太郎	?

四二					四五				
大	三	土	佐	倉	池	高	岩	針	清
川	島	松	谷	東	川	島	松	谷	東
清	三	由	爲	正	清	三	由	爲	正
郎	郎	松	治	一	郎	郎	松	治	一
重	重	重	重	重	重	重	重	重	重
八	五	三	三	四	八	五	三	三	四
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四三					四五				
大	西	平	新	雨	池	山	田	野	櫻
山	口	田	野	櫻	山	口	田	野	櫻
池	口	田	野	櫻	池	口	田	野	櫻
山	内	鈴	鈴	高	山	内	鈴	鈴	高
田	田	木	木	林	田	田	木	木	林
誠	新	國	國	由	誠	新	國	國	由
一	次	太	太	松	一	次	太	太	松
重	郎	郎	郎	名	重	郎	郎	郎	名
重	重	重	重	吉	重	重	重	重	吉
二	二	五	?	?	二	二	五	?	?
五	六	〇	?	?	五	六	〇	?	?

▲製絲、明治十四五年頃岡田良一郎ハ掛川町ニ於テ三四十名ノ生徒ヲ收容シ、山梨縣ヨリ繭ヲ買入レ器械製絲ヲ創メタルコトアリシモ、該地方繭ヲ生産セザリシ爲テ遂ニ失敗ニ歸シ、又次テ同二十五年頃ヨリ繭産額ハ漸次増加シ來リタルヲ以テ、各所ニ製絲工場ノ設立ヲ見ルニ至リ、現今小笠、平岩、栗田、横須賀水谷、天、富田ノ七工場存立セリ、座繰製絲ハ同十五年ヨリ創始セシモノアリタレトモ、自家用又ハ内地向ノ小經營ニ止マリテ産額モ亦微々タルモノナリシカ、近ク數年來郡補助事業トシテ屑繭整理法、眞綿製造法ノ講習會ヲ開設シタル結果、眞綿製造並營業ヲ爲ス者又ハ自家用トシテモ追々増加ノ狀況ヲ呈セリ。

▲織物、郡下中村ニ一二機業家アリテ平絹類、袴地類、絹男帶地類ヲ産スルモ郡下一般ノ織物ハ甚タ不振ノ状態ニアリ。

周智郡

▲蠶業發達ノ由來、最モ古キハ、郡下奥山村ニシテ數百年以前ニ始マリタルモノ、如ク、他ハ何レモ五十年前後ナルヘシ、而シテ明治七八年頃ニハ飼育者一村僅々數戸ニ過キスシテ、飼育法ノ幼稚ナルト蠶種ノ不良ナルトニ依リ連年失敗ニ歸シ、桑園ハ爲ニ茶園若ハ麥圃ト化シ一時衰頽ニ陥リシモ、時勢ノ進運ニ伴ヒ漸次蠶業ニ志ス者増加シ追々挽回ノ期ニ向ヒ、二十年頃ヨリ進歩シ來リ三十年頃ニハ著シク發達セリ、然ルニ爾來蠶病ノ蔓延ニ遭ヒ年々不尠失敗者ヲ出シ、三十八年ノ如キハ最モ甚シク遂ニ一般當業者ヲシテ悲觀ヒシメタルカ、後完全ナル消毒法ノ普及ニ依リテ漸次効果ヲ奏シ遂ニ現今ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ、飼育法ハ古來ヨリ天然育ナリシモ、明治二十年頃ヨリ火力ヲ用フル飼育法行ハレ大ニ改良ノ途ニ向ヘリ、次ニ蠶業獎勵上去ル四十年頃ヨリ施行シ來リタル事項ヲ舉クレハ、蠶種共同催青並稚蠶共同飼育、蠶室蠶具ノ共同消毒、夏秋蠶飼育、桑園ノ改良、勸業委員ノ設置、品評會開設等ニシテ効果ノ多大ナルモノアリ。

▲蠶種、種類ハ從來春蠶ニ在リテハ中巢、小石丸、又昔、青熟、夏秋蠶ニ在リテハ大和錦、中巢、白龍、銀白等ニシテ、多クハ本縣及長野縣等ヨリ移入シ他ハ本郡ニ於テ供給シツ、アリ。

▲桑園、明治十五年以前ハ桑園トシテ見ルヘキモノ無ク畦畔又ハ山野ニ桑樹ノ散在セシニ過キサリシカ二十年頃ヨリ漸次桑園ヲ開設スルニ至レリ、種類ハ遠高、青木、赤木、四方咲、九紋龍、市平、魯桑、十文字等概シテ根刈仕立ニシテ現今密植桑園又ハ夏秋蠶専用桑園ヲ作ル者アルニ至リ、該種苗ハ主トシテ濱名郡ヨリ購入シツ、アリ。

▲傳習、明治三十二年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	教	師	傳習生數	年次	開設町村	教	師	傳習生數
明治二二年	久 奥	山 田	中時太郎	二〇名	明治三九年	久 奥	山 田	曾布川誠一	一二名
三二	久 努	西	?	?	四〇	同	鈴木七郎	?	一四
三八	同	正田石松	二〇	四三	久 努	西	大石重作	?	一八

▲講習講話、郡蠶絲業組合施設事業トシテ數年前以來本縣ヨリ講師ノ派遣ヲ請ヒ、郡下各町村ニ於テ三日乃至七日間講習講話ヲ開催シ、尙教師ヲ置キテ各町村ヲ巡回セシメタリ。

▲製絲、古來製絲場ハ手繰ナリシモ、明治十五年頃ヨリ座繰器械ヲ用ヒテ繰絲シ、二十年頃ヨリ足踏器械ヲ使用シ、更ニ小規模ノ器械製絲ヲ設クルニ至レリ、爾來養蠶ノ増加ニ伴ヒ追々工場モ規模ヲ大ニシ、目下十人繰以上五十人繰未滿ノモノ三ヶ所五十人繰以上百人繰未滿ノモノ二ヶ所ヲ算スルニ至レリ。

▲織物、本郡奥山村水窪ニ於テハ萬延庚申年中絹ヲ織リ、東海道及京都方面へ販出シ當時水窪絹ノ名聲ヲ博セシカ、文久元年頃ヨリ遂ニ廢絶スルニ至レリ、因ニ水窪絹製造時代ハ俗ニ地機ト稱スル古代ノ機具ル用ヒタリト云フ。

磐田郡

▲蠶業發達ノ由來、郡下廣瀨村地方ハ今ヲ去ル百年以前ヨリ僅ニ天然育ヲ行ヒ來リシカ、明治八年頃ニ至リ釣り棚ヲ設ケ温度ヲ用フルモノアルニ至レリ、同十九年四月豊田、山名、磐田、周智、佐野、城東六

郡蠶絲業組合設立セラレ、濱名郡中瀬村ニ於テ養蠶傳習所開設セラル、ニ當リ、廣瀨、野部、袖浦等ノ諸村ヨリ傳習ヲ受クル者アリテ飼育改良ノ端緒ヲ開キヌ、同二十年四月豊田、磐田、山名郡蠶絲業組合ヲ設ケ、後二十一年豊田、磐田郡蠶絲業組合トナル、越エテ二十六年本縣令第二十二號蠶絲業取締規則ニ據リ更ニ豊田、山名、磐田郡蠶絲業組合設立セラレタリ、野部村山内市太郎ハ率先飼育ヲ唱導シ、笠西村戸倉惣兵衛ハ甲洲地方ヨリ櫛飼ヲ學ヒ、三十二年頃ヨリ放任育ト稱ヘ又中泉町正田石松ハ奥州地方ヨリ全芽育ヲ研究シ來リ共ニ普及ヲ圖レリ。

蠶絲業組合ニ於テハ傳習又ハ講習講話等ヲ爲シ、更ニ三十四五兩年度ニ至リ郡費ノ補助ヲ得テ、殺蛹器百六十四個ヲ調製シ各町村小組合ニ配付セシメ、或ハ四十、四十一ノ兩年ニ蠶蛆驅除豫防勵行ノ爲、郡費ヲ補助シ組合ニ取締人十二名ヲ置キテ郡内ノ巡回ニ當ラシメ、尙四十二三ノ兩年度ニハ蠶絲業組合ニ郡費ヲ補助シ、専務蠶業技手ヲシテ指導セシメタリ、次ニ明治二十一年以來養蠶獎勵ノ爲品評會ヲ開催シタルモノ左ノ如シ。

年次	開設町村	出品數	主催者	年次	開設町村	出品數	主催者
明治二一年	久 奥	?	久 奥	明治二六年	見 付 町	一三五	中遠農會
二三	見 付 町	一二九	豊田磐田郡蠶絲業組合	三三	同	八四	磐田郡蠶絲業組合
二五	同	三四二	同	三九	同	三八二	同

▲蠶種、明治初年ノ頃ハ専ラ青白種ノミナリシモ、漸次小石丸、又昔、青熟、白玉等飼育セラレ、三十

七八年頃ヨリ四十年頃ハ改良小石丸最モ多ク、之ニ次クハ白玉青熱ナリシカ四十一年以降ハ青熱第一位ヲ占メ白玉種次位ニ在リ、從來蠶種ハ長野縣地方ヨリ悉ク移入シタルモノナリシモ、明治三十五年頃ヨリ約三割ハ郡内産出ノモノヲ用ヒ、他ノ七割以上ハ長野、愛知、群馬、山梨等ヨリ供給ヲ仰クニ至レリ、サレ共蠶種製造ノ進歩ニ伴ヒ現今ハ却テ八割以上郡製造ノ蠶種ヲ飼育シ、北部ニ在テ僅ニ他縣ヨリ購入スルノミニシテ近年愛知、徳島、群馬、栃木、千葉、神奈川、埼玉、福島縣等へ移出スルモノ多キニ至レリ。

▲桑園、桑樹ハ初メ畑ノ畦畔若ハ宅地ノ一部ニ栽植セラレ、耕耘ヲ施ス者ナク殆ト野生ニ異ナラスシテ、種類ハ遠高、三枝ナリシカ、明治十二年頃信州ヨリ小牧ヲ十八年頃奥州ヨリ市平、十文字、鶴田等ヲ購入シ漸次改良ノ域ニ向フ、現今ニ至リテハ十文字、市平、遠高等ヲ多ク栽培シ、廣瀬、井通、富岡ノ各村ハ盛ニ採苗ヲ行ヒテ他府縣ニ移出シツ、アリ、栽培法ハ從來一般粗植ナリシカ、近年速成ヲ望ム結果著シク密植ヲ爲スニ至レリ、同二十九年蠶絲業組合ハ模範桑園獎勵規程ヲ設ケ獎勵金ヲ交附シテ桑園改良ニ努メタリ。

▲傳習、明治二十八年ヨリ三十二年ニ至ル五ケ年間、蠶絲業組合事業トシテ教師桑島留吉、助手鈴木喜平ヲ備入レ、見付、井通、下阿多古、野部、笠西等ノ町村ニ於テ養蠶傳習所ヲ開設シ、三十三年笠西村戸倉惣兵衛園開園養蠶傳習所ヲ開キ、生徒三十四名ヲ養成シ、三十六年蠶絲業組合ハ中谷米吉阿部保太郎鈴木三郎ニ囑託シ蠶病消毒法傳習ヲ各町村ニ開キタリ。

▲講習講話、明治三十五年以降四十二年迄三十九年ヲ除ク外各年開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講	師	聽講者數
明治三十五年	袖淺	川島清三	吉郎	四七名
	上野	龍部	同	二九
	天龍	井龍	同	二八
	今井	笠井	同	四七
	向笠	同	同	二五
	長野	同	同	三一
	浦川	同	同	二八
	於保	同	同	二四
	見付	同	同	二四
	各町	同	同	二四
明治三十七年	廣瀬	横山	賢	二〇名
	笠西	阿部	保太郎	二二
	十東	岩田	助	三三
	各町	石川	清三	?
	各町	山崎	清三	?
	各町	川島	清三	?
	野部	川島	清三	?
	見付	太田	兵太郎	五七
	廣瀬	江塚	勝馬	三五
	袖廣	飯島	善太郎	?

▲製絲、明治十年頃迄ハ繭産額尠ナク一般手引絲トシテ自家使用ニ供シタルニ過キサリシモ、後收購高稍増加スルニ從ヒ岐阜、京都地方ニ移出ヲ試ミ、更ニ進ミテ座繰製絲ノ行ハル、ニ及ヒテハ養蠶業益々開ケ、二十九年下阿多古及廣瀬村ニ器械製絲場ノ設ケラレシヲ始メトシテ、爾來數ヶ所ニ之カ設置ヲ見ルニ至レリ、延テ同三十七八年郡蠶絲業組合ニ郡費ヲ補助シテ、幸浦、富岡、向笠村等ニ座繰講習會ヲ開設セシメ、三十七年ヨリ四十一年迄中遠蠶業獎勵會ニ同シク郡費ヲ補助シテ、毎年二三ヶ町村ニ於テ眞綿講習

會ヲ開カシメ、四十二年ヨリ引繼キ蠶絲業組合ニテ該講習會ヲ開キ屑物整理ノ獎勵ヲナシツ、アリ。

濱 名 郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡蠶業ノ起原ハ年代ヲ詳ニセスト雖、郡ノ北部舊國領中瀬、龍池、豊西地方ト稱スル地方ニ於テ、永祿年間僅ニ畦畔又ハ原野ニ自生スル桑葉ヲ以テ蠶兒ヲ飼育シ、自家衣服ノ料ニ供用シ來リタルモノノ如クナレハ、此地方ヲ養蠶ノ本場ト言ヒ傳ヘタリ、元治、慶應ノ頃ニ至リテハ稍裁桑ノ業モ行ハレテ、自家用的養蠶ハ郡内各地ニ普及セシカ如クナルモ其業遅々トシテ振ハサリキ、維新後國勢一變シ海外貿易ノ進歩ニ伴ヒ本郡生絲及絹布ノ輸出ヲ爲スニ至リタレハ、明治十七八年頃ヨリ俄然勃興シ、農家經濟上重要ナル副業ト認ムル迄ニ發達シタルヲ以テ今日ノ隆盛ヲ見ルニ至レリ、飼育ハ初メ清涼育又ハ天然育ト稱シテ自然ニ放任スル極メテ粗雜ナル方法ニ依リタレハ、只管豊凶ヲ天運ニ任セタル程ナリシカ、斯業ノ發達進歩ハ永ク此狀態ヲ固執セシメス、掃立飼育ノ増加ト共ニ同十八年頃ヨリ温暖育ト名ツクル火力ヲ用ヒテ溫度ノ調節ヲ計ル法行ハレタレハ、舊來天井ヨリ太繩ヲ下ケ吊棚ヲ組ミタルモノヲ始メトシ、一般蠶具ハ勿論蠶室ノ如キモ構造大ニ改マリテ、漸次現今ノ狀態ニ進ミシナリ、是ヨリ先キ明治十年知波田村岡部竹次郎ハ逐年蠶業ノ發展ヲ見ルニモ拘ラス、飼育法ノ不完全ナルヲ遺憾トシ上武、甲信ノ地ヲ歴訪シ上州島村田島彌平ノ清涼育、同富岡町佐藤國太郎ノ清温育等ニ就キ實地研究ヲ積ミ、十五年歸郷シテ當業者ヲ誘掖指導シ白須賀町山本庄次郎又之ト相前後シテ飼育方法及蠶具ノ改良等斯業ノ改善ヲ施シタリ、其他本

郡蠶業ハ明治十九年濱名郡蠶絲業組合ヲ組織セシヨリ以來着々此カ改善ニ努メ、三十年二月組合主催濱名郡顯微鏡使用傳習及蠶体生理病理ノ講習會ヲ濱松町ニ開會シテ蠶業上學理ノ必要ヲ促シ、更ニ郡蠶業教育ノ普及ヲ計ル爲山本庄次郎、三輪新五郎、岡部竹次郎、古山六郎、袴田善五郎等率先シ同年十二月芳川村ニ濱名郡立蠶業學校ヲ創設シ爾來校舍ノ築増ニ組織ノ完全ニ力ヲ致シ同三十四年甲種程度實業學校トシテ認可ヲ得タレハ開校當時ヨリ四十三年ニ至ル卒業生ハ實ニ四百四十五人ノ多キニ及ヒテ何レモ斯業ニ貢獻シツ、アリ、尙郡蠶絲業組合ニ對シテ事業獎勵ノ爲明治四十年ハ三百五十圓、四十一年ハ三百圓、四十二年ニハ四百圓ノ補助ヲ與ヘシカハ、組合ニ於テハ三十九年消毒器ヲ購入シタルモノニ對シ補助セシニヨリ購入數二十個ニ達シ、又四十年蠶蛆驅除ノ爲殺蛹乾繭器ヲ設置シタルモノニ就キ補助ヲ爲シタルヲ以テ百六十一個ヲ備付ケタルカ、翌四十一年同様ノ補助ヲ與ヘテ更ニ百六十四個ヲ増置シ、延テ翌四十二年ニハ繭生絲及眞綿ノ共進會ヲ開會セリ。

▲蠶種、本郡内舊國領ニテハ五六十年以前ヨリ地種ト稱シ自家用トシテ製種シ來リシカ、明治二三年頃蠶種ノ海外輸出ト共ニ製種家遽ニ増加シ、就中龍池村柴山佐吉、松島權一郎、伊藤友五郎、中瀬村木下源平等ハ其重ナル者ナリシモ、數年ナラスシテ輸出ノ杜絶ニ遭ヒ、一時其跡ヲ留メサルニ至レリ、而シテ同八年白須賀町ノ木下兼藏四化蠶種ノ製造ヲ始メテヨリ以來、此種ノ製造頓ニ發達シ、二十四五年頃ニハ販路ヲ關東地方ニ廣メ、本邦多化性蠶種ノ名聲大ニ揚リタルモ越エテ三十三年頃ヨリハ、風穴蠶種ヲ飼育スル者増加シタルヲ以テ現今衰頹ニ傾ケリ、反之春蠶種ハ長野縣ヨリ産スル大又、赤熟等大形ノモノナリシ

カ、色澤青味ヲ帶フルヲ好ミ僅々ニシテ純白ナル小形ノ種類ヲ撰フニ至レリ、サレト飼育上ノ難易若ハ繭ノ形狀等、各好ム所ヲ異ニシタル結果種類甚タ雜駁トナリシカ、三十四五年頃ニ至リ製絲事業ノ進歩ニ伴ヒ、青熟、中巢ト稱スル中形ヲ好シトシ山梨縣ヨリ移入スルモノ多カリシ、斯ノ如ク逐次變遷スル間ニ於テ當業者ノ得ル經驗ハ、氣候若ハ他ノ關係上他府縣產ノ蠶種ヨリ寧ロ該地方蠶種ノ優レルモノアリトナシ、多クハ自家製造ノ蠶種ヲ飼育スル傾キヲ生シタリ、茲ニ於テ本郡蠶業學校ノ成績モ當業者ノ經驗ト一致シタル結果、地方蠶種ノ需用益々多キヲ加ヘテ現今ハ他府縣蠶種ヲ飼育スル者甚タ稀ナルニ及ヒテ、本郡蠶種製造事業ハ輓近著シク發達シ、且ツ需用先ノ狀況ニ鑑ミ主トシテ中巢、又昔等絲質ノ良好ナルモノヲ選ムニ至レリ。

▲桑園、桑樹ハ古來地桑ト稱シ葉形小ナル荆桑アリテ田圃ノ畦畔ニ存セシモ、明治七八年頃信州上田ノ製種家櫻井某ニ依リテ小牧苗ヲ移入セシヲ始メトシ、同十三年頃ヨリ十七年頃ニ至リ福島縣ヨリ島ノ内、青木、市平等ヲ移植シテ繁殖ヲ謀リシカ、小牧ハ種類善良ナラサルノ故ヲ以テ殆ト廢絶シ、他ハ何レモ現今主要ノモノトシテ栽培セリ、同十七八年頃上武地方ヨリ十文字ヲ移植シ栽培ヲ試ミタルニ能ク地味ニ適シ且ツ當時最モ恐レタル萎縮病ノ患少ナカリシヲ以テ漸次増加シ今ヤ郡内全桑園ノ六割余ヲ占ムルニ至レリ、尙早生ナル在來種遠高ト稱スルモノ繁殖シ十文字ニ次テ重用セララルレトモ、元來品質佳良ナラス、尙十文字ハ晩生ニ失シ品質勝レルモ收穫多カラサレハ、現今ノ狀態ニテハ適當ノ良種ヲ得ル能ハサルヲ遺憾ト爲シツ、アリ。

▲傳習、養蠶ニ關スル舊時ノ思想ハ甚タ幼稚ニシテ一定ノ方法ナカリシカ、明治四年知波田村字大知波ノ岡部重五郎ハ、武州八王子町ヨリ養蠶製絲、絹織物ニ熟達セル男女八名ヲ備ヒテ、同地ニ養蠶傳習場ヲ開キ同八年信州飯田町ヨリ伊藤六平外女子數名ヲ備ヒテ、同村字利木、大田及入出、新所兩村ノ有志者ヲ巡回教授セシメ以テ飼育ノ一端ヲ知ラシメタリ、同十七年神久呂村志都呂稻垣信吉ハ自ラ西遠養蠶傳習所ヲ開設シ、知波田村岡部竹次郎ヲ教師トシテ雄踏、入野、篠原、新津諸村ノ生徒ヲ傳習セシメ、同時ニ天王村天王新田ニ養蠶精蠶社ト稱スル傳習所ヲ設置シ、新所村伊藤精一教師トナリ清涼、溫暖ノ折衷育傳習ヲ爲セシカ此頃ヨリ舊長上郡地方ニ於テ新ニ溫度育ナルモノ起リテ、二十年ニハ蒲村伊藤豐太郎、同村河合七郎次、飯田村桂村治等率先シ自家ニ私立傳習所ヲ設ケテ何レモ數十人ノ傳習生ヲ出シ、同十八年舊豊田郡上善池村^{現龍池村}ニ静岡縣公設養蠶傳習所ヲ設ケ縣御用掛土屋眞擔當ス、同二十六年ヨリ二十八年迄三ヶ年間中瀬村堀井爲吉ナル者率先シテ、群馬縣高山社ヨリ飯島權次郎、松井孫一及埼玉縣競進社ヨリ横堀、川邊二人ヲ聘シ、村内二十戸乃至三十戸ノ團體ヲ作りテ巡回教授ヲ爲サシメ修業生二百名ヲ出シ、三十年ニ至リ濱松ニ濱名郡顯微鏡使用法研究会ヲ開會シ、講師東京蠶業講習所技師河原次郎擔任終了生徒四十餘名ヲ出セリ、以上ハ是レ傳習教授ノ重ナルモノニシテ當時蠶業思想ノ旺盛ナリシニ加ヘテ、本郡蠶業學校ノ設立セラレタルハ指導獎勵上負フ所淺カラス、因テ以テ今日ノ發展ヲ見ルニ至レル也、繼テ明治十年知波田村岡部重五郎ハ同志ト謀リ湖西養蠶共談會ヲ組織シ、毎月一回集會シテ斯業ノ研究ヲ爲シ資金ヲ蓄積シテ相互ノ融通ニ便セシカ、重ナル者ハ社長新所村菅沼八郎副社長入出村山本音藏世話役知波田村岡部

重五郎、石田平吉新所村神田與七等ニシテ、十四年頃ニ至リ益々擴張シ、白須賀町山本庄次郎新所村伊藤精一知波田村岡部竹次郎發起トナリテ、湖西一圓ノ養蠶製絲ノ集談會ト改メ、十五年ニハ白脇村揚子、引馬保藤等ト共ニ、舊敷知郡全部ノ養蠶製絲集談會ト爲シ斯業ニ貢獻スル處アリタリ。

▲講習講話、舊時ニ於ケル講話會ノ主ナルモノハ縣御用掛ノ巡回講話、及埼玉縣競進社派出教師ノ指導等ナリトス、尙最近ニ於ケル講話概況ハ左ノ如シ。

年次	開設町村	講 師	聽講者數	年次	開設町村	講 師	聽講者數
明治 三八年	白須賀町	阿部保太郎	七八名	明治 四三年	龍池	小島道治	八四名
	知波田	高村源次郎	五一		飯田	鈴木勝太郎	一一
	新居	合志源次郎	二四		神久呂	西川新松	九八
	中瀬	金子保	七〇		飯島善太郎	飯島善太郎	一〇八
	新和	鈴木卯之進	三三		熊方	熊方五郎	一〇八
	吉津	同	三三		生方	生方五郎	五三
	和地	金子保	四三		北内	村井才次郎	一〇二
	中瀬	小島道治	三四		新津	鈴木卯之進	一一
	新所	林田重光	四六		中瀬	榎谷鹿藏	二一
	吉津	同	二四		河輪	大澤信輔	四四
淺河	岩浪爲治	六五	芳川	鈴木勝太郎	一一		
場	鈴木卯之進	三三	白脇	中村順三郎	五九		

▲製絲、天明寛政ノ頃ヨリ中瀬村木下久左衛門。平貴村木俣良八等、手繰製絲ヲ營ミ京都西陣地方ニ販出セリ、降テ明治六年知波田村岡部竹次郎ハ武州八王子町青木健ヲ聘シテ座繰器械ノ製造並製絲法ヲ傳習セシメ從來ノ手繰ヲ改良セリ、同九年ニハ平貴村木俣千代八、中瀬村木下源平等十五人繰ノ座繰製絲ヲ創メ、同十五年頃迄ニハ漸ク郡下全般ニ及ヒシカ、當時上繰ハ岐阜又ハ京都ニ賣捌キ、中繰及玉繰ハ織物ヲ製スル外地方市場ニモ販賣シタリ、更ニ白須賀町山本庄次郎ハ玉繰製絲ノ有利ナルヲ唱導シ、同町有志ヲ三州二川町ニ就テ練習セシム、同地玉繰製絲ノ今日在ルハ蓋同人ノ力大ナリトス、器械製絲ハ同十年中瀬村木下茂作五十人繰ノ設立ニ係ルモノヲ始メトシテ、現今ハ工場數二十有餘ノ多キニ達シ、尙益々發達ノ域ニアリ、真綿ハ同三十五年頃中瀬村木下源平近江國ヨリ教師及工女ヲ雇入レ製造ニ着手シタル外、郡蠶絲業組合ノ主催ニテ真綿傳習會ヲ各町村ニ開催シタレハ、修了生現在四百八十八名ノ多キニ至レリ。

▲織物、絹織物ハ主トシテ他府縣產ノモノヲ使用シ、地方產出ニ係ルモノハ明治三十一年頃ヨリ中瀬村、白須賀町、吉津村等ニ於テ少量ノ斜子織、縮緬、羽二重ノ類ヲ產出スルノミ。

引 佐 郡

▲蠶業發達ノ由來、本郡ニ於ケル往古ノ蠶業狀態ヲ想像スルニ、時ノ領主及土豪等自己ノ嗜好ヲ満足セントシテ之ヲ獎勵シタルニ起リ、一方士民ニ於テモ亦各自ノ衣料ヲ得ンカ爲ニ營ミタルニ過キサレモノノ如ク、爾來春風秋月幾多ノ變遷ヲ經テ今日ニ至リシモノ也、維新前ニ在リテハ蠶業ヲ以テ一家生計ノ一

助ト爲スカ如キ者ナク、單ニ蠶兒ヲ箱内ニ匍匐セシメテ全葉ノ儘給桑シ自然ノ氣候ニ放任飼育シタルヲ以テ、豊饒ノ結果ヲ收ムルコト極メテ少ク爲ニ遅々トシテ振ハサリシモ、明治十二三年ニ至リテハ追々飼育者増加シ、同十八年農商務省達第四十一號ノ發布セラル、ヤ敷知、引佐、濱名三郡聯合ニテ蠶絲業組合ノ設立アリ、同年養蠶傳習所ヲ井伊谷村ニ十九年ハ中川村ニ設置シテ、之カ飼育ノ方法ヲ傳習ヒシメタルヲ始メトシ、後續々傳習所、講習、講話等ノ開設アリシニ依リ、飼育法ニ於テハ一段ノ進歩ヲ見ルニ至レリ、次テ桑園ノ必要ヲ觀シカハ原野山林ノ開墾ヲ爲スモノ亦尠ナカラス、飼育ノ特殊ナルモノトシテ郡ノ一部奥山、井伊谷方面ニハ高溫育、奥山、都田、東西濱名ノ一部ニハ條桑育、又ハ奥山ノ一部ニハ全芽育ヲ爲セルモノアリ、蠶種ノ共同貯藏、同催青、同購入、同蠶病消毒等ハ漸次一般ニ普及セラレ、四十三年ニハ郡ニ特設蠶業技手ヲ置キ蠶業ノ講話講習ヲ到ル所ニ開催シ、或ハ繭品評會ヲ開キテ之カ優劣ヲ識別シ又一面ニハ繭質統一ニ努メ、且ツ養蠶期中ハ絶エス巡視シテ専ラ實地指導ニ精勵怠リナキヲ以テ一層ノ進歩ヲ見ルニ至ルヘシ。

▲蠶種、單ニ自家用トシテ飼育スルニ過キサリシ時代ニ在リテハ、青白種ノミ行ハレタルモノ、如ク、營利ノ目的ニ依ルニ至リテハ中巢種行ハレテ、漸次飼育戸數、掃立枚數ヲ増加シ、飼育未タ幼稚ナル明治二十四五年ノ頃春蠶ニ在リテハ大又、中巢、丸志保、良白、小石丸等最モ多キヲ占メ、夏蠶種ハ大草、大巢、熊蠶、近江蠶等行ハレタリ、爾來飼育技術ノ進歩ニ伴ヒ競フテ製絲家ノ嗜好ニ適スル良種ノ選擇ニ努メタル爲、又昔、青熟、白龍、白玉、改良又ノ如キ大巢ヲ飼育スルニ至リ、中ニモ又昔、白龍ハ最モ盛ニ飼育セラル、而シテ夏秋蠶種ハ同三十八年頃迄ハ多ク多化性ヲ飼育シ、翌三十九年都田村松本茂八初メテ二化性人工三化ヲ發見シタルモ之ト相前後シテ風穴種盛トナリタルニ依リ、多化性ノ産額著シク減少シ今將ニ其跡ヲ絶タントセリ、風穴種ノ主ナルハ白龍、又昔、大草、鬼縮、新河内等ニテ群馬、山梨、長野、愛知地方ヨリ購入シ、三十年頃ニハ長野縣ヨリ共同購入サヘ行ハレタリシカ、後他府縣ヨリスル購入ハ減退シ現今ハ反テ各地ニ移出スルノ現象ヲ呈セリ。

▲桑園、從來ハ主トシテ宅地ノ周圍ニ止マリシカ、次第ニ河岸又ハ山間ノ地ニ及ヒ次テ畑地ニ移植シタルモノ、如シ、而シテ桑樹栽培ノ起原ハ詳ナラスト雖モ、中川村内山園三郎ノ庭園ニハ維新前ノ植付ケニ依ルモノ數本殘留シテ今尙繁茂セルアリ、一般ハ地桑ナリシモ明治十七八年頃各所ニ桑園ノ新設ヲ見ルニ至リテ、良種ヲ選擇シ先ツ井上、池田等ノ栽植ヲ試ミ、續テ遠高、十文字、嶋ノ内、四方咲、九紋龍、八ッ房、魯桑等順次増加セリ、然ルニ地勢土質ノ關係上平坦ニシテ肥沃ノ地ハ十文字、八ッ房、魯桑、島ノ内等多ク、山間瘦地ハ四方咲、遠高等ヲ主トシテ栽植セリ、從來苗木ハ愛知、群馬、長野、福島及濱名郡地方ヨリ購入セシモノ多ク現今ニ至ルモ亦同シ、仕立法ハ古來喬木仕立ノ桑樹アリタルニ過キサリシモ、現今概ネ根刈仕立トナレリ、尙郡市町村及郡農會並蠶絲業組合等極力斯業ノ普及策ヲ講シタルト共ニ、明治四十一年ニハ縣ニ於テモ桑園増殖獎勵規程ヲ設ケテ補助ヲ與ヘタルニ依リ、逐年之カ増加ヲ見ツ、アリ。

▲傳習、明治十八年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	教師	傳習生數	年次	開設町村	教師	傳習生數
明治一八年	井谷	岡部竹次郎	二〇名	明治二八年	伊都	菅家租藤治	三一名
一九	中井	藤田和三郎	三〇	三〇	東	同	一六
二〇	中井	鹽原龜吉	一五	三一	鹿	同	一九
二一	井	松田寛吉	三〇	三二	西	同	二四
二二	井	鹽原龜吉	一八	三三	奧	同	二七
二六	氣	篠原精一	三五	三三	鎮	同	二七
	賀	岡部竹次郎	一五	三四	鎮	同	一八
	賀	岡部竹次郎	三五	三三	鎮	同	一八
	賀	岡部竹次郎	一五	三三	鎮	同	一八
	賀	岡部竹次郎	三五	三三	鎮	同	一八
	賀	岡部竹次郎	一五	三三	鎮	同	一八

講習講話、明治二十一年以降開設セル狀況左ノ如シ。

年次	開設町村	講話	師	聽講者數	年次	開設町村	講話	師	聽講者數
明治二一年	氣賀	山田美之作	正忠	?	明治四一年	西濱	金子田兵衛	保	五四名
二二	鹿	毛原正忠	雄正	?	四二	伊濱	高野信一	次郎	六四
二三	中	同	同	?	四三	同	同	同	四九
二四	同	同	同	?	四四	同	同	同	三五
二七	郡下各町村	青木彌七	同	?	四五	同	同	同	四一

年次	開設町村	講話	師	聽講者數	年次	開設町村	講話	師	聽講者數
明治三二年	氣賀	宮原正忠	雄正	?	明治四三	同	同	同	四四
三三	西	同	同	?	四四	同	同	同	三三
三四	郡下	同	同	?	四五	同	同	同	四六
三五	伊	同	同	?	四六	同	同	同	三三
三六	郡下各町村	同	同	?	四七	同	同	同	三三
三七	氣賀	同	同	?	四八	同	同	同	三三
三八	郡下各町村	同	同	?	四九	同	同	同	三三
三九	東	同	同	?	五〇	同	同	同	三三
四〇	氣賀	同	同	?	五一	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五二	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五三	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五四	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五五	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五六	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五七	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五八	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	五九	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六〇	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六一	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六二	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六三	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六四	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六五	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六六	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六七	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六八	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	六九	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七〇	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七一	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七二	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七三	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七四	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七五	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七六	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七七	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七八	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	七九	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八〇	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八一	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八二	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八三	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八四	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八五	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八六	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八七	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八八	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	八九	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九〇	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九一	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九二	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九三	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九四	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九五	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九六	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九七	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九八	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	九九	同	同	同	三三
	賀	同	同	?	一〇〇	同	同	同	三三

▲製絲、明治二十九年氣賀町ニ引佐製絲株式會社、井伊谷村井伊谷製絲株式會社ノ器械製絲場ヲ創立シタル爲、地方ノ蠶業ハ漸次發展ノ機運ニ向ヒタリシカ、三十六年末ニハ何レモ解散スルノ止ムナキニ至リシヨリ、養蠶業ハ尠ナカラサル影響ヲ蒙リ、翌三十七年ハ前年ニ比シ實ニ養蠶家百三十餘戶收繭額百三十餘石ヲ減少セシカ、同年西濱名村ニ石川製絲場興リテ現ニ百釜ヲ有シ盛ニ從業セリ、更ニ遡レハ同二十年中川村後藤角平ハ教師ヲ聘シ自宅ニ座繰製絲ヲ開始セルヲ以テ始メトナシ、前記器械工場ノ各所ニ設置セラル、ニ從ヒ座繰經營者モ追々増加ノ形勢ヲ現出シタレハ、既往ニ於ケル製絲事業ハ此年代ヲ以テ全盛時ト謂フモ可ナラン、然ルニ一朝器械製絲ノ衰微ニ伴ヒ、座繰製絲モ亦益々其數ヲ減スルニ至リ、次テ玉絲製造ハ略同時ニ興リ個人ノ事業トシテ各所ニ點在シタリシカ、現今殆ト跡ヲ絶タントスルノ形勢アルハ、共ニ斯業ノ爲遺憾トスル所ナリ、尙三十三年頃東濱名村鈴木來作ナル者近江ヨリ教師ヲ聘シ氣賀町ニ眞綿製造ヲ開業シタリ、爾來幾多ノ變遷ヲ重ネテ全ク衰頽ニ傾キシヲ、四十三年ニ至リ西濱名村農會ニ於テ該講習會ヲ開催シタル爲、各所ニ自家用製造者ヲ見ルニ至レリ。

第三項 桑園ニ關スル事項

桑園設置獎勵

▲桑苗配付、桑園設置獎勵ノ目的ヲ以テ、明治十一年縣費ヲ支出シテ福島ヨリ桑苗三十六萬本ヲ購入シ、

縣立静岡製絲場經營者ナル友野與左衛門ニ下渡シ、一般要望者ニ無償配付セシメタリ、然ルニ當時養蠶法未熟ノ爲進ミテ栽桑ヲ爲サントスル者尠ナク、遂ニ其過半ヲ枯死セシムルニ至リタリ。

▲栽桑法傳習、越エテ同十六年始メテ富士郡岩松村ニ養蠶傳習所ヲ開設スルニ當リ、教師ヲ福島縣ヨリ聘シテ養蠶並栽桑法ノ傳習ヲ爲サシメ、更ニ市平、赤木、六郎高助、小幡、柳田、鶴田等ノ苗木一萬一千本ヲ栽植シテ試作桑園ヲ設ケ、栽桑法ノ實際的模範ヲ示スト同時ニ採苗ヲモ行ヒ、尙一面ニハ苗木ヲ購入シテ有志者ニ貸與シ、桑園ノ新設並良種繁殖ニ努メタル結果、富士郡岩松村影山秀樹、山崎農夫藏等率先シテ栽植ヲ爲シ各地方漸次之ニ倣フニ至レリ。

▲桑苗交換法、明治十七年種苗交換費ヲ置キ縣費三百圓ヲ支出シテ苗木ヲ購入シ、數年ヲ限リテ之ヲ當業者ニ貸與シ採苗後更ニ返還セシムルノ方法ヲ設ケ同二十一年迄五ケ年間、同一ノ方法ヲ繼續シ專ラ之カ普及ヲ圖レリ、今各年ノ狀況ヲ示セハ左ノ如シ。

明治十八年、種苗交換費三百圓ニシテ其配付數左ノ如シ。

配付サレタル者	種	類	數	量
賀茂那賀郡役所	六郎高助、赤木、柳田、市平			一一、〇〇〇本
駿東郡日守長島善右衛門	市平、柳田、六郎高助			二、〇〇〇
同 沼津城内萬年照明	柳田			一、五〇〇
庵原郡入山望月猶平	柳田、市平			二五、〇〇〇

豊田郡 善池	服部 鹿次郎	柳田、六郎高助	二〇〇
長上郡 高畑	小野 源五郎	柳田、六郎高助	二〇〇
敷知郡 大知波	岡部 竹次郎	市平、十文字	三、〇〇〇
引佐 鹿鹿	玉郡 役所	市平、柳田、六郎高助、筋桑	一、五八五

尙同年全國著名ナル種類ヲ撰拔シテ種苗ヲ各郡ニ交付シ養蠶ノ熱心者又ハ毎戸長役場區域内へ試植セシメタリ其數左ノ如シ。

郡	種	類	數	量	郡	種	類	數	量
賀茂、那賀	山中高助		二〇〇	本	榛原	山中高助		三〇〇	本
君澤、田方	山中高助、柳田		二〇〇		佐野、城東	六郎高助、柳田		三五〇	
駿東	山中高助、六之壺		三〇〇		磐田、山名	六郎高助、山中高助		三〇〇	
富士	山中高助、柳田		三〇〇		周智	市平、山中高助		四〇〇	
庵原	市平、六之壺、小幡		二〇〇		敷知、長上	六郎高助、小幡		四〇〇	
有渡、安倍	六郎高助、六之壺、小幡		一〇〇		濱名	山中高助		二〇〇	
志太、益津	山中高助		三〇〇		引佐、鹿玉			四、一五〇	
計					計				

明治十九年、種苗交換費二百圓ニシテ配付數左ノ如シ。

配付サレタル者	種	類	數	量
周智郡 役所	市平、柳田、六郎高助			一、五〇〇本

田方郡 肥田 小永井治郎兵衛 同 一、〇〇〇

尙引佐郡井伊谷村小野鼎へ左ノ新種類ヲ交付シ試植セシメタリ。

產地	種	類	數	量	產地	種	類	數	量
上野産	赤椿、青木、十文字		七六	本	大日本農會	九紋龍、細江、金子、魯桑		八	
信濃産	小牧、四五八、四ツ目、鼠返		八		計			九二	

明治二十年、種苗交換費二百圓ニシテ各郡へ配付シタルモノ左ノ如シ。

郡	種	類	數	量	郡	種	類	數	量
賀茂、那賀	十文字		二〇〇	本	榛原	十文字、市平		二〇〇	
君澤、田方	同		四〇〇		佐野、城東	同		二〇〇	
駿東	同		五〇〇		周智	十文字		三〇〇	
富士	同		五〇〇		磐田、山名	同		六〇〇	
庵原	同		二〇〇		長上、敷知	同		六〇〇	
有渡、安倍	十文字、市平		一六七		濱名	同		二〇〇	
志太、益津	同		二〇〇		引佐、鹿玉	同		四、二六七	
計					計				

明治二十一年、種苗交換費二百圓ニシテ各郡へ配付シタルモノ左ノ如シ。

郡	種	類	數量	明治十九年		明治二十年	
				苗木植付數	反明	苗木植付數	反明
賀茂、那賀	柳田、赤木	高助	七〇〇	佐野、城東	柳田、六郎高助	六〇〇	
			七〇〇	周、智	山中高助	四〇〇	
駿東	市平、赤木、小幡	六〇〇	七〇〇	豐田、山名	同	三〇〇	
			六〇〇	磐田	市平、六郎高助	四〇〇	
庵原	有渡、安倍	柳田、赤木、九紋龍	七〇〇	引佐、鹿玉		六〇〇	
			二〇〇	計		三〇〇	
志太、益津	六郎高助	六郎高助	二〇〇			六〇〇	
			五〇〇			五、三〇〇	
榛原	柳田、高助、市平、高木		五〇〇			五、三〇〇	

桑園新設反別、獎勵ノ結果各郡ニ新設桑園著シク増加シ、明治十九、二十年ニ於ケル成績ハ左ノ如シ。

郡	反明	明治十九年		明治二十年	
		苗木植付數	反明	苗木植付數	反明
賀茂、那賀	五、一六	一、二、三、七、五〇	一、五、四六	一、六、五、〇〇	
君澤、田方	六、七〇	四、〇〇〇	一、一〇〇	六、五、〇〇	
駿東	二、一七二	一、三〇、二〇〇	三、四、八三	二〇八、八〇〇	
富士	三〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	四〇〇〇	二、四〇、〇〇〇	
庵原	三、一〇	一、七、八〇〇	五〇〇	四、四、八〇〇	
有渡、安倍	九〇	九、〇〇〇	一、七〇	一、七、〇〇〇	
志太、益津	二、九一	二、四、九八〇	九、七九	七、九、四〇五	
榛原	一	一、二、〇〇〇	一、六六	一、八、二五〇	
周智	二、三〇	一、二、〇〇〇	三、〇〇	一、五、〇〇〇	

豊田、山名、磐田	一、二、二	七、三五〇	四、七七	四、五、四四〇
長上、敷知、濱名	六、八六	四、八、〇〇〇	一、一、五七	八、一、〇〇〇
引佐、鹿玉	二、九一	二、四、九八〇	九、七九	七、九、四〇五
計	八、三、七八	六、一、八、〇六〇	一、四、八、五七	一、〇、五、九、一〇〇

桑樹種類調査

明治四十年中各郡ニ亘リ桑樹ノ種類調査ヲ行ヒタルニ、就中最良ト認ムルモノ左ノ如シ。

郡	早生	中生	晩生	生
賀茂	與平、砂川早生、伊勢崎市平、節曲、宮川早生、多胡早生、市平、白早生、山桑、赤芽與平、遠高	高橋、魯桑、伊太利亞、實生、鶴田、六郎高助、島伊太利亞、伊達赤木、小笠原	十文字、山中高助、大葉伊太利亞島ノ内	
田方	市平、白早生、多胡早生、與平、島村、毛蠶早生、奥州市平、木村早生、李桑	六郎高助、魯桑、九紋龍、島柯、群馬赤木、赤木高助、大菊、小牧菊葉	十文字、島ノ内	
駿東	市平、與平、多胡早生、白早生、魯桑實生	青木、九紋龍、御所櫻、魯桑、高助	十文字、山中高助	
富士	市平、與平、多胡早生、白早生、小左衛門與平、信濃芽、宮川早生	鶴田、高助、魯桑、坂東、九紋龍赤木	十文字、島ノ内	
庵原	遠高、市平、與平、多胡早生、富貴桑	魯桑、伊太利亞、大菊葉、青軸、九紋龍、伊達赤木	十文字、細江	

郡市	現在反別	見込反別	現在反別	見込反別	現在反別	見込反別
安倍	多胡早生、市平、遠高、與平、青木	九紋龍、魯桑、小牧、鶴田、赤木、青柳、李桑、柳田、綾錦、國富、青市	十文字			
志太	遠高、市平、柳田、多胡早生	魯桑、赤木、小牧、高助	十文字			
榛原	遠高、市平、多胡早生、白早生、菊葉、李桑	島村、六郎高助、魯桑、九紋龍、伊達赤木、島ノ内、魯桑實生、小牧、赤木、菊葉	十文字、山中高助			
小笠	多胡早生、市平、遠高、李次郎、白早生、大島、李早生	魯桑、小牧、青木、四方咲、鶴田、九紋龍、高助、赤木、菊葉、李桑、島ノ内	十文字、山中高助、鼠返			
周智	遠高、市平、多胡早生、四方咲	魯桑、城下、赤木	十文字			
磐田	大島早生、遠高、多胡早生、李桑	青木市平、魯桑、國富、四方咲、八ッ房、島ノ内、鶴田、三ッ江城下、赤木、九紋龍	十文字			
濱名	大島早生、伊達市平	魯桑	十文字			
引佐	大島早生、青木市平、多胡早生、遠高、大和丸	四方咲、九紋龍、八ッ房	十文字、鼠返			

桑園變換見込調査

明治四十年中桑園増殖ニ關シテ縣下各郡ニ於ケル原野、畑地等ヲ將來桑園ニ變換シ得ヘキ見込反別ノ調査ヲ行ヒタルニ實ニ三萬八百四町步ニ達セリ、之ヲ各郡別ニ表示スレハ左ノ如シ。

郡市	現在反別	見込反別	現在反別	見込反別	現在反別	見込反別
賀茂	35011.0町	3817.7町	18048.6町	1788.6町	2411.2町	47.4町
田方	29107.8町	2242.5町	23993.8町	1936.5町	3059.7町	87.6町
駿東	15951.0町	1829.2町	23595.8町	625.4町	5354.2町	33.0町
富士	21269.7町	773.6町	9298.4町	297.7町	6486.4町	71.8町
庵原	22275.5町	202.8町	698.3町	57.7町	778.3町	4.6町
安倍	7273.7町	184.5町	2103.2町	150.9町	1060.5町	23.9町
志太	3233.0町	419.9町	3000.8町	202.3町	309.0町	3.3町
榛原	3398.9町	445.2町	1309.3町	23.3町	3054.5町	68.8町
小笠	633.8町	141.4町	2759.9町	60.7町	4584.5町	34.5町
周智	2551.4町	65.8町	443.3町	17.0町	2241.8町	20.4町
磐田	1533.7町	636.9町	1569.3町	174.9町	596.6町	86.4町
濱名	3614.2町	712.3町	788.1町	235.3町	733.7町	338.0町
引佐	4344.4町	404.5町	1154.5町	67.5町	198.9町	51.5町
静岡市	4344.4町	404.5町	1154.5町	67.5町	198.9町	51.5町
合計	27266.2町	1424.7町	7567.5町	578.8町	6399.3町	208.7町

尙明治四十三年五月中一般農業及殖林事業等ト抵觸セサル範圍内ニ於テ、所謂不毛ノ地ニ就キ桑園開拓ノ見込反別ヲ調査シタルニ、五千七百二十七町步餘ヲ有セリ、即チ各郡市別ニ表示スレハ左ノ如シ。

郡市	見桑園反開拓	郡市	見桑園反開拓	郡市	見桑園反開拓
賀茂	三五六・七	庵原	九九〇	小笠	二七四・二
田方	三六四・九	安倍	八六・四	周智	一四二・五
駿東	二、六三六・二	志太	四四・六	磐田	二九八・九
富士	四四五・〇	榛原	七三・五	濱名	三六五・五
計		計		計	
					五、七二七・九

桑園増殖獎勵

桑園ノ改良増殖ヲ獎勵スル爲、明治四十年度ヨリ四十二年度迄三ヶ年間、新ニ桑園増殖獎勵費ヲ設ケ、且ツ農商務省令第七號桑園増殖獎勵費交付規則ニ依リ國庫ノ補助ヲ得テ、一反歩以上ノ桑園ヲ新設シタル養蠶者、若ハ縣郡町村農會其他ノ組合團體ニシテ、養蠶者ニ配付スル桑苗養成、又ハ二反歩以上ニ亘ル模範桑園並試験桑園ヲ設クル者ニ對シテ、夫々獎勵金ヲ交付セリ即チ左ノ如シ。

△明治四十年度、獎勵費三千二百七十五圓ニシテ、其ノ内國庫補助千四百八十六圓也、今是ニ依リ桑園ヲ新設セル概況ヲ表示スレハ左ノ如シ。

新設桑園郡市別表

郡市	反	別	獎勵費交付額	郡市	反	別	獎勵費交付額
賀茂		二町	二二五・四	榛原		一町	一三〇・四

田方	三四	小笠	五〇
駿東	四九	周智	一・六
富士	二・一	磐田	五・六
庵原	二・六	濱名	四・六
靜岡	三五	引佐	一・二
安倍	三四	計	四二・九
志太	二六〇		

模範桑園個人別表

反別	住設	所置	氏名	反別	住設	所置	氏名
町	賀茂郡	稻生澤村	白井佐五右衛門	町	庵原郡	興津町	青木安太郎
三	田方郡	三島町	鈴木吉藏	三	小笠郡	掛川町	伊達佐吉
三	駿東郡	御厨町	山崎龜太郎	三	磐田郡	見付町	大澤定吉
三	富士郡	傳法村	笠井傳次郎	三	濱名郡	曳馬村	小倉増太郎
三	安倍郡	大里村	長岡辰吉	三	計		

△明治四十一年度、獎勵費貳千九百八拾圓ニシテ、其内國庫補助金九百七拾圓也、是ニ依リ各郡ノ設置セル桑園狀況左表ノ如シ。

新設桑園郡市別表

郡市	反別	獎勵費交付額	郡市	反別	獎勵費交付額
賀茂	一・二町	一〇四	賀茂	三町	一三六
田方	四・五	一六九	田方	四・九	二六〇
駿東	五・八	一三六	駿東	二〇	一〇四
富原	三・六	九七	富原	九〇	三五七
庵原	二・六	一一〇	庵原	六・一	二六〇
安倍	四・三	一五六	安倍	三〇	一一七
静岡市	四〇	一九五	静岡市	六五〇	二、二〇一
志太	四〇	一九五	計		

桑苗園設置表

郡市	反別	桑苗數	獎勵費交付額	設置者
賀茂	三町	五五	八三	賀茂郡農會
富原	三	五四	八七	富士郡蠶絲業組合
榛原	八	二四八	二一〇	榛原郡蠶絲業組合
同田	四	八〇	一〇一	吉田村川尻小組合
磐田	三	七二	一〇九	磐田郡蠶絲業組合
濱名	五	一四九	一三三	河輪村農會
計	二・五	六五八	七二三	

模範桑園個人別表

反別	獎勵費交付額	住設置者	反別	獎勵費交付額	住設置者
一・二町	一八	田方郡下大見村	一町	一八	富士郡岩松村
一・二町	一八	駿東郡印野村	計	一・五	島崎仁作

△明治四十二年度、獎勵費貳千九百八拾貳圓ニシテ其内國庫補助金千四圓也、今獎勵金下附ニ依リテ新設セル桑園ヲ各郡市別ニ表示セハ左ノ如シ。

新設桑園郡市別表

郡市	反別	人員	獎勵費交付額	郡市	反別	人員	獎勵費交付額
賀茂	四町	一九名	六五	榛原	六町	五二名	一八二
田方	八・七	四七	一六四	小笠	七・六	六四	二二四
駿東	一八・九	七四	二五九	周智	五・一	三五	一一二
富原	一三・八	五六	一九六	磐田	一六〇	九四	三二九
庵原	四・八	三二	一一二	濱名	一四・五	九〇	三一五
安倍	五・九	三九	一三六	引佐	一四・三	一〇一	三五三
静岡市	五・八	四五	一五七	計	二二七・二	七四八	二、六一四
志太	五・八	四五	一五七				

桑苗園設置表

郡市	反	別	桑苗作製數	獎勵費交付額	設置者
榛原	八	町	七八四	一三三	榛原郡蠶絲業組合
同	六		七五二	一〇九	吉田村川尻小組合
磐田	三		六五	五二	磐田郡蠶絲業組合
濱名	四		一六四	七〇	積志村農會
計	二・一		一、七六五	三六四	

桑園増殖獎勵費交付規程

- 第一條 桑園ノ改良増殖ヲ獎勵スル爲本規程ノ定ムル處ニ依リ左記該當ノ者ニ獎勵金ヲ交付ス
 - 一、養蠶ヲ爲ス者ニシテ桑園ヲ新設シタルトキ
 - 二、縣郡町村農會又ハ其他ノ組合團體ニシテ養蠶者ニ配付用ノ桑苗養成模範桑園又ハ試驗桑園ノ設置
- 第二條 獎勵金ハ郡長ノ推薦ニ依リ前條ノ事項ヲ施行スル者ニ交付ス
- 第三條 桑園ヲ新設セムトスル者ハ様式第一號ノ願書並同第二號ノ桑園設計書ヲ桑苗養成者ハ様式第一號及同第二號ニ準シ願書設計書並經費豫算書ヲ又模範桑園及試驗桑園設置者ハ様式第一號ニ準シタル願書ニ設計書並經費豫算書ヲ知事ニ差出スヘシ
- 第四條 獎勵金交付ノ認可ヲ受ケ桑園ヲ新設シタル者ハ設置後直チニ様式第三號ノ報告書並町村長ノ證明ヲ經タル同第二號ニ準スル桑園設置書ヲ又桑苗園ヲ設置シタル者ハ様式第三號ニ準シタル設置報告書及同第二號ニ準シタル設計書ヲ苗木ヲ配付シテ桑園ヲ設置セシメタルトキハ様式第四號ノ報告書並經費決算書ヲ又模範桑園及試驗桑園設置者ハ別ニ定メラレタル處ニ依リ報告書ヲ知事ニ差出スヘシ
- 第五條 獎勵金ノ交付ヲ受ケテ設置シタル桑園又ハ桑苗園ニハ桑樹ノ種類名稱ノ異ナル毎ニ其名稱、植付、苗木數、反別、所有者、管理者ノ住所氏名ヲ明記シタル木標ヲ建設スヘシ
- 第六條 獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者ハ桑園ノ設置又ハ其桑苗養成上ニ關シ主任官吏々員ノ指示ニ遵フヘシ

- 第七條 本規程ニ依リ當事者ヨリ知事ニ差出スヘキ書類ハ各其推薦者ヲ經由スヘシ
- 第八條 獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者ニシテ本規程ニ違背シ又ハ不都合ナル所爲アリト認メタルトキハ獎勵金ノ一部若ハ全部ヲ還納セシムルコトアルヘシ

附 則

第九條 明治四十年度ニ於ケル蠶絲同業組合長蠶絲業組合長ノ推薦シタル桑園新設者ニ對シテモ獎勵金ヲ交付ス

桑園ト煙草畑トノ關係調査

本縣磐田、濱名、富士等ノ各郡ハ桑園附近ニ煙草ヲ栽培スルヲ以テ其發散スル毒物、桑葉ニ附着シ蠶兒ヲシテ中毒セシメタル實例ニ乏シカラス、依テ之カ關係ヲ知ランカ爲、東京蠶業講習所ニ於テハ明治三十六年ヨリ同四十一年ニ亘リテ繼續試驗ヲ行ヒ、且ツ同所坪井技手ハ四十年八月磐田、濱名兩郡へ出張シテ實地踏査ヲ行ヒタリ而シテ同四十二年同所蠶業報告第三十五號ニ依リテ發表セラレタル試驗成績ノ概況ヲ記スレハ左ノ如シ。

煙草中毒試驗成績概要

三十六年ヨリ四十年迄五ケ年間繼續試驗ノ結果、(一)、桑園ノ附近ニ煙草ヲ栽培スルトキハ開花成熟ノ頃ヨリ揮發性ノ毒物^{ニコチンニ似タ}ル性質ヲ有ス^ルヲ發散シテ桑葉ニ附着ス、此桑葉ヲ蠶兒ニ給與スルトキハ中毒症狀ヲ呈シ甚シキニ至レハ遂ニ斃死スルコト、(二)、此毒物ハ壹反歩ノ煙草畑ニアリテハ三十五間ヲ隔テタル所迄飛散シ、被害程度ハ煙草畑ヨリ低地ノ方ニ向ヒテ甚シク風上ノ地ヨリ風下ニ甚シキ傾向アルコト等既ニ蠶

事報告第二十七號及四十年年度臨時報告ニ於テ明ナレトモ此毒物ハ果シテニコチンナルカ又其飛散ハ風向ニ關係ヲ有スル者カ將タ桑葉ノ毒物ヲ受クル狀況及被害桑ノ毒物消失ニ關スルコト等、不明ノ事實ヲ探究センカ爲四十一年度同所ニ於テ、(一)、毒物ノ化學的試驗、(二)、被害距離及方向試驗、(三)、天候並晝夜ト毒物トノ關係試驗、(四)、毒物消散試驗ヲ行ヒタル成績ヲ綜合スレハ左ノ如シ。

- (一)、煙草ヨリ發散シテ桑葉ニ附着シ蠶兒ヲ中毒セシムル毒物ハ「ニコチン」也
- (二)、此「ニコチン」ノ被害桑葉中ニ存スル量ハ極メテ微量ニシテ蠶兒ニ激烈ノ中毒症ヲ起サシムル桑葉ニアリテモ、生葉百萬分中僅ニ五十六分ヲ數フルニ過キス。
- (三)、煙草ヨリ發散スル「ニコチン」ハ遠距離迄飛散シニ反歩ノ煙草畑ニアリテハ、四十間ニ及フモノアリ。
- (四)、「ニコチン」ノ飛散ハ風位ニ伴フモノニシテ風上ニ少ク風下ニ多シ。
- (五)、故ニ夏秋蠶用桑園ノ附近ニ煙草ヲ栽培セントスル時ハ、可成風下ノ地ヲ選ヒ四十間以上ノ距離ヲ設クルヲ安全トス。
- (六)、桑葉ニ煙草ヨリ發散シタル「ニコチン」ヲ含ム量ハ、晴天或ハ雨天ノ時ヨリ曇天ノ時ニ最モ多ク、又一日中ハ晝間ヨリモ夜間ニ於テ多キカ如シ。
- (七)、桑葉ノ有スル「ニコチン」ハ自然ニ放置スルモ漸次消散シ、撒水若ハ降雨ハ之ヲ速ナラシム。
- (八)、故ニ煙草畑ノ附近ニアリテハ毒物ヲ有スル憂アル桑葉ヲ以テ飼育ニ供セントスルトキハ、朝若ハ日中ニ摘葉セス、可成夕景ニ於テ摘葉シ、又天候ヨリ云フトキハ曇天及晴天ノ時ヨリモ降雨後水分ノ乾

クヲ待テテ直ニ摘採スルヲ可トス。

静岡縣桑園品評會

縣下桑園ノ改良増殖ヲ圖ランカ爲、静岡縣蠶絲業組合取締所主催トナリ、明治四十三年度ヨリ桑園品評會ヲ開設シ本縣ヨリ審査員長以下ヲ派遣シ、且ツ毎年度事業獎勵トシテ褒賞費三百圓ヲ交付セリ、今其概況ヲ記スレハ左ノ如シ。

△明治四十三年度、第一回桑園品評會ハ各郡市賀茂郡ヲ除クニ支會ヲ設置シテ、其地區内ニ於ケル自作桑園五畝歩以上ノモノ一人ニ付一ヶ所宛出品セシメ、審査ヲ行ヒタル上、最モ優良ナル桑園ヲ選抜シ之ヲ更ニ本會ニ出品セシメテ品種、栽植、仕立法、耕耘、施肥、管理、收穫等ノ比較審査ヲ行フモノトス、斯クテ郡市支會ノ審査ハ九月末日、本會ノ選抜審査ハ十月末日迄ニ結了シタルニ依リ、十二月二十日静岡市物産陳列館ニ於テ種繭品評會並製絲競技會ト共ニ褒賞授與式ヲ舉行セリ。

出品並受賞表

郡市	出品數	受賞				總計
		一等	二等	三等	四等	
駿田賀	四五	一	一	一	一	四
東方茂	四五	一	一	一	一	四

合計	引佐	濱名	磐田	周智	小笠	榛原	志太	静岡市	安倍	庵原	富士
六〇	四	九	八	二	七	二	四	一	六	四	四
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一
四	二	六	五	二	五	二	三	一	五	三	三
六〇	四	九	八	二	七	二	四	一	六	四	四

受賞者

等	一	二	同	同
級	等	等	等	等
名	十	十	十	十
稱	文	文	文	文
賞	字	字	字	字
與	二	二	十	十
住	濱名郡	小笠郡	田方郡	庵原郡
所	神久呂村	千濱村	函南村	内房村
氏	鈴木	伊藤	三田	森田
名	米三郎	伊平	勇次郎	太太郎

同	同
十	十
文	文
字	字
十	十
圓	圓
磐田郡	引佐郡
豊濱村	西濱名村
加藤	井口
藤廣	與平
次	平

功勞者表彰、本會規則第十三條ニ依リ褒賞授與式ト共ニ、功勞者表彰式ヲ舉行セリ、別項蠶絲業績者ノ中ニ記載ス。

總裁以下役員、第一回桑園品評會總裁會長並審査關係職員左ノ如シ。

總會	田方支會	駿東支會	富士支會	庵原支會	本會	同	同
總裁	支會長	支會長	支會長	支會長	副會長	副會長	副會長
石原健三	湯山慶次郎	辻芳太郎	高橋六太郎	鈴木七二郎	寺尼昌太郎	太田兵太郎	阿部保太郎
會長	副會長	副會長	副會長	副會長	審査員	審査員	審査員
小島源三郎	石橋尙松	石室武幸	永井嘉九郎	横山健九郎	飯島善太郎	岩波爲治郎	三瀬新五郎
狩野長男	野瀬九平次	福地武幸	福室武幸	江本健九郎	深澤米太郎	深澤米太郎	深澤米太郎
望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎	望月嘉三郎
長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎	長澤嘉三郎

安倍支會	支會長 田澤義鋪	副會長 寺尾昌太郎
志太支會	支會長 小川省次郎	副會長 望月梅次郎
榛原支會	支會長 村田庄太郎	副會長 山下耕三
小笠支會	支會長 稻見明精	副會長 池原嘉代
周智支會	支會長 白坂治平	副會長 松村下幾
磐田支會	支會長 木田龍助	副會長 富田庄吉
濱名支會	支會長 西山清松	副會長 岩瀬廣平
引佐支會	支會長 水野富三郎	副會長 朝比奈淺吉
静岡支會	支會長 田邊三郎平	副會長 久野市郎
	支會長 大澤富三郎	副會長 鈴木治平
	支會長 足立孫三	副會長 伊藤甚三郎
	支會長 天野千代丸	副會長 岡部竹次郎
	支會長 上村源一郎	副會長 浦部孫兵衛
	支會長 藤田信次郎	副會長 後藤角平
	支會長 實藤豊吉	副會長 高窪野信次郎
	支會長 長島弘裕	副會長 市川常吉
	支會長 伊藤誠太郎	副會長 外野定喜次郎

△規則、本年度桑園品評會則左ノ如シ。

第一章 總則

第一條 本會ハ桑園ノ改良増殖ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ静岡縣桑園品評會ト稱シ縣下各都市組合ニ開設スルモノヲ静岡縣桑園品評會何都市支會ト稱ス

第三條 本會ノ事務所ハ静岡縣蠶絲業組合取締所ニ各支會ノ事務所ハ各都市組合事務所内ニ之ヲ設置ス

第二章 出品

第四條 出品桑園ハ一人一ヶ所トシ左ノ各項ニ該當シ自家耕作地反別五畝歩以上又ハ三畝歩以上但シ團體等ノ出品モ亦個人ノ出品ト見做ス

一、桑園反別一反五畝歩以上ヲ耕作スルモノ、二、桑園ハ早、中、晩チ間ハ同一品種ヲ植付ケタルモノニ限ル、三、滿三年以上桑園ノ耕作ニ從事シタルモノ

第五條 各都市支會ニ於テハ其都市内出品ノ總數中ヨリ左ノ數ニヨリ最優良桑園ヲ選抜シテ之ヲ本會ニ報告スヘシ

田方	五	駿東	四	富士	四	庵原	四	安倍	六
静岡	一	志太	四	榛原	二	小笠	七	周智	二
磐田	八	濱名	九	引佐	四	其他	四	合計	六四

第六條 各都市支會ノ出品數ハ本會選抜數ノ七倍以上タルヲ要ス

第七條 出品人ハ第一號樣式ノ出品申告書ヲ毎年七月末日限リ其都市支會事務所ヘ差出スヘキモノトス

第八條 各都市支會ニ於テハ第二號樣式ノ選抜報告書ニ前條ノ出品申告書ヲ添ヘ毎年九月末日限リ本會事務所ヘ差出スヘシ

第九條 出品桑園ニハ左ノ事項ヲ記載シタル木標ヲ建テ置クモノトス

第三章 審査及褒賞

第十條 各都市支會ニ於ケル出品地審査ハ九月二十日迄ニ選抜地審査ハ十月中之チ行フ

第十一條 審査終了シタルトキハ左ノ等級ヲ定メ褒賞ノ授與ヲ本縣知事ニ申請スルモノトス選抜等級一等賞々金貳拾圓、二等賞々金拾圓

三等賞々金五圓、四等賞々金三圓支會等級一等賞乃至四等賞各賞品

第十二條 出品人ハ審査ヲ拒ミ又ハ再審査ヲ請ヒ授與ノ褒賞ヲ拒ミ若ハ審査ノ決定ニ對シ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

◎第三項桑園ニ關スル事項 静岡縣桑園品評會

第十三條 本會ハ桑園ノ改良上功勞顯著ナル者ニ對シ功勞賞又ハ追賞ヲ爲スコトアルヘシ
第十四條 褒賞授與式ハ本會ハ毎年二月中之ヲ舉行シ各支會ハ年度内適宜之ヲ舉行ス

第四章 會 務

第十五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總 裁	一 名	會 長	一 名	副 會 長	一 名
事務委員	一 名	事務委員	若干名	審 查 長	一 名
審査官及ヒ審査員	四 名	各郡市支會長	一 名	同副會長	一 名
同事務委員	若干名	同 審 查 部 長	一 名	同 審 查 員	二 名

第十六條 總裁ニハ静岡縣知事ヲ推戴ス
第十七條 會長以下ノ役員ハ總裁之ヲ囑託ス

第十八條 會長ハ本會一切ノ事務ヲ統轄シ副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス各郡市支會長及副會長ハ其支會ニ係ル事務ニ付又之ニ準ス

第十九條 事務委員長及事務委員ハ會長ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第二十條 審査長ハ審査事務ヲ統理シ審査官及審査員ハ審査長ノ指揮ヲ承ケ審査ニ從事ス各郡市支會審査部長及ヒ審査員ハ審査長ノ指揮ヲ承ケ其支會ニ係ル審査事務ニ付又之ニ準ス

第二十一條 審査規程及ヒ處務細則ハ別ニ之ヲ定ム

第五章 經 費

第二十二條 本會ノ經費ハ静岡縣蠶絲業組合取締所ノ負担トシ各郡市支會ノ經費ハ其組合ノ負擔トス但シ選拔桑園ノ褒賞費ハ本縣費ノ補助ヲ請フモノトス

第六章 附 則

第二十三條 本規則ニ改正増補ノ必要ヲ生ジタルトキハ本所常議員會ノ決議ヲ以テ加除修正スルコトヲ得

審 査 例 則

第一、品種満点三十点、土地ニ對スル適否ヲ檢ス

第二、栽植満点四十点 一、整地満点十點、植付ノ際ニ於ケル土地整理ノ適否ヲ檢ス 二、苗木満点十點、苗木選擇ノ適否ヲ檢ス 三、植付満点十點、植付ノ深淺及ヒ正否ヲ檢ス 四、株數満点十點、株數ノ適否及ヒ損ノ有無ヲ檢ス

第三、仕立法満点二十點、其地方ニ於ケル仕立法トシテ適否ヲ檢ス

第四、耕耘満点四十點 一、時期満点十五點、耕耘ノ時期適否ヲ檢ス 二、方法満点十點、耕耘方法ノ適否ヲ檢ス 三、精粗満点十五點、耕耘ノ精粗ヲ檢ス

第五、肥料満点五十點 一、時期満点十點、施肥時期ノ適否ヲ檢ス 二、種類満点十五點、肥料ノ種類及配合ノ適否ヲ檢ス 三、用量満点十五點、施肥量ノ適否ヲ檢ス

第六、管理満点四十點 一、刈取満点十點、刈取又ハ株直ノ時期及方法ノ適否ヲ檢ス 二、整枝満点十點、枝條整理ノ適否ヲ檢ス 三、除害満点二十點、害虫、害菌其他病毒ノ驅除豫防法

第七、收穫、滿点三十點、收穫ノ多少ヲ檢ス

△明治四十四年度、第二回桑園品評會ハ前年ト同シク、賀茂郡ヲ除ク十二郡ニ支會ヲ設ケ、各支會ヲシテ撰拔セシメタルモノ五十八點ニ就キ、十月九日ヨリ審査ニ着手シテ同三十日結了シタルニ依リ、十一月十二日静岡市物産陳列館ニ於テ、第二回種繭品評會並第五回製絲競技會ト共ニ褒賞授與式ヲ舉行セリ。

申 告 文

第二回静岡縣桑園品評會ノ出品區域ハ管内賀茂郡ヲ除キテ十二郡ニ亙リ其出品總數ハ四百四十五點ニシテ内各郡支部チシテ撰拔セシメタルモノ五十八點ニ就キ比較審査ヲ行ヒタリ以下審査ノ梗概ヲ述ヘ併セテ改良スヘキ要點ヲ指摘セムトス (一)、桑ノ品種ハ十文字、遠州高助外數種ニシテ各地一般ニ早、中、晚ノ割合ニ留意スルモノ少ナク品種多クハ一方ニ偏セルヲ遺憾トス (二)、仕立法ハ殆ト根刈ニシテ中刈

◎第三項桑園ニ關スル事項 静岡縣桑園品評會

又ハ高刈ヲ爲スモノ甚タ稀ナリ之レ氣候風土ノ關係上其當ヲ得タルモノナリト雖屢水害ヲ被リ易キ地方ノ如キハ其被害ヲ少ナカラシメ
 ンカ爲中刈以上ノ仕立法ヲ爲スノ要ナキカ大ニ之ヲ研究ヲ望ム、又近時秋蠶ノ勃興ニ伴ヒ適當ノ施設ヲ講究スルハ蓋緊切ナル事項ナラン
 (三)、栽植法ハ一般ニ佳良ナラス即チ整地ヲ行ヒタリト認ムルモノ少ナク且ツ植付距離概シテ狹キニ過クル故ニ繁茂良好ナラスシテ樹齡
 短ク耕耘其他管理ニ不便ナルノミナラス通風不良ノ爲病蟲害ヲ多カラシムルノ缺點アリ宜シク改ムヘキ也 (四)、耕耘ハ概テ佳ナルモ往々
 其時期ヲ失シ或ハ方法粗略ニ流ル、カ如キモノアリ (五)、施肥ハ概シテ不充分ナルニ拘ラズ桑葉濫採ノ結果樹勢ノ衰弱ヲ來シタルモノ
 多キヲ見ル殊ニ近來最重要ナル堆肥、厩肥等ニ代フルニ施肥ニ便ナル速効肥料ヲ用フルモノ多ク而カモ其施スヘキ時期ヲ誤リ爲ニ晩秋
 尙伸長ヲ持續シ梢端枯損ノ虞アルモノアルハ大ニ戒ムヘキコトナリトス (六)、管理モ亦一般其宜シキヲ缺キ殊ニ株直シノ如キハ概テ之ヲ
 等閑ニ附シ又病蟲害ハ年々猖獗ヲ極メ就中「スキムシ」蠶象蟲、心止蟲ノ加キハ各地ニ慘害ヲ逞フスルニ拘ラズ其驅除豫防ヲ忽緒ニ附スル
 看アルハ眞ニ痛嘆ニ堪ヘサル也 (七)、收葉量ハ一反歩ニ付其多キハ四百貫以上普通三百貫内外ニ達シ縣下平均收葉量百八十貫ニ比スレハ
 遙ニ多キヲ見ル然レトモ尙改良ノ餘地アルヲ認ム要之本縣ノ桑園ハ時ニ優秀ナルモノ無キニ非サルモ成績概シテ昨年ニ劣レルハ畢竟數回
 ノ暴風水害等ニ基因スルコト多大ナルヘント雖、亦以テ栽桑改善法ノ普及セサルニ由ラスンハアラス、今ヤ我蠶業界ハ蘭質整正ノ急ヲ告
 ケ將來ノ發展上正ニ一新紀元ヲ畫セムトスルノ時期ニ際會セリ、而シテ其目的ヲ達セムニハ蠶業ノ根元タル栽桑ノ改良ニ俟ツコト多シ茲
 ナ以テ當業者諸君此際宜シク前述諸項ノ事實ニ鑑ミ發奮努力本縣桑業ヲシテ順調圓滿ナル進歩ヲ企圖セラレンコトヲ切望シテ止マス、以
 上審査ノ成績ニ據リ一等二點二等八點三等十六點四等三十二點計五十八點ヲ選ミ既ニ閣下ノ決裁ヲ經タリ希クハ褒賞ノ授與アラントトテ
 謹テ稟請ス。

審査長静岡縣技師從六位 渡邊 亥 八

出品並受賞表

部	出品數	受賞				數計
		一等	二等	三等	四等	
賀茂	1點	1名	2名	3名	4名	10名

受賞者

田方	五	1	1	1	1	1	3
駿東	四	1	1	1	1	1	3
富士	四	1	1	1	1	1	3
庵原	四	1	1	1	1	1	3
安太	五	1	1	1	1	1	3
志原	二	1	1	1	1	1	3
榛原	七	1	1	1	1	1	3
小笠	二	1	1	1	1	1	3
周智	八	1	1	1	1	1	3
磐田	二	1	1	1	1	1	3
濱名	九	1	1	1	1	1	3
引佐	四	1	1	1	1	1	3
合計	五八	16	11	13	11	11	58

等級	姓名	稱賞	與	住所	氏名
一等	田方	一等	與	田方郡加茂村	渡邊 幸平
二等	駿東	二等	與	駿東郡加茂村	小笠 隆吉
三等	富士	三等	與	富士郡加茂村	清水 榮太郎

二	十	文	字	十	圓	濱名郡馬村	川合吉次郎
同	同	同	同	同	圓	同和田村	伊藤常吉
同	同	同	同	同	圓	駿東郡泉村	山本淺次郎
同	同	同	同	同	圓	引佐郡都田村	鈴木嘉吉
同	同	同	同	同	圓	磐田郡西淺羽村	鈴木傳吉
同	同	同	同	同	圓	富士郡傳法村	笠井傳次郎
同	同	同	同	同	圓	田方郡葦山村	新井寅次郎

功勞者表彰、本會規則第十三條ニ依リ、褒賞授與式ト共ニ功勞者表彰式ヲ舉行セリ、其氏名別項功績表彰者欄參照。

役員、本年度桑園品評會役員、審査關係職員左ノ如シ。

會長	寺尼昌太郎	審查長	渡邊亥八	審查員	岩浜爲次
會 長	小林衛	同	阿部保太郎	同	金子保
同	飯島善太郎	同	同	同	同
田方支會 審査部長	湯山慶次郎	審查員	原良助	同	小永井誠作
駿東支會 審査部長	村田庄太郎	審查員	佐藤忠義	同	増山豊作
富士支會 審査部長	久保田貞次郎	審查員	渡邊里次郎	同	小林梅太郎
庵原支會 審査部長	匂坂治平	審查員	望月三木治	同	長澤嘉十郎
安倍支會 審査部長	池田國太郎	審查員	増田善右衛門	同	栗田興一郎

志太支會 審査部長	富岡新五郎	審查員	高橋市太郎	同	金原嘉吉
榛原支會 審査部長	窪野兼作	審查員	鈴木三代太郎	同	小泉梯藏
小笠支會 審査部長	西山清松	審查員	杉村良七	同	岩瀬庄平
周智支會 審査部長	一木藤太郎	審查員	佐藤良太郎	同	永沼兼次郎
磐田支會 審査部長	足立孫三	審查員	伊藤甚三郎	同	藤原操平
濱名支會 審査部長	鈴木良平	審查員	阿部利八	同	山下眞平
引佐支會 審査部長	實藤豊吉	審查員	稻垣馬吉	同	高橋信次

桑樹病蟲害驅除豫防

▲スキムシ一名ハマ 明治四十三年九月下旬ヨリ十一月ニ亘リ、濱名郡舞坂、篠原、新津、五島、白脇ノ各町村ハ被害激甚ヲ極メ、漸次東北郡ニ蔓延シテ濱名郡南部一帯ヲ襲ヒ、遂ニ磐田郡掛塚、袖浦、福島、豊濱、幸浦等ノ各町村ニ及ヒテ、桑園ハ一面ニ枯凋シ實ニ慘憺タル光景ヲ呈セリ、茲ニ於テ東京蠶業講習所ハ十一月五日ヨリ約一週間、丹羽技手ヲ被害地ニ派シテ詳細ノ調査ヲ遂ケシメ、本縣ニ於テハ渡邊技師ヲ派遣シ、且ツ各郡役所及蠶病豫防事務所各支所ニ注意ヲ發シテ専ラ之カ驅除豫防ニ努メタリ、左記内務部ノ注意書並渡邊技師ノ復命書ニ依リ其一斑ヲ知ルヘシ。

クハノスキムシノ驅除豫防ニ就テ 四十三年十一月 内務部ノ注意書

縣下濱名、磐田ノ兩郡ニハ、クハノハマキムシ發生シ其被害劇甚ヲ極ム今ニシテ是カ驅除豫防ヲ怠ランカ、來年再ヒ其被害ヲ被ルナキヲ

◎第三項桑園ニ關スル事項 桑樹病蟲害驅除豫防

保セス依テ左ニ該蟲ノ形態經過習性被害ノ狀況驅除豫防法ヲ調査シ之ヲ印刷ニ付シテ當業者ニ配付シ以テ驅除豫防ノ便ニ資セントス

形態 幼蟲ハ成長シタルモノノ体長七八分アリテ頭部ハ淡褐色ヲ呈シ胸部ハ淡綠色ニシテ各環節ニハ四個乃至六個ノ黒キ小キ突起ヲ存シ之ニ一木ノ灰白色ノ短毛ヲ生ス、蛹ハ圓筒形ニシテ黃褐色ヲ呈シ長サ三四分アリ、成蟲ハ小形ノ蛾ニシテ頭部ハ白色眼ハ黒褐色觸鬚ハ灰褐色ナリ胸部ハ中央暗褐色ヲ帶ヒ側方ハ白色ヲ呈ス前翅ハ翅底及外縁暗褐色ニシテ翅ノ中央ニ太キ暗褐色ノ帶條アリテ其内外ハ共ニ白色ナリ後翅ハ大部分白色ニシテ外縁ニ太キ暗褐色ヲ有ス外縁ニ接セル部分ニハ細キ白色線ヲ存シ腹部及背面ハ暗褐色ヲ呈セリ体長三分翅ノ開張七分内外アリ、卵ハ淡綠色ニシテ不規則ナル圓形ナリ直徑一厘餘ニ達ス。

經過習性 一年四回ノ發生ヲナシ成熟セル幼蟲ニテ越冬シ五月中旬頃蛹トナリ凡ソ二週間ヲ經テ蛾トナリ桑葉ノ裏面ニ點々産卵ス、卵ハ六月上旬ニ至リ孵化シテ第一化ノ幼蟲トナリ絲ヲ吐キテ桑葉ヲ捲キ其内ニ潜伏シテ之ヲ食害シ七月上旬ニ至リ化蛹ス、蛹ハ七月下旬羽化産卵シ之ヨリ孵化シテ第二化ノ幼蟲トナリ凡ソ二週間ニシテ老熟化蛹ス次テ八月中旬羽化産卵シ之ヨリ孵化シタル第三化ノ幼蟲ハ九月上旬頃老熟化蛹シ九月中旬頃ニ至リ羽化産卵ス九月下旬頃第四化ノ幼蟲發生シ充分成長セル後桑葉ヲ綴リ若ハ莖幹ノ裂隙ニ潛入シテ越冬スルモノナリ。

被害ノ狀況 被害ノ最モ甚シキハ九、十月ノ頃ニシテ晩秋蠶飼育ノ時期ナリトス而シテ該蟲幼齡ノ頃ハ桑葉ノ裏面ニ數條ノ糸ヲ張りテ其間ニ自休チ保チ葉肉ヲ食シ成長セルモノハ桑葉ヲ捲キテ其間ニ潛ミ食害ヲ逞フス故ニ被害ノ甚シキ桑葉ハ葉脈ノミヲ殘シテ殆ト網狀ヲ呈スルニ至ル此故ニすきむしノ名アリ。

驅除豫防法 イ、幼蟲ハ秋期枯葉ノ間又ハ莖幹ノ裂隙等ニ潜伏スルモノナレハ其附着セル枯葉ハ之ヲ手ニテ抜き取り又落葉ハ之ヲ集メテ燒棄スヘシ、ロ、桑葉食害ノ際幼蟲ヲ捕殺スヘシ。

寄生蜂 体長一分翅ノ開長二分位ノ一種ノ蜂アリテ該蟲ニ寄生シ寄主ノ老熟セル頃之ヲ脱出シ其周圍ニ於テ小繭ヲ營ム而シテ一頭ノ寄主ニ對シ普通十五六頭寄生ス故ニ此繭ヲ保護スルコト肝要ナリ。

恐ルヘキ桑園ノ害蟲 四十二年十一月渡邊 技師復命書ノ一節

濱名郡ニ於ケル被害ノ狀況左ノ如シ。

- 一、害蟲發生ノ起因 十數年前郡内南部ノ町村ニ發生シ爾來毎年多少宛繁殖シ以テ今日ニ至レリ
- 二、害蟲ノ發生地 舞坂、篠原、新津、白脇、五島、芳川、濱松、淺場、入野、神久呂、新居ノ各町村就中舞坂、篠原、五島、白脇等南部海岸ニ發生殊ニ甚シク氣候不順ノ年柄ニモ最モ多ク繁殖ス
- 三、從來及本年ノ豫防驅除 從來ハ其方法區々ニシテ各自落葉ヲ集メテ之ヲ埋込ムカ又ハ燒棄シ來リタルカ本年ハ郡役所郡農會蠶絲業組合協議ノ上各町村ニ亘リ一齊驅除ヲナス計畫ニシテ其方法ハ被害葉ヲ集積シテ之ヲ燒棄スルニアリ予亦各當局者ト驅除豫防ニ就テ打合せ所アリタリ
- 四、害虫ノ將來 前述ノ如ク十數年以降年々多少ノ發生ヲ見ツ、アリ而シテ其被害ハ未ダ曾テ今日ノ如キコトナシト雖今後尙繁殖區域ヲ擴大スヘク既ニ最初ノ發生地タル南部ヨリ漸次郡ノ中央及東西ニ波及蔓延シツ、アル也
- 五、慘憺タル被害ノ狀況 害虫ハ絲繭ヲ以テ桑葉ヲ綴リ合セテ其内ニ蟄シ葉肉ヲ食シ葉脈ヲノミ殘ス葉ハ全部透明トナリテ恰モ網狀ヲ呈ス被害激甚ナル地ハ篠原、舞坂附近ヲ初トシ漸次東北部ニ及ヒタル方遠方ヨリ見ルトキハ恰モ初冬ニ於ケル桑園ノ如ク桑葉一面ニ枯凋シ慘憺タル光景ヲ呈セリ今被害ノ町村及反別ヲ掲グルヘ左ノ如シ

町	村	被害反別	發生時期	町	村	被害反別	發生時期
新居	居	一三〇町	十月八日頃	篠原	原	四八〇町	九月二十日頃
舞坂	坂	七〇町	九月二十日頃	濱松	町	二八〇町	九月二十二日頃
五島	島	四五〇町	九月二十日頃	飯田	田	一〇〇町	十月二日頃
入野	野	二〇〇町	九月二十五日頃	白脇	脇	六〇町	十月七日頃
雄踏	踏	五五〇町	十月八日頃	芳川	川	二八〇町	九月二十日頃
神久呂	呂	一五〇町	十月五日頃	河輪	輪	一五〇町	十月五日頃
天神町	町	二〇〇町	十月七日頃			同	
天場	場	二六〇町	九月二十日頃				

◎第三項桑園ニ關スル事項 桑樹病蟲害驅除豫防

備考 尙此他ノ町村ニ被害反別四十町歩ヲ認ムレトモ程度僅少ナルニ付計上セス

六、害蟲寄生生物 被害桑園ヲ實地踏査スルニ無數ノ蜘蛛棲息シテ常ニ幼蟲及蛹ヲ喰ヒ斃シツ、アリ又一面桑葉ニハ夥多ノ微小ナル一種ノ繭ヲ散見ス之レ害蟲ニ寄生スル有益蜂ノ繭也以テ如何ニ彼ノ昆蟲界ニモ激烈ナル生存競争ノ行ハレツ、アルヲ知ルヘシ偶々被害激甚ノ年ニ遭遇スルモ次年ニ於テ大害ヲ招カサルハ主トシテ此等自然驅除ノ行ハル、カ爲ナラン害蟲ニ寄生スル綠癭病菌ハ洵ニ僅少ニシテ實物ハ右ノ如ク其他ノ寄生菌ハ多シ

磐田郡ニ於ケル被害ノ狀況左ノ如シ

一、害蟲發生ノ起因 本郡ニ於ケル害蟲發生ハ濱名郡ニ發見後數年ヲ經テ掛塚、袖浦地方ニ現ハレ爾來各地ニ蔓延セルモノニシテ種類ハ濱名郡ニ於ケルモノト同一物也之カ驅除豫防ニ關シテハ郡役所蠶絲業組合等ト打合スル所アリシヲ以テ不日相當ノ方法ヲ講スルナラン今被害ノ町村名及反別ヲ掲ケレハ左ノ如シ

町村	桑園反別	被害反別	町村	桑園反別	被害反別
掛塚町	一八〇町	一四〇町	福島	二六〇町	一〇〇町
袖浦	九〇〇	五〇〇	豊濱	一五〇	五〇
長野野	二八〇	八〇	幸浦	二五〇	八〇
南御厨	二〇〇	五〇	計	二五一八	一〇七〇
西淺羽	二九〇	七〇			

▲桑心止蟲玉蠅ノ 熊本縣立農學校某教諭同縣ニ於テ被害ノ甚シキヲ認メ、是カ研究ヲ遂ケ四十二年一月日本昆蟲學會報ニ詳細掲載シタルヲ以テ、漸ク害蟲ノ加害ナルコトヲ知悉スルニ至レリ、本縣ニ於テモ一般ニ此被害アリ、殊ニ濱名郡北庄内村、新所村及引佐郡ノ西部ニ甚シキ被害ヲ認メ、漸次蔓延ノ徵アルニ付

四十三年八月一般當業者ニ對シ、害蟲ノ形態及習性經過並加害ノ狀況等ヲ知悉セシムル爲、印刷物ヲ配付シテ注意ヲ與ヘ是カ豫防驅除法ヲ講シタリト雖完全ノ方法ナキヲ以テ縣當局及岡田縣農事試驗場技手ハ引續キ研究中也。

▲桑樹バクテリア病 四十五年一月濱名郡新所村地方開墾地ノ桑樹枯死スルモノ多キニ依リ縣廳ニ於テハ病株ヲ東京蠶業講習所ニ送附シ、調査ヲ依頼シタルニ桑樹バクテリア病菌及紫紋羽病菌ノ甚シク寄生セルヲ認メタルヲ以テ速ニ驅除豫防ノ方法ヲ講シタリ。

第四項 蠶種ニ關スル事項

蠶種取締

▲蠶種大總代、 明治三年政府ハ蠶種製造規則ヲ發布シタルカ、六年ニ至リ蠶種取締規則ト改正シ全國ニ蠶種大總代並副總代四十六名ヲ置キテ、租稅寮ヨリ下附スル蠶種免許印紙ノ取扱、其他蠶種製造ニ關スル一切ノ取締ヲ爲サシム、大總代ハ大藏省ノ規程ニ依リ月俸拾圓宛ヲ下賜セラレ、且ツ養蠶取締上ノ旅費ハ同規則第十二節ニ依リ管轄廳ニ於テ取扱ハレタリ、本縣ニ屬スル蠶種大總代ハ、元濱松縣下河合三郎同副總代元靜岡縣下高杉太一郎ノ二名ナリシ。

▲養蠶検査表例言、 明治六年蠶種製造取締ノ爲、大總代ヨリ各當業者ニ達シタル養蠶検査例言左ノ如シ。
方々盛ニ蠶種ヲ海外ヘ輸出スル秋ニ方リ蠶種ノ精良ナルハ必ス其繭ヲ結ヒ其レヨリ發スル蛾ハ必ス其卵ヲ産ムカ故ニ之ヲ得ンニハ原蠶ヲ

◎第四項蠶種ニ關スル事項 蠶種取締

シテ周到ナル飼育ヲ爲サ、ルヘカラス依テ蠶兒ノ掃立ヨリ蛾化産卵ニ至ルマテ鷄鶯臨檢ノ條例ヲ設ケ毫モ粗漏過失無カラシメンカ爲養蠶
 検査表ヲ印刷シテ事實ヲ記載セシムルコトハ當業者カ益々斯業ニ懸念注意シテ自ラ粗製偽造ノ弊ヲ一掃スルヲ得ントノ深意ヨリ布告スル
 義ナレハ宜シク舊慣私慾ヲ棄テ、此訓意ニ違背セザラン事ヲ希望ス

表 查 檢 蠶 養	日誌	明治何年		何縣管下	何郡何村	之	家内何人内		何何誰人
		原紙	何枚				男	女	
第一、養蠶器械	第一	第一	第一						
第二、簇	第二	第二	第二						
第三、繭	第三	第三	第三						
第四、繭重量	第四	第四	第四						
第五、發蛾別	第五	第五	第五						
第六、種紙數	第六	第六	第六						

右検査表並表末簡條ハ彼此對照取調候ヘハ該當ノ種紙偽製ノ取締行届可申候得共若シ心得違ノ者有之不都合ノ種紙出來候節ハ其縣廳
 へ申立ノ上蠶種製造差止め可申事
 國々 蠶種大總代

▲蠶種原紙賣捌、 明治七年六月蠶種原紙規則改正セラレテヨリ、内務省ニ於テ澁立原紙賣捌所ヲ武藏國

深谷、岩代國福島、信濃國上田ノ三ヶ所ニ定メラル、依テ各地方管内ニ就キ所要數ヲ取纏メ、蠶種製造人
 總代ヨリ當該官廳ノ添書ヲ附シテ毎年四月一日ヨリ五月三十一日限り最寄賣捌所ニ申出テ、買受クヘキ
 コト、ナリタリ、其價格ハ春蠶ニ用フルモノ千枚ニ付金五十圓夏蠶、掛合等ニ用フル薄紙同十五圓ナリキ。
 ▲養蠶検査一覽表、 明治七年政府ハ養蠶検査一覽表ヲ編製シ、之ヲ各府縣蠶種製造人ニ配付シタルカ靜
 岡縣ニ屬スルモノ左ノ如シ。

養蠶検査一覽表凡例、夫レ繭絲蠶種ハ我邦物産ノ冠タルモノナレハ其製造ニ從事スル者宜シク細思推究以テ斯業ヲ研磨シ試驗ノ實行發明
 ノ妙理等ハ同業者互ニ相通報シ協同一致共ニ精行微妙ノ域ニ進ムヲ勉ムヘキ也因テ茲ニ海内製種家ノ考案ヲ助ケンカ爲各府縣ヨリ客歲實
 業ノ検査表ヲ徵集シ又之ニ就テ要ヲ撮ミ更ニ畧表ヲ編製シ以テ四方ニ示ス而シテ表中各地養蠶法ノ優劣收穫ノ多寡及季節寒暄ノ差違ニ至
 ル迄一日シテ瞭然タラシム此表ニ就テ自他相照シ得失比較スレバ則チ其實業研磨ノ際亦裨益アルニ庶幾乎

寒 陰 雨 晴 合 巢 掃	日 入 立	伊豆	同	駿	同	遠	同	同
最 最	日 數	賀豆	三宅島	富土	安倍	駿東	佐野	豐田
暖 寒	天 天 天	三、七	四、九	四、六	四、七	五、二	四、五	四、二
一	一	四十七日	同 上	四十四日	同 上	四十一日	四十七日	四十六日
一	一	三六	三八	三〇	三二	二八	三七	三一
一	一	一	八	六	八	一	六	七
一	一							
七〇	六〇	七四	六〇	七八	六二	七八	五五	八五
七九	六五							

◎第四項蠶種ニ關スル事項 蠶種取締

蠶種	養桑度		養桑具	用養具	收養具	蠶分	簇
	自初眠起	自三眠起					
一	五	七	二	二	二	六	六三
二	五	五	三	二	二	六	四五
三	五	四	三	二	二	九	六〇
四	四	四	三	二	二	二	七四
五	四	三	三	二	二	二	七二
六	四	三	三	二	二	二	七〇
七	三	三	三	二	二	二	七〇

▲組合ノ組織、 明治八年二月二十二日蠶種取締規則廢止セラレ、同日ヲ以テ蠶種製造組合條例並蠶種製造組合會議局規則施行セラル、ニ當リ、蠶種製造組合條例ニ據リ組織シタル本縣蠶種組合ハ、藤川組、富士川組、豆相組ノ三組合ニシテ同九年五月廢縣分合ノ結果足柄縣管下伊豆國ハ静岡縣ニ編入セラレタルニ付、舊足柄縣ニ於テ組織セラレタル豆相組ハ其儘據置カレタリ、同年三組合ヲ合シテ更ニ鼎組ヲ組織シ、頭取ニ飯塚孫次郎、副頭取ニ松永省耕、河合三郎、検査人ニ益田郁太郎、高山藤七郎、武澤正義等就職セリ組合員左ノ如シ。

國別	蠶種		住	所	氏	名	蠶種	蠶種
	春蠶	夏蠶						
駿河國	一	一	静岡人宿町一丁目	矢部	傳兵衛	一	一	一
	一	一	同 吳服町一丁目	友野	與左衛門	一	一	一
	一	一	同 八番町	大熊	善一	一	一	一
	二	一	志太郡土端村	益田	郁太郎	二	二	二
	一	一	同 島田宿村	八木	泰吉	一	一	一
	一	一	同 稻葉村	伊久美	孫作	一	一	一
	二	一	同 青島村	小澤	三四郎	二	二	二
	二	一	同 治兵衛門	原川	治兵衛	二	二	二
	二	一	同 長次右衛門	原川	貴一	二	二	二
	二	一	同 伊久身村	平野	平四郎	二	二	二
	二	一	同 庵原郡北田村	望月	仁三郎	二	二	二
	二	一	同 西方村	西ヶ谷	喜六右衛門	二	二	二
	二	一	同 北田村	望月	仁三郎	二	二	二
	三	一	駿東郡長澤村	贊川	五平	三	三	三
	一	一	山名郡愛野村	戸倉	吉十郎	一	一	一
一	一	同 同	戸倉	藤次郎	一	一	一	
一	一	同 同	乘松市	太郎	一	一	一	
一	一	同 同	鹽谷	錫太郎	一	一	一	
富士國	一	一	富士郡中里村	山本	最作	一	一	一
	一	一	同 朝比奈村	渡邊	佐一郎	一	一	一
	一	一	有度郡吉川村	吉川	和太郎	一	一	一
	一	一	同 北脇村	草ヶ谷	彌作	一	一	一
	一	一	富士郡平垣村	松	永安	一	一	一
	一	一	同 松岡村	武澤	正義	一	一	一
	一	一	同 岩木村	山崎	農夫	一	一	一
	一	一	同 松岡村	佐野	康一	一	一	一
	一	一	同 平垣村	松	永晴	一	一	一
	一	一	同 松岡村	久保	田庄	一	一	一
	一	一	同 同	佐野	猪平	一	一	一
	一	一	同 同	島崎	貫一	一	一	一
	一	一	同 水戸島村	佐野	長十郎	一	一	一
	一	一	同 元市場村	小長	井太吉	一	一	一
	一	一	山名郡國元村	足立	儀八	一	一	一
一	一	同 高尾村	高山	藤七郎	一	一	一	
一	一	同 同	伊藤	七郎	一	一	一	
一	一	同 同	山下	富三郎	一	一	一	

養蠶開業ノ日淺キヲ以テ教導セサルヲ得ス爲ニ其役員ヲ相設度荷擔ノ事務或ハ説諭或ハ保護或ハ誘導或ハ監守等全ク力ヲ盡スヲ得ハ數年ヲ期セスシテ該業隆盛ノ實効ヲ養センコト必セリ此役員支給ノ出路無之依テ客歲御達相成候蠶繭鑑札ヲ御解令更ニ養蠶家一般へ該業徵證ノ御鑑札ヲ下附シ一月凡ソ金十錢宛ヲ納賦セシメ半枚以下ヲ飼育スル者此限リニ非ス以テ給額ニ充可申事但シ役員凡二十名一名ノ給額凡ソ金二十五圓ヲ分附スルモノト見做シ合計金五百圓ヲ要ス

役員事務章程 上款

- 一、蠶桑ノ業ハ御國民不可缺ノ生産ナルヲ以テ該業ニ從事スルモノ多カラシムコトヲ要シ前年來數回御誘導ノ御趣旨相賃候様可致事
- 一、山池河原田圃ノ畔或ハ土手屋敷廻リ砂塚砂利塚等無益ノ地ハ漸チ追フテ開拓ヲ成シ桑樹繁殖ナサシムル事
- 一、蠶兒飼育ノ方法懇切ニ教示シ可成違蠶不致様御注意候事
- 一、桑樹培養ノ方法諸説ニ拘泥セス其地方ノ土質ニ鑑ミ應當適宜ノ培育爲致無益ノ勞費ヲナカラシムヘキ事
- 一、該業ニ志アリテ飼育ヲ營マントスルニ原種ノ目途無之者へ精良ノ蠶種ヲ分附シ或ハ病蠶等ヲ鑑別シ惡蠶ト認ムレハ直チニ之ヲ廢棄セシメ其用桑ヲ以テ夏蠶備用ニ充テ其種ヲ與ヘ以テ蠶業發達ヲ完全ナラシムル事

下款

- 一、絲繭飼ニ從事スル者蠶種ノ性質ヲ知ラス異變ノ原種ヲ購得シ或ハ濫造スル者又ハ他國ヨリ輸入スル疑製粗惡ノ蠶種ヲ以テ養蠶候者無之様嚴肅取締可致事
- 一、世ニ本場ト稱スル陸羽上信其他各國ヨリ破落ノ徒漫ニ養蠶教師ト自稱シ村街ニ徘徊シ以テ奇利ヲ狐注ニ射ントシ虚喝ヲ唱ヘ陰然該業ニ妨礙ヲ爲ス者アリ之ヲ除去シ豫メ防害ノ方法ヲ施設ナスヘキ事
- 一、蠶業ノ如何ナルヲ知ラス發生蠶ノ蠶餘ヲ需養シ或ハ性質粗惡ノ蠶種ヲ飼育スル者有之損敗ノ域ニ陷ルハ畢竟受授ノ各自不注意ヨリ成立ツモノナレハ之ヲ救授スヘキ事
- 一、養桑ノ手當ナクシテ貰受ケタル蠶ヲ飼育スル者生長ニ隨ヒ桑葉ノ欠亡ニ困シ終ニ他人充備ノ養桑ヲ竊盜シ大ニ該業者ノ妨礙ヲ爲ス者比々有之ニ付一層取締方盡力ナスヘキ事
- 一、絲繭賣買ノ際御制規ヲ履行セス奸商ノ弊習ヲ以テ山斗リ乃至六寸法ヲ樹量ニテ取引ナカラシメンコトヲ遵守可致事

第五條 製絲場ヲ設立シ機械ヲ裝置スルハ勸奨ノ端ヲ起スノ要件ニシテ自今蠶業進歩ノ際不可缺ノ急務ナリ然リト雖實力ノ足ラサルヲ以テ將來ヲ期シ益々靜岡製絲場ノ盛大ナルコトヲ希望ス尤モ廣ク有志ヲ募リ釀金ノ方法ヲ編成シ協心同力ヲ以テ一大製絲場ヲ設立スヘキ事

第六條 他縣下ヨリ異質濫造ノ蠶種ヲ輸入ノ弊害ヲ防禦センカ爲御管内一般ニ懇篤ノ御諭告有之度事
蠶種製造組合申合規則ニ據リ本月八日ヲ以テ會議ヲ設ケ内國用及外國輸出ノ數量其適度ヲ失シ俱ニ損耗ヲ致スノ弊害ナカラシムコトヲ欲シ會同ノ議員ト共ニ營業上一般ノ便否得失ヲ審案細議シ本年製造ノ數額及該業諸般ノ措置定議決落ヲ要セリ然ルニ蠶桑開業ノ日淺キヲ以テ將來盛業ヲ期シ以テ養蠶進歩ノ方法ニ議案ヲ轉シ前件記載仕候決定ノ建議御採用有之度猶該業上ニ付新發明者ノ輩出ヲ企望シ或ハ善良ノ方法ヲ永遠ニ相圖リ候目途ニ付此議會ヲ年々開設仕度奉存候依之此段奉願候也

明治四十一年一月十二日

靜岡縣令 大道貞清殿

縣組頭取 飯塚 孫次郎

蠶種免許高、明治七年蠶種取締規則第一節ニ依リ、租稅寮ヨリ本縣へ下渡サレタル春蠶種免許印紙ハ二千八百六十五枚ニシテ、内千七百三十七枚ハ内國用ニ他ノ千二百二十八枚ハ海外輸出ニ屬ス、尙同八年以後蠶種製造組合條例第四條第一節ニ據リ、大藏省ヨリ本縣へ下渡シタル蠶種原紙印紙數左ノ如シ。

年次	蠶種原紙印紙數	年次	蠶種原紙印紙數	年次	蠶種原紙印紙數
明治八年	二、八九六枚	明治九年	一、五七六枚	明治十年	一、〇〇〇枚
		夏春蠶	一、一九五枚	夏春蠶	四、三二七枚
					一、五二二枚

規則廢止、明治七年二月第十九號蠶種原紙規則布告、同八年三月第四十七號、同十年四月第三十九號右規則中改正布告及同八年二月第三十二號蠶種製造組合條例並蠶種製造組合會議局規則布告、同年四月第

六十五號條例追加、同十年五月第四十二號初度夏蠶種製造法ノ布告等ハ同十一年五月四日廢止セラレタルヲ以テ一時本縣蠶種ニ關シ何等ノ取締ヲ爲サ、リシモ、同十九年ニ至リ縣令ヲ以テ蠶絲業取締規則ヲ發布シ、各郡ニ蠶絲業組合ヲ設置セシメテヨリ以來、同規則ニ依リ組合ヲシテ蠶種検査ヲ施行シ來リシカ、同三十一年蠶種検査法ノ發布セラレ、ヤ同法ニ基キ更ニ之カ取締ヲ爲スニ至レリ。

蠶種下渡ニ就キ申諭

明治十二年三月、安倍郡爲授産蠶種下渡ニ付申諭左ノ如シ。

茶ト絲トハ我邦ノ名産ニシテ洋人モ洵ニ稱賛スル所ナリ本部ノ如キハ此二種ヲ産スル最適應ノ地ニシテ且ツ從來自然生ノ山桑繁茂スルハ即チ天ヨリ斯チ爲セトノ賜ナルカ如シ然ルニ製茶ノ價格一旦非常ニ上リシヨリ銘々其業ノ一方ニシテ傾キ蠶業ノ事ヲ云フモノ尠ナク偶々其業ヲ云フ者アルモ風土ニ適セス人力ノ及フ所ニアラズト云フニ至レリ昔時未タ茶業ノ盛ナラサル時代ニハ本郡モ繭絲ヲ以テ賞獻セシコト古史ニモ見ヘタリサレハ此地固有ノ物産ト云フモノニシテ前條風土ニ適セスト云フカ如キハ皆誤レリト云フチ得ヘシ殊ニ近年ノ如ク茶價下落ニ至リテハ此一方ニシテ依賴スヘカヲサレハ固ヨリ自然ノ勢ニシテ營業者亦別ニ補助ノ方法ヲモ設ケスンハアルヘカラス依テ今回信州産精良ノ蠶種下渡候條毎戸懇切ニ飼立銘々養蠶ノ道相覺エ一時ノ射利ニノミ走ラス永ク一家ノ營業ト致シ候懷盡力可然此旨申諭候事

明治十二年三月

静岡縣勸業課

蠶種改良

明治三十一年蠶種検査法實施以來蠶種改良ノ目的ヲ以テ、本縣ハ同三十四年度ヨリ同三十六年度迄三ヶ年間蠶種改良費ヲ置キ、青熟、中巢、小石丸、又昔、白玉ノ四種ヲ飼育製造スル者ニ對シ、原種一蛾ニ付五

厘以内製絲用種一枚ニ付五錢以内ヲ下附シ種類ノ一定及原種製造ヲ獎勵シタル結果、以上四種ノ製造ハ俄ニ増加シ三十四年度ノ原種二十八萬餘蛾ナリシモ、三十六年度ニハ八十九萬餘蛾ニ達シ約三倍餘ノ増加ヲ示スニ至レリ。

▲蠶種改良費、各年度ニ於ケル下附金額左ノ如シ。

年度	金額	年度	金額	年度	金額
明治三十四年	一、五三五円	明治三十五年	一、五一三円	明治三十六年	一、五〇〇円

▲蠶種ノ數量、前項ノ蠶種改良費ヲ下附シタルモノノ左ノ如シ。

郡市	人數	原種				製絲用種			
		青熟中巢	小石丸	又昔	白玉	青熟中巢	小石丸	又昔	白玉
賀茂	八	四三	一〇六六	六九三	一八〇七	三	七一	四三	二八六
田方	八	一六三	五八八	七五九	九八六〇	一	一〇九	一〇九	一六
駿東	六	一八〇	四四七	八〇六	一三〇九三	一	一〇七	一〇七	〇七
富士	六	一三六	一〇四〇	一〇四四〇	二四二六八	一	一三	一三	七二七
庵原	一	二四六	七五	二二五	二二二五	一	三	三	一三
安倍	一	五三七	二九八	二七八	三三四四	一	三	三	八七六
志太	四	四〇六	五二六	九三六	九三四七	一	七	七	二四
榛原	二	一	三二七	三二七	三二七	一	一	一	一
明治三十一年計									

◎第四項蠶種ニ關スル事項 蠶種改良

明 治 三 十 五 年 度											四 年 度									
合 計	引 佐	濱 名	磐 田	周 智	小 笠	榛 原	志 太	安 倍	庵 原	富 士	駿 東	田 方	賀 茂	合 計	引 佐	濱 名	磐 田	周 智	小 笠	
一五九	一四	四	一六	二	九	一	六	一四	一	八	九	六	二六	二四	一	三六	一三	三	三	
一〇三七八六	四七三四	三三六四	一七三七	二二	三七九	一	五〇三	九一六	八一三	一四六九三	八八五五	九〇七六	四四五六八	四四五六八	二四九三	三九二〇	一〇八〇六	三二七〇	三二六	
一一一九五〇	三二七九	三九八五	三三三四	六六九	九六九	二二	五二	三〇八	五二	六〇	一〇〇三	二〇〇三	五三〇三	二二二四	一三二四	二六五二	三二七〇	一七九〇	六〇七九	
二五五六八一	二二二八九	一五六〇二〇	一五六〇二〇	二二五二	二七六八	二一五二	六三三九	四二六五	五七	一〇三七	二〇〇三	二〇〇三	一八四四五	一八四四五	七五九九	八〇二六〇	一七九〇	二二七〇	二七〇	
七六二〇三	二五三七	五七〇三	五七〇三	六八四五	一九七二	二六二	二二	二六七五	一三三九	一四〇七九	一五六七八	一五六七八	五二五四二	八〇六八	六三	一〇六八五	二二三〇	五七六七	九二〇五	
五四七六〇	三三三九	二三四一五	二三四一五	二六二	二六二	二二	二二	一九〇六四	一一三三	三〇四二	二六五三六	二六五三六	二八九九六	二七四八九	二二九八八	一一〇六八	九四	五七六二	三二六	
五三三三	八二	二〇六	二〇六	三八四	二七五	一七五	一四九	一一七三	二二四	九八〇	一〇八〇	一〇八〇	二八四四	二一四四	一四五	六五七	一三二七	二六五七	二六	
四一五三	五二	五三	五三	六〇	六〇	六〇	六〇	五五	五五	五五	五五	五五	二二四五九	二二四五九	一四五	六五七	一三二七	二六五七	二六	
五七三三	四七六	一四〇〇	一四〇〇	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	四四二七	四四二七	八九二	一六八八	九五一	九二二	五六	
二二四八	一	一	一	一	一	一	一	三〇七	三〇七	三〇七	三〇七	三〇七	二三四三	二三四三	二五五	二六三	二六三	二六三	一九六	
一七七三四	六二〇	二八七三	二八七三	七七四	七七四	七七四	七七四	二二八二	二二八二	二二八二	二二八二	二二八二	二二〇七二	二二〇七二	一四五	二六三	二六三	二六三	四八三七	一〇三八

明 治 三 十 六 年 度													
合 計	引 佐	濱 名	磐 田	周 智	小 笠	榛 原	志 太	安 倍	庵 原	富 士	駿 東	田 方	賀 茂
一六七	一五	五〇	一四	四	七	二	三	一五	二	九	六	九	三三
二二六八〇	二四五四	一〇一四三	三二八七七	一五九	一五四	一	五六	一六二六	九九五	二四七三八	三三三五	二八六一	八三
三二七五二六	五七三九	二四三四一九	二二六五四	一〇二	一〇二	一	一	二三五七	一	六六五	五八二	一	一
一八一三〇八	四三七〇	三三八九五	三三〇〇七	三三三三	一四七三	一四七三	五六七八	六四九五	一一三	一三二五	四〇五七	二七九	三四四九八
一四七三四	一〇六四〇	一六八三四	二五四六九	九七四一	一四七三	一四七三	一九四〇	五九九〇	一	一四七三	六七八〇	七二〇	五四一五
八九〇五二	八四六六〇	三六二八二	二〇七〇七	四四二七	二三八二九	一四二七	七六七四	三〇六八	二二二	二二二	四四九三	一五〇五三	四〇七五
七二五五	二九	一〇〇〇	二九八二	五四	一四二七	一四二七	一四二七	一四二七	一四二七	一四二七	一四二七	一四二七	二六
三二〇六	一	二七三	二八三〇	四八	四八	四八	四八	一四三	一四三	一四三	一四三	一四三	一四三
七二〇四	八五	一〇四七	三〇三三	一〇三	九二八	九二八	九二八	五三六	八	八	一三六	一三六	一三六
三九九六	九	一六八八	一六八八	一〇三	三九三	三九三	三九三	七〇三	七〇三	七〇三	七〇三	七〇三	九六六
二二五六	一一四	一〇五三	一〇五三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三	二六七	二六七	二六七	二六七	二六七	二二二

蠶種改良費下附手續

第一條 左ノ各項ヲ具備シ蠶種改良費ノ下附ヲ出願スルトキハ調査ノ上至當ト認ムルモノニ對シ原種一蛾ニ付五厘以内製絲用種一枚ニ付五錢以内ヲ下附スルモノトス 第一、蠶種改良ノ目的ヲ以テ青葉中葉小石丸又昔白玉ノ四種ヲ飼育製造スルモノナルコト 第二、原種ニ在リテハ四名稱ヲ通シテ百枚以上ヲ製造スルモノナルコト但シ製絲用種ハ一枚百蛾付ニ換算スルモノトス 第三、蠶種検査ニ合格シタル一化性ナルコト 第四、本縣内ニ於テ製造シタル蠶種ナルコト

◎第四項蠶種ニ關スル事項 蠶種改良

第三條 蠶種改良費ノ下附ヲ請求スルモノハ別記様式ニ依リテ毎年一月三十一日迄ニ蠶種改良費下附願ヲ所轄郡市役所ヲ經由シテ知事ニ差出スコトヲ要ス 様式 略ス

一化性人工越冬ノ起因

明治二十四年田方郡上大見村八木下彌佐ノ創業ニ係リ、天城山中ノ寒冷地ヲ利用シテ研究ノ結果、二十九年ニ至リ始メテ之ヲ飼育スルコトヲ得タリ、又賀茂郡ノ矢田部強一郎ハ同三十年始メテ天城風穴ニ於テ人工越冬法ヲ試ミタルニ、發生後レ桑葉枯凋セシ爲成繭ヲ見ルニ至ラサリシカ、越エテ三十二年ニハ漸ク若干ノ成繭ヲ得タリ、爾後改善ヲ施シタルニ依リ逐年良好ノ成績ヲ舉クルニ至レリ、此蠶種ヲ製造スルニハ産卵後凡ソ一週間ヲ經過シタル後、之ヲ冷室ニ移シ華氏四十五度以下ノ低温ニ感觸セシムルコト六週間以上タルヘク、尙之ヲ取り出ス際ニ於テハ徐々ニ温度ヲ上昇セシメ約二週間以上ノ日數ヲ以テ孵化セシムルナリ、本種ハ適當ナル貯藏期間ヲ與フルトキハ多數ノ發生ヲ見ルヲ得ヘシト雖、發生期間長キニ亘リ收蟻頗ル困難ナルノミナラス、多クハ晩秋ノ候ニ迫リ温度下降桑葉粗硬等ノ關係ニヨリ良成績ヲ得ルコト困難ナルノ缺點アレハ、發見後長年月ヲ經タルニ拘ラス其發達ハ遅々トシテ振ハス、四十四年ニ於ケル蠶種ノ製造額ハ原種五千十二蛾製絲用種八枚ニシテ、製種者ハ賀茂郡ニ於テ六人アリ、今茲ニ同人カ三十三年十二月大日本蠶絲會第五回品評會參考品トシテ、人工越冬法ニ依レル出殼繭並蠶兒ノ標本ヲ陳列シタル解説書ヲ掲クレハ左ノ如シ。

春蠶種ニ天然ノ經過ヲ達ケシメス人工即チ越冬法、摩擦法、通電法、浸湯法、浸鹽法等ヲ施シテ孵化セシムルコトヲ佛人其他ニ於テ試驗セラ

レタルコトハ已ニ一般ノ知ル所ナリ曾テ摩擦法、浸湯法ノ如キ舊西ク原蠶業試驗場ニ於テモ試驗シ其成績ヲ發表セラレタルトモ人工越冬法ニ至リテハ寒氣ヲ與フルニ氷室等ヲ設クル手數アルカ故ニ未タ成績ヲ公表シタルヲ聞カス余ハ近來各地ニ發見セラレタル風穴ヲ利用セハ容易ニ此ヲ行ヒ得ヘシト爲ス若シ其蠶兒ニシテ飼育ニ適スルモノタラハ所謂廢桑ヲ利用スルノ道モ開ケ且ハ風穴モ亦各地ニ鑿設セラレテ一般ニ貯藏シ得ラル、ノ曉ニ達セハ蠶業經濟上ノ利益尠少ナラサルコトヲ想ヒテ去ル明治三十年始メテ之カ實行ニ着手シタリ爾來今日迄繼續試驗ヲ重ネタルカ果シテ豫想ハ實際ニ適應シテ良好ナル結果ヲ收メ且ツ收繭上ノ利益ノミナラス蠶種製造上大ナル裨益アルコトヲモ發見スルヲ得タリ世ノ蠶業ニ從事スル學者實業家ヲ問ハス速ニ此法ヲ實驗シテ養蠶上一大効果ヲ舉ケラレムコトヲ庶幾ス左ニ之カ實行ニ供用シタル風穴ノ所在地及昨年ノ調査温度並三十年ヨリ三十二年迄三ヶ年間人工越冬法ニ關スル各種ノ方法順序及飼育ノ狀況ヨリ成繭製種ニ至ル成績ノ概略ヲ記シテ參考ニ資ス風穴ノ所在地ハ靜岡縣田方郡上大見村字渡場ニシテ風穴内各月ノ平均温度ハ左ノ如シ 寒暖計ハ 華氏也

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月上旬	同下旬	八月上旬	同下旬	九月上旬	同下旬
三二度	三三度	三三度	三四度	三五度	三六度	三七度	三八度	三九度	三九度	四三度	四五度

三十年ヨリ各年ノ貯藏越冬法順序左ノ如シ

年次	製種月日	入穴月日	出穴月日	貯藏日數	發生ヲ始メタル月日	出穴ヨリ發生始迄ノ日數
明治三〇年	六月十一日	六月三十日	九月十三日	七十四日	九月二十三日	十一日
三一	六月十一日	六月二十日	八月三十日	七十二日	九月八日	九日
三二	六月十一日	六月十三日	八月二十四日	七十三日	九月四日	十二日

毎年共發生ノ始メヨリ九日間ニ亘リテ悉皆之ヲ終レリ而シテ三十二年ニ於テ出穴ヨリ發生迄ノ日數割合ニ長カリシハ氣候ノ寒冷ナリシカ爲也三十年ニ於テハ又昔槿製無毒五蛾ヲ飼育シテ第三齡マテ齊一強壯ナル發育ヲ遂ケタリ當時發生期ノ遅カリシ爲隨テ桑葉落葉ノ期ニ追

◎第四項蠶種ニ關スル事項 一化性人工越冬ノ起因

リ蠶兒ノ飼育ニ適セザルヲ以テ遺憾ナカラ之カ飼育ヲ中止スルノ止ムヲ得ザルニ至レリ然ルニ當年ノ試驗ニ於テ蠶兒ノ發生シ得ヘキコト及其蠶兒カ飼育ニ適スヘキ事ハ確メ得タリ只此カ發生期ヲシテ可成早カラシムルハ飼育上最モ必要ノ事項タルコトト信スル也三十一年ニ於テハ又昔種製無毒五十六蛾ヲ前表ニ示スカ如ク越冬ノ手續ヲ經テ九月十日ヨリ同月十三日迄四回ニ掃立蠶量通計二匁ヲ得テ飼育シタルモ順次三十三日目ヲ以テ上簇ヲ初メ乃チ十月十二日ヨリ同十七日迄六日間ニテ悉皆上簇シ終レリ飼育法ハ別段ノ注意ヲ要スルコトナク極メテ容易ニシテ天然ノ氣候溫度ニ放任シタルニ蠶兒ハ少シモ故障ナク發育シ活潑強壯眠起齊一ニシテ病蠶ノ出ツルコトナク完全ニ上簇結繭シ實ニ左ノ收繭ヲ得タリ。

蠶量 二匁	上	繭	同 功 繭	下	計
同 一匁ニ對スル量	四一八	合	五四	合	五一二
收繭量	二〇九		二七	二〇	二五六

又上繭一升三百五十九匁ヲ繰繰シタルニ十一匁三分ノ絲量アリ此結果ハ始メテ宿志ヲ達スルコトヲ得テ充分ニ營利的事業トシテ利益アルコトヲ信スルヲ得タリ又此成繭ニ依テ製造シタル蠶種ヲ普通春季製造ノ蠶種ト同シク翌年春季ニ比較飼育シテ蠶兒ノ強弱、成繭ノ良否、絲質ノ善惡等差異少ナキニ於テハ蠶種製造上第一ニ蠶蛆ノ被害ナキト普通春季製造ニ供スヘキ種繭ヲ減少セシメテ生絲ヲ増額セシムル等ノ裨益少ナカラサルヲ信シテ蠶種製二百蛾ヲ製造シテ翌三十二年春季自ラ百蛾分ヲ普通蠶種又昔ト對照飼育シ百蛾分ハ他ノ者ニ飼育セシメタルニ自他發育ノ狀態成繭ノ外觀形狀ノ大小等普通蠶種ニ異ナル點ヲ見出ス能ハス反テ蠶兒比較的齊一強壯ナルカ如ク感セシメタリサレト精密ナル試驗ニ據ラサルカ故ニ成績ヲ明記スル能ハサルハ最モ遺憾トスル所也産卵數ハ普通春季ノモノニ比シ約三割ノ減少ナルカ故ニ百蛾分ニ對スル蠶兒頭數ニ著シキ差ヲ現ハセリ「中略」三十二年ニ於テハ又昔百四十五蛾ヲ前表ニ示ス如ク越冬セシメテ九月六日ヨリ收繭ヲ始メ毎日掃立同十一日迄ニ六回掃立蠶量合計五匁一分ヲ得テ飼育シタリ云々。

左ニ飼育中各齡ノ經過概況ヲ表示セントス但シ前表ノ如ク掃立六日ニ亘リ口數六區ニ分レタルヲ以テ給桑量ノ「表略」即チ九月六日初日ヨリ翌月十一日最後ノ上簇迄合計四十六日ヲ要シタリ而シテ初日ノ掃立區ハ齡中口數三十五日四時間ナルモ順次掃立ノ後ハ、ニ從ヒテ齡中日數多シレ溫度ノ漸次下降スルニ依リテ斯カル關係ヲ生ジタルナランモ亦時日ノ後ハ、ニ連レテ桑葉ノ硬化、滋養ノ缺乏等ヲ來シタルニモ大關係アルコトナラン然ルニ九月八日及同二十五日ヨリ二十三日ニ至ル三日間暴風雨アリテ桑樹ノ被害損傷甚シク桑葉ニ大缺乏ヲ來シタリシニ十月七日重子テ暴風襲來セシカハ桑園ハ一朝ニシテ殆ト落葉枯木ト變シ只僅ニ山谷ノ桑園屋後ノ桑葉ニシテ被害ヲ免レタルモノヲ撰ヒテ給與スルニ過キス多クハ黃綠色ヲ呈シ脆弱粗硬ナルニ拘ラス蠶兒ハ尙能ク之ヲ食シテ成長肥大シ五齡盛食期ノ蠶體量十頭平均八匁四分ニ達シ其無病強壯ナル一驚ニ値セリ試ミニ十一月一日掃立區ノ二齡以後ノ蠶兒ニ特ニ軟葉ヲ撰ヒテ給與シタルニ十日掃立區ニ比シ反テ一日間早ク上簇シタリ收繭成績左ノ如シ。

蠶量一匁對收繭表

容 量	上	同 功 繭	下	計
重 量	九六〇	一八四	九二〇	二二三
	九、三一〇	一、六五六	七九一	一一、七五九

容 量	上	同 功 繭	下	計
重 量	一九〇	三六	一八	二四四
	一、八二五	三二四	一五五	二、三〇五

以上ノ收繭高カ三十一年ニ比シ蠶量一匁ニ對シテ一升一合七勺ヲ減セルハ主トシテ昨年ノ氣候激變、桑葉劣惡ニ原因スヘシ、其繭ハ一升二百七十七顆重量九十七匁アリテ縮皺緊緩等外觀毫モ春蠶ニ異ナル所ナク色澤極メテ佳良ニシテ一見之ヲ區別スヘカラス尙他日ヲ待テ明細製絲試驗ヲ行ヒ絲質ノ如何ヲ調査センコトヲ期ス以上ニケ年ノ成績ハ以テ一般ノ概況ヲ窺フヘク將來蠶業上益々研究スヘキ價值アルコトヲ信シテ疑ハサル也是ヲ要スルニ尙一層掃立ヲ早カラシメ飼育料タル桑葉ニ可成滋養ヲ保タシムルノ手段ヲ施ストキハ決シテ春蠶ニ劣ラサルヘク蠶種モ亦人工越冬種ニ於テ製造シテ敢テ春季ノ製種ニ劣ラサルノ成功ヲ見得ヘキ也。

◎第四項蠶種ニ關スル事項 一化性人工越冬ノ起因

二化性人工三化ノ起因

明治三十四年引佐郡都田村瀧澤ノ某ナルモノ、磐田郡浦川村吉澤ノ一家ニ二化性秋蠶飼育ニ雇ハレタルカ、自家用蠶種ヲ製造シテ郷里瀧澤ニ持歸リ自家ノ天井裏ニ吊シ置キシニ、越年スヘキ蠶種ハ十數日ヲ經テ一部分發生セリ、依テ某ハ其旨ヲ同地ノ蠶種製造者タル松本茂八ニ語りタルニ、同人ハ惟ヘラク蠶種ヲ製造シタル吉澤ハ、瀧澤ニ比シ七八里ノ山奥ニシテ蠶兒ノ發生ノ如キモ通例五六日位後ル、地ナレハ、之ヲ瀧澤迄持出セシハ恰モ長野縣下ニ行ハル、窮理ニ比スヘキ關係ニハアラサルカ、元來蠶種ハ保護ノ關係ニ因リテ、二化性ノ如キモ或ハ性質ヲ繼續シ或ハ一化ニ變スルモノナレハ、此レヨリ發生スルモノニ相當ノ保護ヲ加フルトキハ、必ス三化ノ性質ヲ保タシムルコトヲ得ルナラムト、乃チ翌三十五年ヨリ引續キテ種々ノ試験ヲ行ヒタルヲ以テ三十七年ニ至リ稍理想ニ近キ人工三化蠶種ヲ製造スルヲ得タリ、本蠶種ヲ製造セシニハ先ツ第一化期ヲ普通ノ二化蠶初期ニ於ケルカ如ク飼育シ、製種後適當ナル時期ニ温度六十度内外ノ寒冷ナル處ニ貯藏シ、蠶卵戰色シテ將ニ發生セントスル時ニ取出シ、温度七十度乃至七十五度ノ場所ニ於テ發生セシメ飼育スヘシ、是レ即チ人工三化ノ原蠶也、然ルニ此期ノ飼育ハ出來得ル限り蠶兒ヲ強健ト爲シ、給桑量ヲ減シテ體軀ノ長大ヲ抑シ、且ツ成繭ヲシテ薄ク小ナラシムルヲ要ス、若シ然ラサレハ三化セサルヲ以テナリ、斯クシテ普通二十三四日ニシテ上簇シ、結繭化蛹後十日前後ニテ發蛾産卵ス、之ヲ人工三化秋蠶種トス、本種ノ蠶兒ハ強壯ニシテ飼育困難ナラス成繭ノ品質甚タ優良也、其發生ノ早キモノハ普通

ノ秋蠶ニ遲キモノハ晚秋蠶ニ最モ適當ナレハ、年々製造額増加シテ各地ニ普及スルニ至レリ、昨四十三年ノ蠶種製造者ハ十七戸ニシテ、引佐、濱名、磐田、周智、小笠、庵原、駿東、田方ノ各郡ニ亘リ原種四十萬九千五百蛾製絲用種五百六十八枚ノ製造額ニ達シタリ。

多化性蠶種ノ起因

明治ノ初年愛知縣地方ヨリ漸次傳播シ來リ、西遠白須賀町木下兼藏始メテ本種ヲ製造シ其後同地方ニ於テ之カ製種ニ從事スル者年ト共ニ加ハレリ、初ハ繭質至テ不良ナリシカ、當業者カ一意繭質ノ改良ニ努メタル結果、繭形豊大ニシテ絲量多キ良種ヲ製造スルニ至レリ、種類ハ大巢角又、小野田姫、龍田姫、天龍姫、濱名錦等トス爾來順調ノ發達ヲ遂ケ明治三十四五年ノ交頗ル盛況ヲ呈シ、多化性蠶種ノ本場トシテ全國ニ其名ヲ知ラレタリシモ、後風穴ノ利用ト共ニ種々ノ優良ナル秋蠶種ヲ製造スルニ及ヒテ、此等ニ壓倒セラレ次第ニ衰運ヲ來スニ至リタルヲ一テ、近來該地方ノ當業者ハ之ニ二化性風穴種ヲ掛合セ繭質ノ改良ニ努ムル所アリシカハ、在來ノ面目ヲ一新スルヲ得タリト雖、未タ二化性又ハ秋蠶風穴種等ニ及ハサルコト遠ク、加フルニ製種法ノ煩雜ナル等ノ缺點ニ依リ將來ノ發展ヲ期スルコト難カルヘシ、而シテ四十三年ハ第二化製造者十三人原種五萬七千九百八十八蛾製絲用種卅一枚、第三化製造者三十一人原種五萬六千八百九十六蛾製絲用種一萬三百八十三枚也。

中遠蠶種品評會

明治二十七年十一月豊田、山名、磐田郡蠶絲業組合ハ蠶種改良ノ目的ヲ以テ、静岡縣中遠蠶種品評會ヲ磐田

郡見付町ニ開催セリ、其概況左ノ如シ。

役員

總裁 小松原英太郎 管理 池田忠一 審査長 町田 磯
 審査委員 伊藤 精一 同 久永貞次郎 同 鈴木勝太郎
 同 青木 彌七

出品並受賞表

郡市	出品人員	出品点数	受賞人員	績				
				甲	乙	丙	丁	戊
賀茂、那賀	三名	四	三名	一	一	一	一	一
駿東	七	一一	三	一	一	一	一	一
富士	四	一〇	二	一	一	一	一	一
庵原	三	三	二	一	一	一	一	一
有渡、安倍	四	九	四	一	一	一	一	一
志太、益津	二	二	一	一	一	一	一	一
豊田、山名	三〇	四七	一八	四	一	一	一	一
數知、長上	七	一〇	五	一	一	一	一	一
濱名	四	四	二	一	一	一	一	一
引佐、鹿玉	四	四	二	一	一	一	一	一
合計	六四	一〇〇	四〇	八	三	一五	二二	五九

受賞者

等級	住所	氏名	等級	住所	氏名
一 等	賀茂郡 下河津村	三澤 芳太郎	三 等	長上郡 飯田村	渡瀬 源一郎
二 等	長上郡 飯田村	波瀬 源一郎	同	庵原郡 松野村	佐野 一太郎
同	志太郡 葉梨村	彦坂 才次郎	同	同河内村	源平 鶴十郎
同	駿東郡 北里村	岩田 健次	同	豊田郡 中瀬村	河合 伊吉
三 等	磐田郡 見付町	坂部 健次	同	同	鈴木 善三郎
同	駿東郡 北里村	岩田 健次	同	野部村	山内 市太郎

備考 三等以下省略

沼津支部種繭品評會

静岡縣蠶種同業組合沼津支部ハ其部内田方、駿東、富士三郡蠶種改良ノ目的ヲ以テ、明治四十二二ノ兩年種繭品評會ヲ開催シ本縣ヨリ審査員ヲ派遣シ、且ツ四十二年ハ事業奨励ノ爲金五拾圓ヲ交附セリ、今兩年ノ狀況ヲ記セハ左ノ如シ。

△明治四十一年、組合内蠶種製造者ハ自己並代理者飼育ニ係ル春蠶種ニ就キ、各地種類名稱ノ異ナルモノ毎ニ種繭一升宛ヲ出品スルモノトシ、出品繭ニ對シテハ肉眼及器械審査ヲ行ヒ、尙參考トシテ掃殻ノ良否、蠶量ニ對スル收繭額出殻繭、蠶種ノ肉眼鑑定並顯微鏡検査等ヲ斟酌シ審査ノ結果、優良ナルモノ三点ヲ撰出シテ其種繭ヨリ製造セル原種二十八蛾以内宛ヲ會員毎ニ分配シ、翌年ニ於テ比較飼育ヲ行ヒタル後、

更ニ第二回品評會ヲ開キ茲ニ初ノテ最優等種ヲ撰拔シテ一定種類ト爲サントス其第一回品評會ハ四十二年一月十日ヲ以テ駿東郡役所構内ニ開催セリ。

△明治四十二年、本年ハ獨リ春蠶ノミニ限ラス、越年蠶種ヲ製造スル者ハ總テ自己及代理者飼育ニ係ル種類名稱ノ異ナルモノ毎ニ、原種一枚並種繭出殻繭各一升宛ヲ出品スル義務ヲ有スルモノトシ、養蠶中二回、收繭ノ際一回審査ヲ行ヒ、更ニ繭及蠶種ニ就キ審査ヲ施行スル！共ニ、掃殻ト出殻繭ヲモ審査ノ一ニ加フ、斯クテ審査ハ四月ヨリ着手シ十二月ヲ以テ結了セリ。

出品並受賞表

郡市	出品人員	出品點數	優等	一等	二等	者
田方	二六名	九四點	二名	一名	四名	
駿東	二一名	一四三	四名	四名	一名	
富士	八	四〇	一名	二名	二名	
計	五五	二七七	六	七	八	

尙優等ノ撰ニ當リタルモノ並種類名稱ヲ舉クレハ左ノ如シ。

種類	名稱	住當	所選	氏名
春蠶	信濃	田方郡	山田村	山田末吉
同	又	駿東郡	大岡村	千里久時三郎

静岡縣種繭品評會

本縣蠶種同業組合並賀茂郡蠶絲同業組合主催トナリ、繭質ノ統一及蠶種ノ改良ヲ圖ランカ爲、明治四十三年度ヨリ種繭品評會ヲ開設シ縣ヨリ審査員ヲ派遣シ、且ツ毎年度事業獎勵上縣費參百圓宛ヲ交附セリ、各年度ノ概況左ノ如シ。

△明治四十三年度、第一回静岡縣種繭品評會ハ縣下蠶種製造業者ニシテ春蠶種ヲ製造スルモノハ、種繭證明書ノ異ナル毎ニ必ス原種一枚ト種繭五合出殻繭一升宛ヲ本會ニ出品スル義務有ルモノトシ、蠶兒掃立ノ狀況ヨリ蠶兒發育ノ良否、蟻量ニ對スル收繭量、種繭出殻繭及原種等ニ亘リテ、詳細ナル審査ヲ施行スルコト、セリ、斯クテ審査ハ四月ヨリ十一月迄ニ結了セシヲ以テ同月二十日静岡市物産陳列館ニ於テ桑園品評會製絲競技會ト共ニ褒賞授與式ヲ舉行シ、式後本多東京蠶業講習所長、松田農商務技師、霜東京蠶業講習所技手ノ斯業ニ關スル有益ナル講話アリタリ、出品及受賞數左ノ如シ。

出品並受賞表

種類	名稱	住當	所選	氏名
同	又	田方郡	對島村	安立元作
秋	和	駿東郡	深根村	田付佳四郎
同	大	同	鷹根村	小野猪太郎
同	大	同	深根村	土屋友次郎
同	和	同	同	同

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
白	又	又	又	白	青	又	青	熱	熱
玉	昔	昔	昔	玉	熱	昔	熱	庵原郡	庵原郡
小笠郡	賀茂郡	濱名郡	駿東郡	同	磐田郡	志太郡	高洲村	庵原郡	庵原郡
東山口村	稻生澤村	白須賀町	大岡村	袖浦村	笠西村	高洲村	高洲村	庵原郡	庵原郡
鈴木正一	土屋清次	野崎久平	千里久時三	石川勘三	戸倉惣兵衛	杉井金次	杉山百太郎		

備考 參等以下省略

役員、四十三年度第一回種繭品評會總裁並審査關係職員左ノ如シ。

總裁	石原健三	會長	小島源三郎	副會長	石川勘三郎
審査長	渡邊亥八	審査員	太田兵太郎	同	飯島善太郎
同	岩瀨爲治	同	阿部保太郎	同	金子保
同	伊藤誠太郎	同	市川和雄	同	柴田良一
同	大藤堅司	同	秋元棟平	同	内田新次郎
同	黒田龜次郎	同	石上巖太郎	同	久永貞次郎
同	鈴木一丸	同	立田清巳	同	桑原百合
同	鈴木七郎	同	田地川兵三郎	同	永井正夫
同	石川豊策	同	西尾知多	同	内藤忠平

規則、四十三年度ニ於ケル種繭品評會則左ノ如シ。

第一章 總 則

- 第一條 本會ハ静岡縣蠶種品評會ト稱シ静岡縣蠶種同業組合ノ主催トス
- 第二條 本會ハ繭質ノ統一及蠶種ノ改良ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第三條 静岡縣蠶種同業組合員ハ必ス本會ニ出品スルノ義務ヲ有ス

第二章 出 品

- 第四條 明治四十三年度ニ於テ春蠶種ヲ製造スルモノハ種繭證明書ノ異ナル毎ニ一点宛ヲ出品スルモノトス
- 第五條 出品ハ掃殻、蠶兒、種繭、原種並出殻繭ヲ出品スルモノトス
- 第六條 出品ハ一点毎ニ適當ノ容器ニ入レ種繭ハ五合出殻繭ハ一升原種ハ一枚トシ之ニ解説書ヲ付シ差出スモノトス但シ解説書ハ添付セサルモ差支ナシ

第三章 審 査 及 褒 賞

- 第八條 審査ニ關スル事項ハ審査長ノ決定ヲ待ツハ勿論ナリト雖其梗概ヲ示セハ 一、掃殻ノ良否 二、蠶兒發育ノ狀況 三、蠶量ニ對スル收繭量 四、種繭ノ審査 五、出殻繭ノ審査 六、原種ノ審査 七、其他審査上必要ト認ムル事項
- 第九條 審査終了シタルトキハ左ノ等級ヲ定メ褒賞ノ授與ヲ本縣知事ニ申請スルモノトス

一等賞、金貳拾圓ニ相當スル物品 二等賞、金五圓ニ相當スル物品 三等賞、金貳圓ニ相當スル物品 四等賞、褒狀

第十條 出品人ハ審査ヲ拒ミ又ハ再審査ヲ請ヒ授與ノ褒賞ヲ拒ミ若ハ審査ノ決定ニ對シ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第四章 會 務

第十一條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總裁 會長 副會長 一名 事務委員長 一名 事務委員 若干名 審査長 一名

第十二條 總裁ニハ静岡縣知事ヲ推戴ス

第十三條 會長以下ノ役員ハ總裁之ヲ囑託ス

第十四條 會長ハ本會一切ノ事務ヲ統轄シ副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス

第十五條 事務委員長及事務委員ハ會長ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第十六條 審査長ハ審査事務ヲ統理シ審査官及審査員ハ審査長ノ指揮ヲ承ケ審査ニ從事ス

第十七條 審査規程及處務細則ハ別ニ之ヲ定ム

第五章 經 費

第十八條 本會ノ經費ハ静岡縣蠶種同業組合ノ負擔トス

第六章 附 則

第十九條 本規則ニ改正ノ必要ヲ生シタルトキハ本組合評議員會ノ決議ヲ以テ加除修正スルコトヲ得

審査例則、蠶種製造者並製造代理人ニ付養蠶實況ヲ審査ス其項目ヲ分チテ左ノ三項トス。

第一章 蠶 况 審 査

第一、發生ノ良否、播種ヲ檢シ發生ノ良否ト蠶量ノ多寡トヲ考察シ最モ佳良ナルモノニ優點三十點ヲ附シ次第等差ヲ積ヘ最モ劣等ナルモノヲ零點ニ止ム

第二、發育ノ良否、養蠶觀察ノ際無病健全ナリト認ムルモノニ優點五十點ヲ附シ之ニ反スルモノニ零點ヲ附ス

第三、收購ノ多寡、蠶量一匁ニ對シ給桑量ノ多寡飼育溫度ト經過日數トノ關係及收購ノ内中繭下繭同功繭量ノ多寡ヲ調査シ優良ナルモノニ五十點ヲ附シ之ニ反スルモノニ零點ヲ附ス

種繭審査規則、審査ハ肉眼鑑定、器械検査ノ二トス。

第一、肉眼鑑定、一、色澤ノ良否、固有ノ色澤ヲ損セス齊一ナルモノヲ最上トシ之ニ三十點ヲ附シ其最モ不良ナルモノニ零點ヲ附ス

二、形狀ノ適否、形狀ハ左ノ事項ヲ標準トシ最上三十點最下零點ヲ附ス

イ、粒 數、一升ノ粒數二百三十乃至二百六十

ロ、長幅、長サ一寸一分幅五分

ハ、縷レ目、稍淺キモノ

三、緊緩ノ良否、繭層ニ厚薄ナク硬軟其宜シキニ適ヒ且ツ縮數粗密ニ失セス中庸ヲ得タルモノヲ最上トシ之ニ三十點ヲ附シ其不良ナルモノニ零點ヲ附ス

第二、器械検査、一、絲長、繭三顆ヲ解舒シ其長サヲ平均シ四百回以下ヲ零點トシ以上十回ヲ増ス毎ニ二點ヲ附ス

二、織度ノ適否、繭三顆ニ就キ織度ノ細太ヲ檢シ四百回ニ對シ二、七五乃至三、〇〇〔デニール〕ノモノヲ最上トシ之ニ三十點ヲ附シ上下共〇、一〔デニール〕ノ差アル毎ニ二點ヲ減シ盡シ盡クレハ零點ニ止ム

三、絲類ノ多寡、繭三個ヲ繰糸シ無類ノモノヲ最上トシ之ニ二十點ヲ附シ一類毎ニ

一點ヲ減シ盡シ盡クレハ零點ニ止ム

四、切断ノ多寡、繭三顆ノ繰絲中切断ナキモノヲ最上トシ之ニ三十點ヲ附シ一切斷毎ニ三點ヲ減シ盡シ盡クレハ零點ニ止ム

蠶種審査規則、審査ハ肉眼鑑定及病毒検査ノ二トス。

第一、肉眼鑑定、一、色澤ノ良否、色澤ノ良否ヲ檢シ左ノ附点ヲナス

最上二十點、最下零點

二、形狀ノ良否、形狀ノ良否ヲ檢シ左ノ附点ヲナス

最上二十點最下零點

三、産着産附ノ良否、産着産附ノ良否ヲ檢シ左ノ附点ヲナス

最上二十點最下零點

四、品質ノ良否、品質ノ良否ヲ檢シ左ノ附点ヲナス

最上二十點最下零點

第二、病毒検査、一、微粒子病毒ノ有無、原種母蛾全部ヲ検査シ成績ヲ調査シ無毒ノモノニ優點五十點ヲ附シ一匁ノ有毒歩合ヲ増ス毒ニ二點ヲ減ス減シ盡シ盡クレハ零點ニ止ム

△明治四十四年度、第二回静岡縣種繭品評會ハ、縣下蠶種製造業者ニシテ春蠶種ヲ製造スルモノハ、名稱ノ異ナルモノ毎ニ原種一枚種繭並出殻繭各一升ヲ出品セシメ、審査長ヲ土屋東京蠶業講習所技師ニ囑託シテ、十一月五日ヨリ同九日迄ニ審査ヲ結了セシヲ以テ、同十二日静岡市物産陳列館ニ於テ桑園品評會、製絲競技會ト共ニ褒賞授與式ヲ舉行シ知事ヨリ夫々褒賞ヲ授與セラレ、式後土屋技師、明石農商務技師、吉池大日本蠶絲會理事ノ斯業ニ關スル有益ナル講話アリタリ其成績左ノ如シ。

申 告 文

本會ノ出品ハ種繭三百二十七点ニシテ蠶種及出殻繭ハ各之ニ附帶セリ其數量ニ於テハ敢テ多シトスルニ足ラスト雖本出品ハ是レ皆本縣生産繭ノ源泉ニシテ之ヲ精粗優劣ハ直接ニ養蠶ノ豊凶ト生産繭質ノ優劣トニ關スルヤ論ナシ是ヲ以テ繭質ノ審査ハ一層綿密慎重ニ行ヒタルハ勿論附帶出品タル蠶種並出殻繭ニ對シテモ及フ限リノ審査ヲ遂ケ其成績ヲ參照シ遺漏ナキコトヲ期セリ左ニ成績ノ梗概ヲ述フヘシ。繭ノ色澤ハ概シテ佳良ナリシト雖往々乾繭及文繭ノ方法宜シキヲ得ス徹着甚シキカ爲審査ノ用ニ堪ヘサルモノ四十五点數量不足ノ爲ニ審査不能ノモノ二十六点ニ達セリ次回ニ於テ出品者ハ此点ニ留意アラムコトヲ望ム。

種繭ノ形狀ハ其宜シキニ適セルモノ稀ニシテ或ハ短圓ニ過キ或ハ長大ニ失シ之ヲ通觀シテ縣下ノ種繭ニ一貫シタル方針ナシト云フヲ憚ラズ即チ種名ヨリスレハ大部分ハ又昔、青熟、小石丸ノ二三種ニ過キスト雖其形態ニ至リテハ著シキ異同ヲ現ハセリ畢竟蠶種製造者カ自家蠶種ノ特徴ヲ誇ランカ爲ニ徒ニ外觀異様ノ繭ヲ選擇シ深ク繭質ノ適否ヲ研究セサルニ由ルナリ今ヤ繭質統一ノ必要ハ一層急巨切ナルノ時ニ際セリ速ニ一致改善ノ方法ヲ講セラレンコトヲ望ム緊緩及縮皺モ亦形態ト共ニ不同アリ就中繭ノ組織緩ニ過キテ所謂ボヤ繭ヲ混在セルモノ尠ナカラズ蓋收繭中ノ大粒繭ノミ選抜シテ種繭ニ供シタル結果各種固有ノ性質ヲ失ヒ前記不長ノ繭質ニ轉化シタルモノナリ今後選繭者ノ注意ヲ望ム絲量ハ繭層量ニ依リテ推算セリ該成績ニ依レハ審査繭二百五十六点中一升ニ對シ十匁以上ト認メタルモノ八十七点アリ又絲長ハ同上審査繭中平均五百回ニ充タサルモノハ五十九点ニシテ他ハ總テ五百回以上ヲ有セリ就中六百回以上ノモノ二十餘点ヲ出シタリ

之ヲ從來ニ於ケル本邦在來種ノ審査成績ニ對照スルニ敢テ遜色ナキモノト云フヘシ織度ハ其總平均ニ於テ適度ヲ失ヘレモノ多カラズト雖繭一頭毎ニ平均セル織度ニ在リテハ甚タ不同ナリ即チ同種中ニ於テ「デニール」以上ノ差ヲ現ハスモノ尠ナカラス是レ選繭法精シカラス繭質ノ雜駁ナルヲ證スル所以ナリ蠶種ハ卓越シタル優等品ヲ認メスト雖概シテ病毒ノ被害少ナキハ喜フヘシ然レトモ一般ニ調製法拙ニシテ外觀ノ美ヲ損スルモノ多シ例セハ各産卵區ノ位置及形態止シカラス或ハ框製器ノ内徑狹キニ過キ或ハ蛾尿ノ爲ニ甚シク汚染セラル、等ノ類是ナリ又蠶紙ノ紙質及印刷ノ様式等甚タ區々ニシテ取扱上ノ不便尠ナカラス此等ノ諸件ハ實質ノ良否ト直接ノ關係ナキカ如シト雖本縣蠶種ノ發展ヲ企圖スル上ニ於テ一致改良ヲ要スル点ナルヘシ之ヲ要スルニ本會出品ノ種繭中ニハ優等品ナキニ非スト雖大休ニ於テ其實質區々ニシテ統一セル方針ナキチ一大缺點トス宜シク審査ノ成績ニ鑑ミ其優秀ナル品種ヲ採リテ先ツ原種ノ統一ヲ圖ルヲ以テ急要ナリト認ム又品質固有ノ性質ヲ省ミス妄ニ大粒ノ種繭ヲ選抜スルカ如キハ品種本來ノ美質ヲ維持スル所以ニアラス種繭選別者ノ注意スヘキ要件ナリトス審査成績ノ梗概ハ以上列記スル所ノ如シ云々。

審査長 東京蠶業講習所技師 從六位 土 屋 泰

出品並受賞表

郡市	出品人員	出品点数	一等	二等	三等	四等	五等	計
田方	四名	三四点	一名					一名
駿東	二名	一九点						二名
富士	九名	一四点						九名
庵原	四名	一〇点						四名
安倍	八名	一〇点						八名
志太	七名	一〇点						七名
榛原	四名	五点						四名
								百三十五

同	會根 惠吉	同	柴田 真一	同	伊藤誠太郎
同	海鉾 彌左衛門	同	大澤 信輔	同	鈴木開之輔
同	鶴田 親哉	同	荒川 嘉三郎	同	杉山 綱次
同	池田 國太郎	同	前田 謙		

審査内規、審査ハ肉眼鑑定器械審査ノ二トス。

第一章 肉眼鑑定

- 一、色澤、色澤ノ良否ヲ鑑査シ最上參拾点最下零点ヲ附ス
- 一、形状、形状ノ良否及齊否ヲ鑑査シ最上參拾点最下零点ヲ附ス
- 一、緊縮、繭層ノ組織及縮皺ノ粗密手觸リノ硬軟等ヲ鑑査シ最上參拾点最下零点ヲ附ス
- 一、絲量、絲量ノ多寡ヲ鑑査シ春蠶繭ニ在リテハ一升ノ顆數ヲ調査シ内十顆ノ繭層ヲ衡リ之ニ依リテ一升ノ繭層量ヲ推算シ十三分アルモノヲ零点トシ以上一分ヲ増ス毎二一点ヲ加フ

第二章 器械審査

- 一、絲長、繭三顆ノ平均絲長ヲ檢シ一顆ノ平均絲長四百回以下ヲ零点トシ以上十回ヲ増ス毎二一点ヲ加フ
- 一、織度、繭三顆ニ就キ各其平均織度ヲ求メ且ツ其較差ヲ調査シ平均二、五「デニール」乃至三、〇「デニール」ヲ最上トシ十五点ヲ附シ之ヨリ上下共〇、二「デニール」ヲ増減スル毎二一点ヲ減ス
- 又平均織度ニ差ナキモノヲ最上トシ之ニ二十五点ヲ附シ三個中、織度ノ最モ太キモノト細キモノトノ差ヲ求メ〇、一「デニール」ノ差アル毎二一点ヲ減ス
- 一、額節、繭絲ノ際各繭初メ二百回ノ額節ヲ檢シ無額三十点一類毎二一点ヲ減ス
- 一、切斷、繭絲中ニ於テグレ絲纖切斷ヲ檢シ無切斷三三十点ヲ附シ對四百回一切斷毎三三点ヲ減ス

風 穴 調 査

名 稱	位 置	地 勢	沿 革	構 造
天 城 風 穴	田方郡上大見村後場入天城山字しむいや	天城山ノ北中腹ノ地域數百町歩ノ間浮石ヲ以テ疊マレタル中央ニ在リ、海抜二千五百尺ニシテ、周圍ハ老樹鬱蒼蒼蒼叢生シテ常ニ日光ヲ遮斷ス	往古噴火セシ横穴ト稱スル處ニ明治二十年ヨリ小規模ノ蠶種貯藏所ヲ發見シ同二十八年現今ノ風穴ヲ發見築造シ同三十三年株式會社トナシ逐年秋蠶種ノ委託貯藏ヲ増加スルニ至レリ、現今ノ貯藏所ハ先年本多蠶業講習所長ノ踏査設計ニ基キテ造レニ見ルハキモノアリ	第一號風穴ハ間口四間奥行一間半、深サ十二尺、四圍及天井等總テ石ヲ以テ築キ氣抜ヲ設ク、第二號風穴ハ間口八間、奥行三間、深サ二十尺ノ三層建ニシテ四圍ハ石ヲ以テ築キ上部ハ地平線ニ厚キ板ヲ以テ天井ヲ造リ氣
有 東 木 風 穴	安倍郡大河内村有東木字船久保	安倍峠ノ粗林中ニシテ、海抜四千尺ノ地点ニアリ、地勢北方ニ面シ陽光ノ照射稀ナルモ僅ニ夏日夕陽ノ斜射ヲ受ク	明治八年同村望月重太郎ノ發見ニ係リ同十五年宮原清左工門假貯藏庫ヲ建設シテ試驗的ニ蠶種ノ爲成績良好ナラサリシ越エテ十九年小規模ノ貯藏室ヲ造リ爾來引續キ貯藏ヲ行ヒ來リタリト雖依然トシテ發展ノ域ニ達セザリシ、然ルニ四十二年地方ノ有志者相謀リテ稍完全ナル貯藏庫ヲ建設シ從來ノ面目ヲ一新スルニ至レリ	地下室及階上二層建トナシ間口五間奥行三間床上ヨリ天井ニ至ル高サ九尺ナリ而シテ此下室ハ石ヲ以テ掘開スルコト數尺ニシテ石階以テ疊ミ底面ヨリ一尺ノ處ニ階室ハ木造リニシテ地平線上
都 田 洞 穴	引佐郡都田村瀧澤字本村	海拔一千二百尺	明治三十五年ノ創設ナリ	

貯藏枚數	約十五萬枚	約十萬枚	約一萬枚
	抜ヲ設ク入口ハ各二重ノ扉ヲ附ニ露出シ屋根ニハ三箇ノ亞鉛筒ヲ貫キテ換氣ノ用ニ供セリ		
風穴内	毎月平均温度左ノ如シ 一月 三十二度 七月 三十七度 二月 三十度 八月 三十九度 三月 三十一度 九月 四十二度 四月 三十五度 十月 四十二度 五月 三十六度 十一月 四十度 六月 三十六度 十二月 三十六度	毎月平均温度左ノ如シ 一月 三十度 七月 三十四度 二月 二十四度 八月 三十六度 三月 二十五度 九月 五十度 四月 三十一度 十月 五十二度 五月 三十二度 十一月 四十二度 六月 三十四度 十二月 三十二度	
温度			

共同蠶種貯藏庫

小笠郡蠶絲業組合ハ蠶種貯藏ノ完全ヲ期シ共同催青共同稚蠶飼育ノ獎勵實行ヲ期センカ爲組合事業トシテ蠶種貯藏庫ヲ建設セントシ明治四十三年度通常會ノ決議ニ依リ翌四十四年三月起工シテ同七月竣功セリ其概要左ノ如シ。

位置及構造、同郡掛川町舊城内龍華院内官有地ノ一部ニ敷地ヲ定メ、鈴木正一清水徳重設計委員トナリ、之カ設計ヲ爲シテ本縣渡邊技師並東京蠶業講習所ノ審査ヲ請ヒ、後榛葉忠藏、藤野藤平、鈴木幾次郎、鈴木正一ノ四名ヲ建築委員ニ擧ケテ工事ノ監督ヲナサシメ、金壹千四百圓ノ豫算ヲ以テ東山口村加藤藤重同榛葉松次郎ニ建築一切ヲ請負ハシメタリ、此貯藏庫ハ内外二重トナシ外庫ハ外法間口五間三尺奥行二間五尺面積十五坪五合ニシテ、内庫ハ内法間口二間一寸八分奥行一間二尺六寸三分高サ一間一尺八分容積二萬七百八立突餘ニ當レリ。

貯藏蠶種豫定枚數、原種用種約六萬枚ニシテ、貯藏監督ニハ鈴木正一同技術員ニハ村松秀次郎、竹林惣次郎等專任シ四十四年ヨリ貯藏ヲ開始セリ。

静岡縣原蠶種製造所

明治四十四年度ニ於テ、縣立農事試驗場養蠶部ハ優良種ヲ選抜飼育シテ、原種八千五百五十二蛾ヲ縣下蠶種製造者ニ配付シタリシカ、時代ノ要求ハ縣立原蠶種製造所設置ヲ促シ、四十四年十一月通常縣會ニ之カ豫算ヲ附議セルニ其設置ヲ可決シタルニヨリ四十五年三月縣告示第九十五號ヲ以テ原蠶種製造所ヲ安倍郡豊田村字曲金ニ設置シ、四月一日事務開始ヲ公示セラレ、次テ三月三十日縣令第三十六號ヲ以テ職制ヲ發布シ又處務規程ヲ定メラル、而シテ事務所及蠶室ハ從來農事試驗場附屬建物ヲ充用シ、又本春面積二十一坪ノ蠶室ヲ新築セリ、今其職員及職制ヲ掲クレハ左ノ如シ。

職員

- 所長 渡邊 亥八
- 技手 阿部 保太郎
- 同 金子 保
- 書記 杉浦 一然
- 助手 酒井 實

職制

第一條 原蠶種製造所ハ知事ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一、原蠶種ノ製造並配付

一、蠶業ニ關スル試験及調査

第二條 原蠶種製造所ニ左ノ職員ヲ置ク

一、所長 一、技手 一、書記

第三條 所長ハ知事ノ命ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理シ部下職員ヲ指揮監督ス

技手ハ所長ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス

書記ハ所長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第四條 所長事故アルトキハ上席職員其職務ヲ代理ス

第五項 養蠶ニ關スル事項

養蠶ノ開發

▲養蠶發展策商議、明治十一年養蠶及製絲ノ發展方法並該事業ニ關スル一切ノ得失等協議ノ爲、一月七日ヨリ三日間組合頭取検査人及篤志者ヲ縣廳ニ招集シ各自意見ヲ陳述セシメタリ、參列者左ノ如シ。

住	所	氏	名	住	所	氏	名
志太郡	島田宿	八木	素吉	駿東郡	新橋	根上	林平

同	治長右衛門請所	原川	治平	有度郡	吉川村	吉川	五左衛門
同	伊久美村	西野	平四郎	豊田郡	深見村	伊藤	藤七郎
駿東郡	長澤村	贊川	五平	同	中瀬村	木下	木下茂平
山名郡	高部村	高山	藤七郎	同	同	木下	木下茂平

贊川五平ヨリ提出シタル意見書大要左ノ如シ。

我駿東郡ノ養蠶ハ追年進歩ノ景況ニ有之候へ共他ノ製絲ト蠶種製造トハ見込相立チ兼メレハ專ラ桑樹ヲ繁殖セシメント存候而シテ桑樹ヲ繁殖セシメンニハ不毛ノ荒蕪地ヲ開墾スルニ可有候茲ニ駿東郡ニ小區ニ跨ル一小洞即チ愛鷹山開墾ノ義ニ付去ル明治七年一月中右入會者十五ヶ村戸長連印ヲ以テ御廳へ奉懇願候處御採用不相成候由實ニ遺憾ノ事ニ候次ニ静岡ト我近傍ナル韭山トノ兩所ニ於テ製絲開墾相成候ニ就テハ猶一層養蠶ニ心掛ケレハ進歩相見ユヘク候乍併國産繁殖ノ業タルヤ中等以上ノ人ヨリ先導スルニ非サレハ行ハレス其兆シ專ラナリト雖先ツ發起スヘキ者ハ區戸長ニアリ候然ルニ今ハ地租改正等事務繁多ニシテ先導スル能ハス且ツ諸費ハ莫大ナルニ依リ困難一方ナラスシテ疲弊ノ頂点ニ達シ候爲ニ大小ノ百姓中己カ持高ヲ維持スル者ハ最大ノ僥倖ナリト云フヘケレハ早ク此時機ヲ經過シ恢復ノ秋ヲ待ツノミニ候。

▲養蠶經濟調査、明治十一年ニ至リ養蠶製絲ノ業ハ追々衆庶ノ注目スル所トナリタルヲ以テ、縣勸工所

ニ於テ静岡製絲場主友野與左工門ヲシテ、信、奥ノ蠶種ヲ飼育シ且ツ製絲試験ヲ施行セシメテ養蠶業收支計算ヲ明ニシ、以テ斯業發展ノ資ニ供セリ。

養蠶掃立入費計算書

金額	數量	單價
三〇〇〇	原種 三枚	一枚ニ付壹圓
四〇〇	桑葉 六貫	掃立ヨリ初度休起キ迄、日數八日、壹圓ニ付十五貫
七五〇	人夫 六人	同 一日一人拾貳錢五厘
二一〇〇	桑葉 三十一貫五百匁	初度起キヨリ二度起キ迄、日數七日半、壹圓ニ付十五貫目
一六八七	人夫 十三人五分	同 一日一人拾貳錢五厘
四二二四	桑葉 九十七貫二百匁	二度目休起キヨリ三度目休起キ迄、日數八日、壹圓ニ付二十三貫目
二四一〇	人夫 十九人三分	同 一日一人拾貳錢五厘
八七四四	桑葉 二百十八貫六百匁	三度休起キヨリ四度目休起キ迄、日數八日半、壹圓ニ付二十五貫目
二五五〇	人夫 二十人四分	同 一日一人拾貳錢五厘
一七八一四	桑葉 四百六十三貫二百匁	四度目休起キヨリ結繭迄、日數八日、壹圓ニ付二十六貫目
四八〇〇	人夫 三十八人四分	同 一日一人拾貳錢五厘
計 四八四七九	但シ原種一枚ニ付十六圓十五錢	

金額 數量 單價 金額 數量 單價

圓 上繭 壹圓ニ付 圓 玉繭薄皮繭 壹圓ニ付

五二〇〇〇 二五五升 五升 四・五〇〇 四五升 一〇升

計 五五〇〇〇 差引七圓貳錢收入増加

▲縣税金貸下、 明治十一年安倍郡二小區各村ハ茶價下落ノ爲、斯業益々衰頽ヲ重子タレハ之カ挽回策トシテ該地方ニ山桑多キヲ利用シテ養蠶ヲ爲サントシ横濱生絲問屋小林彦助ヨリ蠶種百八十枚ヲ取寄セ、全

區二十二ヶ村便宜ノ地十九ヶ所ニ共同飼育所ヲ置キ、甲信地方ヨリ教師六名ヲ雇入レ養蠶ノ經營ニ着手シタルモ、創業ノ際夥多ノ資本ヲ要スルカ故ニ、本縣ハ之ニ對シテ斯業開發ノ爲、原種一枚ニ付七拾五錢ノ割合ヲ以テ金百參拾五圓ヲ貸下ケ、繭賣却後無利息ニテ償却セシメタリ。

▲秋蠶試驗、 明治十一年管内ノ秋蠶繭ヲ縣廳ニ集メ、君澤郡大場村内田宰兵衛、同土肥村城所元七、富士郡松岡村武澤正義、静岡吳服町友野與左工門、榛原郡大幡村飯塚孫次郎、豊田郡中瀬村河合三郎ヲ繭品評會人ト定メ、且ツ絲質試驗ヲ行ヒ以テ秋蠶獎勵ノ資トナセリ、其成績左ノ如シ。

絲長	三八〇	繭節	大七五 小一一	織度	二・二	強力	一〇	伸力	二〇・六六
----	-----	----	------------	----	-----	----	----	----	-------

共進會並品評會

▲伊豆蠶繭並品評會、 明治十一年六月伊豆國第八大區及同國生産會社ノ企畫ヲ以テ蠶繭並品評會ヲ開設セリ、之ヲ本縣ニ於ケル繭品評會ノ嚆矢ト爲ス、而シテ本會ニ盡力セラレタル者ハ、同會社取扱人宇野範右衛門、同頭取人仁田大八郎、第八大區長小川實、同遠藤文作等トス、受賞者左ノ如シ。

等級	住所	賞者	等級	住所	賞者
一等	丹那村	川口秋平	一等	大竹村	田中鳥雄
同	仁田村	仁田大八郎	同	山還耕社	

等級	種類	住受	氏賞	者名	等級	種類	住受	氏賞	者名
一等	葦	山	宇野	範右衛門	三	湯ヶ島村			足立儀
二等	大場	村	大村	和吉郎	四	梅名村			外六郎
三等	嶋之上	村	小川	實	五	葦山			外六郎
同	御園	村	遠藤	文作	六				外六郎
同	塚原	新田村	中村	半七郎	七				外七郎
同	葦山		木村	忠七	八				外七郎
同	下田	彌次右衛門	井上	勝右衛門	九				外七郎
同	細毛	村	吉木	八郎	十				外七郎
同	上白岩	村	小永井	治郎兵衛	計				七名
同	肥田	村			外				八名
計					計				七名

▲農學社審査會、明治十二年六月掛川農學舎ノ無盡藏舎ニ於テ、養蠶獎勵ノ爲生繭審査會ヲ開キ、同月七日ヨリ十三日マテ開場ヲ縦覽セシタメリ、受賞者三等以上ノ者左ノ如シ。

等級	種類	住受	氏賞	者名	等級	種類	住受	氏賞	者名
一等	山名郡堀越村	永井	五郎作		三	佐野郡高御所村			戸田元八郎
二等	佐野郡掛川町	山崎	與助		同	長谷村			高島甚三郎
同	城東郡和田村	角皆	仲藏		同	富部村			田宮熊吉
同	佐野郡新村	宮澤	金吉		同	下又村			大川原嘉作
同	掛川町	夏山	良一		同	城東郡横砂賀村			杉浦修竹

同 山名郡國本村 足立英三郎 同 新野村 増田万右衛門

▲製茶繭審査會、明治十二年九月周智郡主催製茶繭審査會ヲ同郡森町ニ開催シタリ、三等以上ノ者左ノ如シ。

等級	種類	住受	氏賞	者名	等級	種類	住受	氏賞	者名
一等	春蠶	宇刈村	西尾	八十八	二等	夏蠶	五川村		多米八郎
同	山繭	天宮村	牛山	此雄	三等	生絲	森町		甲藤泉一
同	夏蠶	同	内藤	新太郎	同	春蠶	間詰村		奥宮善五郎
同	春蠶	同	同	人	同	秋蠶	天宮村		村松半三郎
同	同	同	長谷川	四郎治					

▲豊田外五郡繭品評會、明治十九年七月同品評會ヲ豊田郡中瀬村ニ開會シタルカ、佐野、城東、周智、山名、磐田、豊田、長上、引佐、鹿玉ノ九郡ニ亘リテ出品數九十八点ニ達セリ、審査ノ成績左ノ如シ。

飼育法	出品人員	受賞者
火助育	四名	一名
天涼育	一名	三名
不清育	四名	八名
計	八名	一六名
	八名	一四名
	九名	一九名

最近ニ於ケル品評會ハ各部屬事項中ニ掲載ス。

養蠶傳習所

明治十六年縣費ヲ以テ教師ヲ聘シ、富士郡岩松村ニ養蠶傳習所ヲ開設シタリ、是レ本縣ニ於ケル傳習所ノ嚆矢ニシテ、十五年十一月富士郡岩松村影山秀樹及山崎農夫藏ヨリ縣廳ニ意見書ヲ提出シ、傳習教師ノ派遣ヲ申請セシニ因ル今其大要ヲ摘載シテ當時ノ狀勢ヲ知ルニ便ナラシムヘシ。
原文ノ儘載ス

「前略」東海農區聯合共進會第一回第二回御開成候ニ就テハ私共儀昨明治十四年及本年本縣蠶審査係ノ命ヲ拜シ當時審査スル處ニ據ルニ昨十四年ノ如キハ各縣下ノ出品致テ優劣無之候處本年ニ至リ候テハ實ニ著シキ差違ヲ生シ現ニ本縣下出品スル處ノ繭五等ノ品位ニアルモノ縣下ノ高等ニシテ實ニ切齒ニ耐ヘサル也「中略」改良ノ原因ヲ探知スレハ奥州清涼育ニ倣フモノニ出テ其法交々巧拙アリト雖最モ其術ニ精シク良品ヲ得ルモノハ福島縣下岩代國伊達信夫ノ兩郡ニ止マレリト聞ク故ニ明年該地方ヘ傳習生二名若ハ三名差遣センコトヲ同者ト協議既定候ヘ共此傳習生タルヤ明後年ニ非スシハ之ヲ本縣下ニ實施スルコト能ハス又願フニ該事業一年後ル、時ハ縣下三州ノ大不利タルコト論ヲ俟ヌ彼ノ地ヨリ最モ熟練ナル者ヲ招集シテ飼育法ヲ改良シ洽ク之ヲ同業者ニ傳ヘ年ヲ出スシテ縣下三州ニ普及シ御國產一層増殖ヲ謀リ度因テ明年福島縣下ヨリ養方熟練ナル教師一名官費ヲ以テ御雇入被下度切望ニ堪ヘス候「後略」

同十四年山梨縣ニ開催セラレタル東海農區聯合共進會出品審査ノ結果ハ左ノ如シ。

新清 溫育	飼育溫度	同日數	成繭一升ノ數	同一升ノ量	同一個ノ長	原紙一枚ノ量
七五以上		三二以下	二〇〇個	一六匁	二、七〇〇尺	三〇〇匁
古清 涼育	七〇	四二以上	四〇〇	一一	一、〇〇〇	三〇〇

當時縣下ノ狀勢ハ一般清涼育ナリシカ、初メ養蠶ノ先進地タル福島縣ニ行ハレタルヲ大ニ改良シタルニ依

リ、斯業ノ盛ナル地方ニハ廣ク歡迎セララル、ニ至リ、且ツ東海農區聯合共進會審査ノ結果ハ明ニ清溫育ノ優良ナルヲ示シタルヲ以テ、愈々飼育改良ノ頗ル急務ナルヲ認メタレハ前項請願者ノ意思ヲ容レ、縣費ヲ以テ教師ヲ備聘シ傳習所ヲ開設スルニ及ヘリ、此時福島縣廳ノ紹介ニ依リ岩代國伊達郡保原村保進社長渡邊孫兵衛ノ手ヲ經テ菊田和平ヲ教師ト爲シ、期間六十日ニシテ手當六十圓外ニ往復旅費四拾參圓貳拾錢ヲ支給セリ、傳習生ハ縣下各郡役所ニ照會シテ一名宛ノ割合ヲ以テ募集シタレトモ、中ニハ應募者皆無ナル郡モアリシヲ以テ全体ノ志望者ヨリ十五名ヲ採用セリ。

明治十七年濱名郡新所村伊藤精一ヲ縣雇ニ採用シ、六十日間傳習所教師トシテ、舊長上郡下堀村佐藤仲司ノ設立ニ係ル養蠶傳習所精蠶社ヘ派遣セリ、同年養蠶指導獎勵ノ爲、土屋眞及鈴木彌十ヲ採用シテ縣御用掛ヲ命シ、專ラ飼育法ノ改良ニ努メ翌十八年傳習ヲ開キタリ。

同二十二年ニハ前年限リ縣御用掛ヲ廢シ更ニ縣費補助ノ制度ニ改メ、各郡ヘ養蠶傳習所ノ設置ヲ獎勵シタル結果、左記二十ヶ所ノ傳習所開設ヲ見ルニ至レリ、因ニ二十七年迄補助ヲ繼續ス。

名	稱	位 置	傳習生數	擔 當 者	住 所	氏 名
賀茂郡	養蠶傳習所	河内村	二五名	矢田部 強一郎	賀茂郡 片瀨村	森田 龜次郎
田方郡	養蠶傳習所	肥田村	三二	小永井 治郎兵衛	福島縣 伊達郡	鈴木 彌惣八
駿東郡	養蠶傳習所	北久原村	一二	鮎澤 治郎吉	同	鈴木 庄作
富士郡	養蠶傳習所	松岡村	三九	嶋崎 仁作	富士郡 岩本村	嶋崎 仁作

富士郡養蠶傳習所	北山村	?	竹川 宗作	富士郡 岩本村	山崎 傳太郎
庵原郡養蠶傳習所	小島村	七四	高山 紳太郎	庵原郡 辻村	丸田 轡三郎
有度安倍郡養蠶傳習所	羽鳥村	二五	石上 久左衛門	福島縣 伊達郡	鈴木 惣右衛門
同 支部	柳島村	二六	朝倉 六郎	埼玉縣 秩父郡	井上 芳太郎
志太益津郡養蠶傳習所	細島村	五四	?	福島縣 伊達郡	白井 九右衛門
榛原郡養蠶傳習所	川尻村	八二	半田 半七	同 同	白井 なほ
周智郡養蠶傳習所	?	?	内藤 農夫	埼玉縣 賀美郡	久保 彌曾次郎
中遠養蠶傳習所 第一教場	見付町	三九	中根 與平治	豊田郡 新野村	芝山 佐吉
同 第二教場	恒武村	二五	山口 直治	同 同	同 同
同 第三教場	下野部村	七一	?	同 同	同 同
敷知郡濱松養蠶傳習所	連尺町	三一	?	濱名郡 白須賀宿	木下 兼藏
同 堀江養蠶傳習所	堀江村	三三	?	敷知郡 大知波村	岡田 玉次郎
引佐郡中川村養蠶傳習所	中川村	三八	伊藤 要藏	同 和田村	藤田 和三郎
同 井伊谷養蠶傳習所	井伊谷村	二九	?	埼玉縣 賀美郡	鹽原 龜吉
城東郡養蠶傳習所	池新田村	?	伊藤 治三郎	福島縣 伊達郡	佐藤 長七
佐野郡掛川養蠶傳習所	掛川町	二〇	橋本 與平治	?	?

明治二十八年千二百四拾五圓ヲ支出シテ教師ヲ雇入レ、各郡蠶絲業組合ニ派遣シテ、傳習所又ハ巡回ノ任ニ當ラシメタリ。
尙同年顯微鏡使用法及蠶体解剖術傳習所ヲ設置シタル梗概左ノ如シ。

開設場所	科目	日	講師	師	期	間	生徒數
駿東郡佐野、御殿場 長上、敷知、濱名郡蠶絲業組合開催	顯微鏡使用法 微粒子検査法	町田	青木 彌七	二	二	十日	一九名
駿東郡蠶絲業組合	蠶体解剖	町田	横 七	二	二	十一日	二四名
							三七

翌二十九年蠶業教師備入費千五百貳拾七圓ニシテ傳習概況左ノ如シ。

傳習所名	位	置	生徒數	教	師
賀茂郡養蠶傳習所	上河津村	三橋重平	三〇名	西ヶ原卒業	大竹作之助
駿東郡養蠶傳習所	高根村	塚原	二四	高山社卒業	伊藤榮三郎
富士郡養蠶傳習所	傳法村	傳法	二〇	同	山崎 又次
志太郡養蠶傳習所	六合村	東光寺	二〇	競進社卒業	原 久次郎
榛原郡養蠶傳習所	初倉村	塚本頼一郎	一六	高山社卒業	久森 紫朗
小笠郡養蠶傳習所	東山口村	伊達方	二五	競進社卒業	笠原國三郎
周智郡養蠶傳習所	山梨村	山科	二〇	西ヶ原卒業	片山 莊吉
磐田郡養蠶傳習所	下阿多古村	音谷	二〇	同	桑原 留吉
濱名郡養蠶傳習所	新 野末	喜藏村	二〇	同	山崎 備雄
引佐郡養蠶傳習所	伊平村	池田傳藏	一五	高山社卒業	菅家 和藏治

巡回地區	教	師	巡回地區	教	師
田方郡 甲區	高山社卒業	木村定吉	巡回地區	高山社卒業	福島群平
田方郡 乙區	同	宮下代吉	巡回地區	同	長岡辰吉
		庵原郡			
		安倍郡			

同年顯微鏡使用法傳習所ヲ置キタルモノ左ノ如シ。

開會場所 科 目 期 間 生徒數
 志太郡蠶絲業組合 顯微鏡使用法、微粒子検査法 自八月五日 至同十八日 一四日 七名

翌三十年蠶業教師備入費千五百圓ニシテ傳習概況左ノ如シ。

傳習所名	位	置	生徒數	教	師
賀茂郡養蠶傳習所	竹麻	村	二〇名	西ヶ原卒業	小林董治
駿東郡養蠶傳習所	鷹根	村	一五	高山社卒業	伊藤榮三郎
同	泉	村	一六	同	同
小笠郡養蠶傳習所	東山	村	一六	競進社卒業	笠原國三郎
磐田郡養蠶傳習所	見付	町	二三	西ヶ原卒業	桑島留吉
引佐郡養蠶傳習所	東濱	村	一九	高山社卒業	菅家和藏治

巡回地區	箇所數	教	巡回地區	箇所數	教	師
田方郡	二〇個	高山社卒業 木村定吉	志太郡	一〇二個	競進社卒業 原久次郎	

富士郡	六	同	淺見喜代藏	榛原郡	二〇	高山社卒業 設樂清衛
庵原郡	五	同	福島群平	周智郡	一六〇	西ヶ原卒業 高橋雅之助
安倍郡	一二	高山社卒業 長岡辰吉	濱名郡	二	高山社卒業 山口喜三郎	

斯ノ如クシテ同三十三年度ニ至リ、蠶業教師備入費ヲ廢シテ蠶業改良補助費千參百圓ヲ置キ、毎年各郡蠶絲業組合ニ百圓宛ノ豫算ヲ以テ蠶業改良費補助規程ニ據リ蠶業講習會、養蠶傳習所、巡回教師、消毒器購入、蠶種共同購入等各郡蠶業ノ状態ニ鑑ミ、可成急施ヲ要スル事業ヲ撰ハシメ以テ事業獎勵ニ努メタリ、尙養蠶傳習所及巡回教師ヲ設置シタルモノヲ舉クレハ左ノ如シ。

明治三十三年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員	氏名
駿東	模範養蠶所	—	三個	三三〇圓	三名	高山社卒業 小林長十郎
富士	養蠶模範所	—	四	一〇〇	一	—
庵原	同	—	二	八九五	一三	—
榛原	同	—	三	二六〇	三	競進社卒業 鈴木正一
小笠	養蠶傳習所	—	二	二〇〇	二	同 笠原國三郎

明治三十四年度